



文

ドライデンの樂歌



坪内雄藏

詩歌に三昧あり、抒情、叙事、劇の三なり。此中抒情の種類最も多し、我が短歌長歌のたぐひより卑歌俗謡唱歌樂歌に至るまで、あらゆる風詠の作を含む、すべて情感を叙するをもて本領とするなり。さてこゝに樂歌といふは樂器にあはせて歌ふべき者をいふ。

ジョン・ドライデンは英國十七世紀文學の名家なり、今よりは二百六十餘年前に生まれたり。其の著す所、諷刺詩あり、叙事様の長歌あり、批評的論文あり、又樂歌あり、譯詩あり、又數十篇の劇の詩(脚本)あり。其の縦横の才、該博の學、當時能く並ぶものなかりき。但し其の最も多作せし脚本にも傑作と稱すべきものなし、其の作の數は二十有八篇に及びたりと聞こえられたれど、今は其の中の一編だにも殆ど世にもてはやされず、また殆ど讀むべき價值なし。蓋しいづれも皆當時の好尚に媚びて作りたるものにて、眞の劇詩たるの妙趣を欠けり、さすがに大才の筆なるゆゑ、詞句の

『アレキサンドルス、フィースト評釋』



面白きは甚からぬど、篇中の人物いづれも生氣無き木偶人に似て、自然活動の妙なし。所詮ドライデンが長所は、かゝる種類の作にあらで、寫景狀物又は叙事、又は諷嘲、又は議論めく詩歌にあり、特に其の律呂を整ふるの如意にして、韻を踏むの自在なる、恰も日常語を綴るが如く、一氣呵成、咄嗟篇を成すの技倆、前後其の比いと稀なり。批判家此の故に彼れを評して、ドライデンは詩人にあらずして、技倆家なりといふ。さもあれ彼れが一代の作豈悉く技工のみの作ならんや、下に評釋する樂歌の如きは、明に古今英詩中の絶品にして、優にドライデンの詩名をして長く後世に垂れしむるに足る。もと此の歌は一千七百九十七年に、一音樂會の囑托に應じて作りしものにて、一篇の大意は、主として音樂の偉力を稱ふるにあり。案ずるに基督教會の尊信する諸尊者のうち、シ、リアといふ女尊者は、専ら音樂を司る聖者なり、此の女の世に在りしや、道心堅固にして樂を好み、且最も其の技に秀で、はじめて風琴を製作せりといふ傳説あり。この故にシ、リア女は斯道の守護尊者と崇められ、年毎に其の祭典ありき。ドライデンが樂歌は、此の例祭の會に用ひしもの、其の末段に該尊者を頌するの句あるは之れが爲なり。

ドライデンと世を同じうせし貴紳にポリングブローク侯といふあり、其の所記によれば、一日侯ドライデンを訪ひしに、彼れ曰ひけらく、予は昨夜徹霄せり、其の故は、我が知れる樂人某々等、予に命じて女尊者シ、リアを祭るの歌一篇を作らしめき、予うべなひて案を構ふる程に、興來たり神浮かれて、しばらくも息ふ能はず、立地に筆を走らして此の篇なりぬと、すなはち一篇の樂歌を示しぬ云々と。是れ下に擧ぐる『アレキサンドルの盛宴』なり。かゝる絶唱の僅に一夜間に作られしは驚絶の事なりとマコーレーのいへる理なり。傳説によれば、ドライデンみづからも此の作を評して「空前絶後の樂歌」なりといへりきどか。よしや此の自讃は溢美なりとするも、其の古今有數の樂歌たるは疑ふべからず、又拙くともドライデンが作中の絶唱たるは萬口一致する所なり。

本來此の作は樂曲なる故、趣味の半分は、其の風調の妙にあり、翻譯若しは訓釋するに及びては、其の妙なかば沒了す。讀む人あらかじめ此の理を會得し以下訓釋を讀むのかたはら、毎に原詞に心を注ぎて、其の風調(律呂)の美を味はんと務むべし。

アレキサンドルの盛宴  
Alexander's Feast;

『アレキサンドルス、フィースト評釋』



又の名 音楽の偉力  
Or, (The) Power Of Music.

此の篇は歐南マセドンの王安キサンドル(歴山大王)がヘルシア國征服後の盛なる賀宴を主題とし、楽匠チモシウスが奏樂の妙を骨子とせり。此の故に題して「歴山が盛宴」とし、又名けて「音楽の偉力」といへり。樂の調の轉ずるにつれて、且喜び且悲み、忽ち愁へ忽ち怒り、百戰百勝の大歴山王が七情、一老樂師が指頭に翻弄せらるゝの狀、殆どまのあたりに観るが如し。下の原詞につきて如何に句々言々、飛舞活動するの妙あるかを見よ。

第1

此は、なごや王者(の座)に、關したる、獲られたる、ペルシア人(を)  
It was at the royal feast, for Persia won.  
By Philip's warlike son,  
Aloft in awful state,  
The godlike hero sat  
On his imperial throne;

其の、威風なる、公座(を) 列なごや 國(を)  
His valiant peers were placed around,  
其の、人々の、眉(を) 顔(を) マニマニ  
Their brows with roses (and) with myrtles bound  
(So) should desert in arms be crowned.  
其の、可愛(な) 花(を) 其の、側(を)  
The lovely Thais, by his side,  
其の、如(く) 咲(き) 花(を) 東(の) 嫁(を)  
Sate, like (a) blooming Eastern bride,  
今(は) 花(の) 公座(に) 坐(す) 其の、美(の) 誇(り)  
In flower of youth (and) beauty's pride.  
其の、人(を) 其の、人(を) 其の、幸(を)  
Happy, happy, happy pair!  
何(れ) 何(れ) 何(れ) 英(雄) 英(雄) 英(雄)  
None but the brave,  
None but the brave,  
None but the brave,  
何(れ) 何(れ) 何(れ) 英(雄) 英(雄) 英(雄)  
None but the brave deserve the fair;

そは(故)マセドン王(王)ピリップの勇敢兒マルキサンによりて獲られたるヘルシア國に關したる王者が盛宴の席にてなりき(下に物語る事件の起こりしは)。高々といひめしき容態にて彼の神々しき英雄マルキサンは坐しぬ、其の皇帝の高みくら



其が勇猛なる公卿等は、皆周邊に列なれりき。此の人々の前額は薔薇番石榴ローズヒップもて纏はれて。武に勳あるともがらはかくなん加冠せらるべかりし。

彼のうくしきティス女は、王がかたへに坐を占めき、咲匂ふ東洋の新婦の如く、今を春への妙齡にて、今を盛りの嬌態にて、たのしき、たのしき、たのしき妹背や、

英雄ならぬ何者か、

英雄ならぬ何者か、

「英雄ならぬ何者か、傾國の美に當すへき。」

薔薇番石榴をもて花盤とするは希臘古代の宴席の禮なり。武勳ある者のかゝる冠を戴き以て其の榮譽を表する蓋し其の當を得たりといふ意。ティス女はアレキサンドルの嬖姫、ペルシア征討の軍に隨行せりと傳へたり。東洋の新婦とはペルシアの妙齡女といはんほどの義、古代の列國中、ペルシアは豪奢浮華、就中服装の富麗をもて聞こえたり、こゝはティス女が盛粧の美を稱せるなり。youth of flower とあるは「今を盛りの妙齡」といはんほどの意なり、beauty's pride の pride は「全盛」の義なり、本文の訓は更にまた義譯せるもの。末段の意は「窈窕たる淑女は君子の好

述」の義に近し「かゝる英雄なればこそかゝる佳人と相伴へ、英雄ならぬ何者か、かゝる佳人に相當せんといふに外ならず。妙は重に風調にありと知るべし。

第の二

チモテウス(ン) 提をらひて 一や五提へ  
Timotheus, plac'd on-high

中 提(ン) 提(ン)  
Amid (the) tuneful-quire,

With-lyng-fingers touched (the) lyre;  
提(ン) 提(ン) 提(ン) 提(ン)

(The) trembling notes ascend (the) sky,  
提(ン) 提(ン) 提(ン) 提(ン)

And Heavenly-joys-inspire.  
提(ン) 提(ン) 提(ン) 提(ン)

The song began from-love,  
提(ン) 提(ン) 提(ン) 提(ン)

Who left his-blissful-seats above,  
提(ン) 提(ン) 提(ン) 提(ン)

(Such-is the power-of-mighty-love.)  
提(ン) 提(ン) 提(ン) 提(ン)

(A) dragon's-fery-form-bely'd the-god;  
提(ン) 提(ン) 提(ン) 提(ン)

Sublime on-radiant-spires (he) rode,  
提(ン) 提(ン) 提(ン) 提(ン)

When (he) to-fair-Olympia press'd  
提(ン) 提(ン) 提(ン) 提(ン)



(And) while (he) sought her—snowy—breast;  
雪の姫を求めて  
 Then round—her—slender—waste (he) curled  
身を丸めて  
 And stamped (an) image—of—himself, (a) sovereign—of—the—world.  
己の影を踏んで 世界の王  
 (The) listening—crowd admire (the) lofty—sound,  
聴衆は高き音を賞讃す  
 (A) present—deity, (they) shout around!  
神は現る、彼等は周囲に叫ぶ  
 (A) present—deity, (the) vaulted—roof rebound.  
神は現る、穹窿の屋根は反響す  
 With ravished—ears  
驚かされた耳で  
 (The) monarch hears  
王は聞く  
 Assumes—the—god,  
神を仮する  
 Affects—to—nod,  
頷くを装ふ  
 (And) seems—to—shake—the—spheres.  
天地を揺るがせんとす

樂師チモシウスは唱歌班のうち一段高く据ゑられて、疾く飛び走る十指もて、其の琴線に觸れければ、打震ふ爪音は、虚空に高く沖りて、天上界の歡樂を鼓吹し來たる。(まづ第一の樂の歌は彼の希臘の神シヨウツが御事よりぞはトまりける。(あはれ)彼

の御神は、其の天上の至福なるおましごころを去りましたぬ。(オリムピアさいふ姫にあこがれ、浮いれいでさせたまひける)あはれ戀の力のいかトさは(神代さへも)かくぞかし。

「さて彼の神は神龍の烈火の姿にいでたちたまひて、きらめく螺旋の形して、大空高く乗りましぬ。(これはこれ彼の神がうつくしのオリムピアに呼びひまし、折ぞかし、雪はづかしき其の肌)に近よりまし、租ぞかし。

「さるほどに彼の姫がやさしき腰に、七重に入重に彼の神纏ひつきましてきてなん神の御影をしるし殘させたまひける、是れ現世の君ぞかし。

オリムピアはアレキサンドル大王の母なり。王はシヨウツ神の子なりといふ荒唐無稽なる傳説あり、チモシウスが歌ふ所は是れなり。「神龍の烈火の姿」とあるは猛火烈々として其の身邊に燃ゆる火龍の謂なり。シヨウツ火龍に化してオリムピア女に構ひぬといふ傳説あり。PRESSEDの原意は「近寄る」といふに外ならぬ、其の次行の意より推せば「よばふ」など譯して當然なり。Soughtもほゞ「近寄る」の義に近し。「雪はづがしき胸」は乳のあるあたりをいふなれば「肌」と訓せんかた原義に近かるべし。「腰に纏ひつきて其の面影を印す」云々は、やゝ猥雑の嫌ある故にや、教科書



などにては毎に省略する所なれど、神代の架空談なれば、必しも咎むまじくや。未段は此のオリムピア女に生ませたるが、今現世に君臨せるアレキサンドル大王なりとの意なり。

感に入つたる群衆はけだかき音色をほめた、へげにやこゝに在す大王は現の神と  
と四面に呼ばへば、尊厳も(これが爲に震動して)うつゝの神と反響す。

王は恍惚と臨きほれて、竊に天神シヨーツに擬し、いかめしげに點頭く爲し、又天上の全世界をゆりうごかすらん面地す。

アレキサンドルが自稱して神子と誇り、尊大倨傲なりし由は史にも見えたり。今チモシウスが樂歌の中に我れを神子なりと歌へるを聴き、且其の諷諷の徒が異口同音に我れを神としあがむるを視て、意氣軒昂、心ますく傲る、すなはち得々として天神シヨーツをもてみづから擬し、いかめしげにうなづく爲し、且天上界を震蕩するの容を粧ふ。案ずるに希臘の詩仙ホームアルが作『イリアム物語』の中にいへるあり、シヨウツ嚴然として點頭するときは天上天下震ひ動くと。本文の句は此の意に因めるなり。

III.

(The) praise—of—Bacchus then (the) sweet—musician—sung.

Of—Bacchus ever—fair—and—ever—young.

The—jolly—god in—triumph comes;

Sound—(the)—trumpets, beat—(the)—drums;

Pushed with—(a)—purple—grace.

He shows his—honest face.

Now give (the) handboys breath; he comes, he comes.

Bacchus, ever—fair—and—young.

Drinking—joys did first ordian;

Bacchus' blessings are—(a)—treasure.

Drinking is—the—soldier's—pleasure;

Rich the—treasure,

Sweet the—pleasure,



苦勞の後の悦び(く) Sweet—is pleasure—after—pain.

次には(酒神さあがめらるゝ)バッカス神の設美歌を妙なる樂師は歌ひけり、(彼の)こしなへに麗しく且こしなへに嫩若きバッカス神が設美歌を。

バッカス神はヨーロッパの子、専ら宴樂を司るの神、容類常に紅を帯びて童の如く麗しと傳へたり。此の一段は樂師チモシウスが飲酒の快樂を歌うて大王の心を動かし、神明に擬せる彼れをして、忽ち俗界の人たらしめ、且興じ且誇り、殆ど狂人の如くならしむるの端以下たくみに琴線を弄してまのあたりにバッカスを呼びいだし來たる。

(見よや見よ)彼の快活の御神はいと樂しげに降り來ます、

「昭らせや喇叭を、打てや太鼓な、

「から紅にうつくしく、照りがとやきて彼の神は、(今しも)美貌をあらはしたまふ、

「いで堅笛に息を入れよ、彼の神來ます、彼の神來ます、

「こしなへに麗しく且嫩若き、バッカスぞ、はじめて酒宴のたのしみを此の世に定め行

ひたまひし、(あはれ酒道の祖神ぞ、)

「バッカスが おほみめぐみぞ實なる、

「酒宴ぞ 猛者が 快樂なる、

「たふさしや此のたから、

「あなうまし此の快樂、

「うまし苦勞の後の快樂は、

「からくれなるに美しく云々は酒醴を帯びたるをいふ。原文に purple(紫)とあれど「紅」の義なり、紫色を紅色に代用する例、彼なたの詩歌には間々あることなり。原文に in triumph とあるは熟語なり、「いと樂しげに」などはんほどの義。 honest とすふ語今は「正直」「貞良」などいふ意義にのみ用ふれど古くは「端麗」といふ意味あり。堅笛の原語「ホーホイ」はほい我が尺八などに似たる樂器なり。堅笛と訓じたるは急に好譯語を得ざるが爲のみ、尙再考すべし。

其の四 IV.

其の聲になげやちて Soothed—with—the—sound of—the—king—grew—vain;

あふさ(聲が)て)聲を打ち響くをさげり Fought—all—his—battles—over—again;

『アレキサンドルヌ、フイースト譯釋』



And—thrice—he routed—all—his—foes,—and—thrice—he slew—the—slain.

The—master—saw—the—madness—rise,

His—glowing—cheeks, his—ardent—eyes;

And while—he—heaven—and—earth—defied,

Changed—his—hand,—and—checked—his—pride.

He—chose—o—mournful—muse,

Soft—pity—to—infuse:

チモシウスが妙曲に「王が心浮きたちてげに我ればかり多福なるいみじき猛將は  
あらじ」と思ひ、心傲り意たかぶり、過去の戦勝を想ひ起こし、過去の勇戦を追憶し、恍  
々然たる心の目のうちに、往時の戦況を書きいだし來たる。樂師北叟<sup>ほくそう</sup>をみして王  
が狂熱の騰上するを見、王が頬のかやくを見、王が目の熱するを見て、時分よしと  
うなづき、王のかくとしも知らずして、勢ひに乗り傲りに傲りて「天何爲者ぞ、地何爲  
者ぞ、汝等よく朕に敵し得るや、來たれ」と心理にいひのしり誇り狂ふもなか  
に、突然と樂のしらべをあらため、沈痛悲哀なる曲を奏し、王が慢心を挫折し來たる。

すなはち彼れは一轉して、極めて悲哀なる主題をえらびぬ、そは王が驕慢なる胸中  
に仁慈のこゝろを注入せんと欲せしなりけり。

thrice は「幾たびも」の意、必しも「三たび」の意にあらず。「已に殺せるをも」とは往時の  
戦にて殺せる敵を又あらためて敵とし更に戦ひつゝあるやうに想へる也、すなは  
ち過去の戦勝を追憶せるさまを形容したる書きぶり也。「頬のかやく」とは上氣  
して紅を潮せるをいふ。「天地をのししれる」とは上の釋に見えたる如く「天地にむ  
かひて戦を挑むをいふ。muse とは「曲」と訓じて可也、本來は「音樂の力」など譯すべき  
ものなり。soft pity の soft は「やんじき」なを訓ずべし「仁慈」の二字に「やんじき」とい  
ふ意こもりたれば前訓には省きたり。

彼はは戰勝樂をなぐ(故々レニミン王)をライニス(北叟)を歌ひぬ

By—too—severe—a—fate,

Fallen, fallen, fallen, fallen,

Fallen—from—his—high—estate,

And venter—in—his—blood.



亡なきは命のやほにのぞく(臣下の爲に)見捨てられ  
 Deserted at his utmost need  
 我の恩徳のほかに(臣下の爲に)見捨てられ  
 By those his former bounty fed,  
 亡なきは命のやほにのぞく(臣下の爲に)見捨てられ  
 On the bare earth exposed he lies,  
 (亡なきは命のやほにのぞく)見捨てられ  
 With not a friend to close his eyes.

樂師は大王をして仁慈の情念を起こさしめんために、疊に王の爲に大敗し、ついで逆臣の毒手にかゝり、落行く途上にて横死せし故、ペルシア王テライアス三世が最後を題とし、盛者必滅、有爲無常の哀しむべき原理を諷し來たる。歌うて曰はく、見ずや彼のペルシヤ王を、威權富貴兼ね備はり、徳はた高かりし王にあらざや、然るに宿命のまぬがれがたく、無慚にも忽然と高き位よりまろびあちて、滾々として流れいづる血汐にまみれぬたうちたまひき。憫れむべしきのふまでは、一天萬乗のきみとあほがれし身ながらも、けふ大危急のきはにのぞみ、あさましや此の年ごろ、恩を施してはごくみし、譜代の腹心にも見すてられ、剩へ彼等の爲に、非業の最後を遂げたまひ、席だに敷かぬ土の上に、最後の正念をすゝむべき友ひとりだに得る能はで、弊履の如く投げいだされ、雨露にさらされて臥したまふ。これを思へば憂き世

の中は、げに頼まれぬ夢まぼろし、如露亦如電、うたかたの、あはれはかなし、あなう世の中]と。

「テライアス」はペルシア國の王にして、歴山王と連戦して連敗し、竟に臣下の爲に獄せられし人なり。「そのたかみくら」まことは、高き身分又は位置などあるべきなれど「まろびあちつる」といふ比喩よりいへば「高御座」の譯や、叶へり。「眼ふたぐべき友」とは彼あなたの手ぶりなり。人の臨終には、心友縁者其の枕邊に臨み、慰諭介抱して瞑せしむるならはしなり。さもあれ此の一句の本意は、臨終を看護する友ひとりだになくて、いふに過ぎず。「さらされて」必しも「雨風にさらされて」といふ意に泥むの要なし「投げいらだれ」は「さらは」は「程」の意勝ちたりと思ふべし。

我の恩徳のほかに(臣下の爲に)見捨てられ  
 With downcast looks The joyless victor saue,  
 Revolving in his altered soul  
 世のやがての變遷を  
 The various turns of chance below;  
 亡なきは命のやほにのぞく(臣下の爲に)見捨てられ  
 And now and then a sigh he stole,  
 亡なきは命のやほにのぞく(臣下の爲に)見捨てられ  
 And tears began to flow.

『アレキサンデルス、フロイーン』



此の悲しく哀れなる琴の曲を聴くうちに、王が心は漸く傷み、昂然たりし意氣も頓に沮み、虚榮の頼むべからざるをも感じ、人生のはかなきをもさとり、そめつ、すなはち悵然として、黙坐し、無常轉變の種々相を念ふ、竟にえたへずして、吁嗟し、涙の襟をうるほすを覺えず。 below とは下界、即ち世の中といふ意。

第五

The—mighty—master smiled—to—see  
That—love—was—in—the—next—degree:  
It—was—but—a—kindred—sound—to—move,  
For pity melts the mind to—love.  
Softly sweet, in—Lydian—measures,  
Soon—he—soothed—his—soul—to—pleasures.  
War, he—sung, is—foil—and—trouble,  
Honor—but—an—empty—bubble,  
Never—ending,—still—beginning,

Fighting—still,—and—still—destroying,

If—the—world—be—world—thy—winning,

Think—O—think—it—worth—enjoying:

Lovely—Thais—sits—beside—thee,

Take the—good—the—gods,—provide—thee.

さるほどにいみじき樂師チモシウスは王のいたく悲しめるを見て、又もや曲調を變せんと欲し、やがて莞爾として打笑みぬ。蓋し此の次に來たらん主題は、戀に外ならずと知ればなり。具にいへば前は功名の念に訴へ、次に惻愴の情に訴へ、種々に大王を弄び來たりたり、もはや煩惱の司といふ戀愛の情に訴ふべきなり、是れ適當の順序なりと思へり。さて惻愴の曲より轉じて、戀愛の曲に移るはチモシウスに取りてはいと容易きことなり、此の二者は旨意ほゞ相似たるが故に、只少しく曲調をあらため、手をかふれば足りしなり。何となれば、およそ惻愴の情はあつから人の心を溶解し、やがて愛憐の情を惹起すればなり、慈悲は愛戀の又の名なればなり。すなはち希臘古樂式のうちにても、最も愉快なる、最も柔和なる、最も可



憐なる樂式として知られたるリテア式の樂曲をえらび、やさしく面白くかなでいでたり。さるほどに靈妙なる音樂は、たちどころに王が憂愁を拂ひ、王が心、また頗るたのしめり。樂師すなはち歌うて曰はく、兵戰は苦なり、また勞なり。名譽は只うたかたのみなわのみ。あながちに兵戰をのみ思ふ勿れ、あながちに名譽に懸念する勿れ。所謂名譽は夢幻泡沫、あるかと思へば無し、消えぬと思へば在り。消えぬればとて歎くことかは、また、ちまちに生ずるなり、詮ずるに無始無終のものぞ。さてまた所謂兵戰は苦なり、勞なり、宛然に無終の脩羅闘諍、とこしなへに争ひ闘ふをつとめとし、またとこしなへに破壊毀損するをつとめとす。是れ豈至極の苦楚にあらずや。嗚呼大王賢なるか、何ぞひたすらに此の勞苦をよろこび、彼の泡沫にのみ心を注げる。世の中別に樂しむべきことあり、何を苦みてか、勞苦と空名とに偏局するを須ひん。蓋し大王の大兵を擧げて普く天下を征したまふは、略るべき價值ありとちばせばならん。我が有とする價值あらんか、思へ、あゝ思へ、そはまた享樂すべき價值あらんを。御覽ぜよ、御座の側には、顔花の如き絶世の佳人在り。あはれ、ティス女は現世間の至寶にあらずや。已に美人備はり、富貴威權備はる、人

間の福分何時の時か之れに越えん。皆是れ神祇の大王に賜ふ所。享樂せよや

くゞ。

The many rend the skies with loud applause;  
So love was crowned, but music was the cause

The prince, unable to conceal his pain,

Gazed on the fair

Who caused his care,

And sighed and looked, sighed and looked,

Sighed and looked, and sighed again.

At length, with love and wine at once oppressed,

The vanquished victor sunk upon her breast.

樂師曲を奏し終れば、公卿皆歡呼し喝采す、其の聲大空をつんざくが如し。嗚呼天上天下、戀ばかり尊きものなし、佳人あり、また何をか望まん、王もまか思ひ、衆はたまか思ひぬ。さもあらばあれ、戀愛といふものをして、かゝる大なる譽を得しめたる



は、ひとへに音楽の魔力なり、此のくしきいさほ立てたるは、ひとへにチモシウスが妙技なり。見よ、絶代の英傑アレキサンドルも、彼れが妙手に翻弄せられて、百感錯出、悲喜紛糾し、心緒方に糸の如く亂れ、或は盛衰の常なきを歎き、或は威武の頼みがたきを感じ、テイスが可憐なるを見るにつけても、我れ若し一朝運極まり、彼のテライアスと最後を同うせば如何。鴻龐たる領土は惜むに足らず、只汝を奈何せん、嗚呼汝を奈何せんと、更に愀然とテイスを凝視す。やがて得堪へずして長吁し、又凝視し、又長吁し、又凝視し、又長吁す。かくすること幾回か、竟に酒と愛と合一の力に、身心ふたつながら綿の如く、惘々然として眠を催し、嬖姫が膝を枕として、其の胸下に沈睡す。

最後「敗勝王」の句は作家の巧を弄したる所、百萬の勁敵にも打勝ちし王なれど、戀と酒とは敗れたりとの意。Sunkは胸に倚りかゝりてグタリと首うなだれたる形を指す、椅子などにグタリと身を投ぐるやうに倚りかゝるにもいふ。勿論こゝにては寐入るといふ意をも含ませたり。

「どいきつきては」のあたり、原詞を読みあちはひて風調の妙を知るべし。

註の六  
XV

Now strike the golden-lyre again;  
A-louder—yet, and—a-louder—strian.  
Break his bands—of—sleep—asunder,  
And—rouse—him, like—a—rattling—peal—of—thunder.  
Hark—hark, the—horrid—sound  
Has—raised—up—his—head;  
As—awaked—from—the—dead,  
And—amazed—he—stares—around  
Revenge,—revenge,—Timotheus—cries,  
See—the—Furies—arise;  
See—the—snakes—thut—they—rear,  
How—they—hiss—in—their—hair,  
And—the—sparkle—that—flash—from—their—eyes!



Behold—a ghastly band,  
 Each—a torch—in his hand!  
 (彼等)の如く、非業の最後を遂げたる希臘兵の怨靈や  
 Those—are—Grecian—ghosts,—that—in—battle—were—slain,  
 華の如く、燭の如く

And—unburied—remain—  
 Inglorious—on—the—plain:  
 (死に)ての辱めを蒙る  
 Give—the—vengeance—due  
 報復の機を  
 To—the—valiant—crew.

Behold—how—they—toss—their—torches—on—high,  
 How—they—point—to—the—Perean—abodes,  
 And—glittering—temples—of—their—hostile—gods.

此の段尤も妙をきはむ。讀みてこゝに至れば作家も、テモシウスも大王も、テイスも、公卿も、讀者も、皆混合して一となり、彼れ當年の聽衆か、我れ當年の聽衆か、殆ど辨知する能はざるの感あり。すなはち何者のいふともなく、天外に聲ありて叫んで曰はく「面白やく、いでく」更に調をあらため、悲壯の曲を奏し來たれ、激越の調を

聽かしめよ。高くく尙高く、否尙高き悲壯の志らべを。いざや天地を震撼する彈撥を試みよ。歴山が睡魔を驚破し來たれ、彼れが懶眠の緒を斷てや。雷の如く彈じ來たれ、霹靂の如く彈じ來たれ。已にして琴線數彈、梁棟之れが爲にゆすり動く。狂濤の突として寄するが如く、山嶽の俄に崩るゝが如し。其の怖ろしき物音に驚破や大王驚きさめ、愕然としてかしらを擡げ、さながら死者の蘇したる如く、且呆れ且驚き、恍惚として四邊を睨視す。テモシウス斯くと見て、急彈急撥、千變萬化の奧秘を盡くし、絶壯、絶慘、絶悽、絶愴の調を奏し來たる。即ち歌うて曰はく「復讐せよく、見よや嘔起するフィウリーズを、フィウリーズの希臘古代の女神、三昧より成る一昧は、鮮血をミギリと稱す専ら復讐をつかさどる怖るしき女神也、眼より。見よやそが飼へるあまたの毒蛇が鎌首もたげ、ねたくりて、女神等が頭髮の中に出沒し、愴々と聲をなして打鳴くを。且見よ女神が眼中より、ひらめきいづる猛火の光を。見よくかして、群れ來たる、世になきたまの一團を。手に手に松炬ふりてらし、むらがり來たる一隊を。嗚呼あれこそは戦場にて、非業の最後を遂げたりし陸下が旗下のつはものぞや、ペルシア勢と戦ひて、荒野の露と消えたりし希臘兵の怨靈ぞや、葬られもせ



で淺ましく、荒野が原に取殘されし、希臘兵の怨靈ぞや。あはれ此勇敢なるやからの爲に、相當の復讐せよ、修羅の妄執を晴らさせよ。見よ、如何にかのともがらが炬火高く投げあげ、怨重なるヘルシア人が住居の方へ指さしするか。彼等が仇たる異國の神祇の、金碧燦爛たる社殿を指さし、頻に炬火打ふるは、疾く焼きうてとの合圖ぞや。疾く焼き拂へ、焼きうちてよと、もだふる勇士の怨靈を、あはれと見ずや喃人々よと。

「眠の緒」とは形容の詞、無形の眠を有形に取りなせる也。形なき命を魂の緒などいふに同じ、かなたの詩歌には「death (死)の緒」罪業の緒など物したる句もあり、總べて「斷離せざる間は連続する傾ある者」には「緒」といふ語を添ふる例なり。Eyes とは、シッ／＼といふ聲を發するをいふ、正當にいへば蛇がぬたくる時に自然に發する聲にて、鳴く聲にはあらず。ghastly の語、ところによりては「物すとき」とはいはんほどの意ともなる、こゝは「亡者」といふ意に用ひたり。

公卿等は(此の曲を聴く)勇みたりて歡呼せり  
The princes—applaud—with—a—furious—joy;  
而して大王は一箇の炬火を、只一に燃せしめて  
And—the—king—seized—a—flambeau—with—zeal—to—destroy.

テイヌ女は、  
Thais—led—the—way,  
此の道照らすなり  
To—light—him—to—his—prey,  
第二のくハムスの如く第二のトロイを導きしなり  
And—like—another—Helen,—fred—another—Troy.

此の樂曲を聴くうちに、諸公卿は狂し、熱し、勇みたちて歡呼す、王はた憤慨して我れかを辨せず、我が勇兵等が當の怨敵、只一とみじきと氣はさかのぼり、ありあふ大炬をかいつかみて、驟然としてかけづれば、テイヌ女もまた柳眉をさかだて、紅裙を蹴して庭上に降る。さて王のさきに立ち、炬を攫りて道を照らし、ヘルシア王城の方へと向かひぬ。傳へきく、三千年の昔、希臘にヘレンといふ絶類絶世の美人ありき、スパルタ王メネレアスの妃なり、まかるに隣國小亞細亞なるトロイ王國の王子、パリスといふ者、此の妃と相見て、戀懃相通じ、竟にひそかにゐて其の國に奔りけり。メネレアス大に怒り、希臘列國と議して問罪の師を起し、攻國十年、竟にトロイ城を焼土となしにき。彼れも美女の爲に國傾き、此れも美女の爲に城市皆灰。眞に是れ第二のヘレン、第二のトロイ。

案ずるに、歴山がヘルシアの首都ヘルセポリスを灰燼となし、は、其の嬖姫テイヌ



が峻峻に因れりといふ傳説あり、ドライチンの此の作以來、いよ／＼事實なりとせられたれど所詮は野史氏の架空談なるべし。「王が急じきへ道照らさんと」とは、王を鷲鳥に比し、王の爲に焼殺されしヘルシア人を餌食に喩へ、ヘルシア人が住居及び社殿の方へ行く道々の案内せんとテイス女がたいまつを取りて先にたちしをいふ。すなはち王を煽動して都を焼かしめしをいふ。

其の廿七

新レノヤロウカウシユク  
The long-ago.

此の風聲の響る、リウをなす、其の、  
Ere—heaving—bellows—learned—to—blow,

風聲(リウ、イカ、無聲)の、  
While—organs—yet—were—mute,

チミンタク(リウ、イカ、無聲)の、  
Timotheus,—to—his—breathing—fute,

此の、  
And—sounding—lyre,

人の心を鼓吹して、  
Could—swell—the—soul—to—rage,—or—kindle—soft—desire.

At—last—divine—Cecilia—came,—  
女聲、

Inventress—of—the—vocal—frame;

其の、  
The—sweet—enthusiast—from—her—sacred—store,

狭、  
Enlarged—the—former—narrow—bounds,

And—added—length—to—solemn—sounds,

造化の神、  
With—Nature's—mother—wit,—and—arts—unknown—before,

(イカ、イカ)チミンタクの、  
Let—old—Timotheus—yield—the—prize,

或は、  
Or—both—divide—the—crown:

被は、  
He—raised—a—mortal—to—the—skies;

此は、  
She—drew—an—angel—down.

thus(かうしも)は第七節以上全体の物語を總括して「まことの如く」といへるなれば、下の全文にかゝる副詞と見るべし。「息する風櫃」云々は風琴のいまだ工風せられざりしころといはんほどの心、風琴は風櫃といふ機械の作用にて、人の呼吸するが如く空気を吞吐して響をいだすものなり。to his breathing futeのちは意味の上よりいへば with のいふ語をヤノ同じをさかゝる意に用ふるは古文法也。「やさしき欲」とは惻隱戀愛等の情欲をいふ。inventress とは「女の發明者」といふ義。「此の妙



音の熱誠者云々 *enthusiast* とはものが信ずる所に熱狂して、死をだに辭せざるが如き者をいふ主に宗教家などをいふ。「尊き智囊」とは神に事ふる女聖の智恵といふまでの意。「狭かりし範圍云々」とは音楽の音色に限ありしを、女聖いで、大にしひろげきといふ意。「造化の神が本然智云々」とは造化が賦與せる先天の才智、即ち自然智(天才)とものが修鍊より得來たりし前古未曾有の妙工とを凝らして云々の意。「質を女聖に譲らしめよ」とは、音楽の妙手たる譽は、老チモシウスといふども、此の女聖に及ばじの意。「さなくば云々」さなくば二者兄妹たりがたしといはん、何となれば、チモシウスは人間をして天上に登らしむるの妙匠、女聖は天人を來降せしむるの靈手といふ意。こはシ、リアの音楽に聽き惚れて、某といふ天使深く眷戀し、つひに天降りてシ、リアが許へ忍び通ひきといふ傳説を指す。さてチモシウスが人間を上天せしめきといふは、歴山大王の名を不滅となしぬといふほどのことを、例の張喩して天に登らせきといふ也。此の結末の一句尤も作家の才を示す。



音の熱誠者云々、*enthusiast* とはものが信ずる所に熱狂して、死をだに辭せざるが如き者をいふ、主に宗教家などをいふ。「尊き智藝」とは、神に事ふる女聖の智慧といふまでの意。「狭かりし範圍云々」とは、音樂の音色に限ありしを、女聖いで、大にしひろげきといふ意。「造化の神が本然智云々」とは、造化が賦與せる先天の才智即ち自然智(天才)と、ものが修鍊より得來たりし前古未曾有の妙工とを凝らして云々の意。「質を女聖に譲らしめよ」とは、音樂の妙手たる譽は、老チモシウスといふども、此の女聖に及ばじの意。「さなくば云々」さなくば二者兄妹たりがたしといはん、何となれば、チモシウスは人間をして天上に登らしむるの妙匠、女聖は天人を來降せしむるの靈手といふ意。こはシ、リアの音樂に聽き惚れて、某といふ天使深く眷戀し、つひに天降りてシ、リアが許へ忍び通ひきといふ傳説を指す。さてチモシウスが人間を上天せしめきといふは、歴山大王の名を不滅となしぬといふほどのことを、例の張喩して天に登らせきといふ也。此の結末の一句尤も作家の才を示す。

(完)

附

録



## 英文

坪内雄藏

### 井リアム、クウバルの戯作歌

下に釋するは、英國近世の詩人のうち、眞ごころの深く、其の作にあらはれたるをもて名ありし井リアム、クウバルの作なり。クウバルは、今より百年ほど前の人『タスク』と題せる長篇の詩によりて、廣く世に知られたれど、眞の傑作は却りて其の小品の作中にあり。此の人、知命の齡のころ、或人より幼少にて死別かれし實母の肖像畫を得て物せし作など、取りわけてたへなり。又此の人、不幸數奇なりし上に、うまれつき多病にて物事に感じ易く、それが爲、後には一種の憂鬱病を醸し、日夜懊惱として閉居したりし折、其の友なる女性、某の夫人、深く之れを憐み、おのが家に宿らせ、てくさくのをかきしき物語などして、鬱散せさせんと欲し、或日ジョン、ギルピンといふロンドン市人の失策に關する一場の逸話を語りたり。其の話あまりにをかきしかりしため、クウバルは其の夜いねもやらす、幾たびか思ひいで、はひとり笑ひし、果ては得たへずして起きあがり、其の話の筋を題として一篇のをかきしき物語歌



を作らまくせり。さて一たび興來たりては筆ちのづから走りて、其の夜のうちに全篇成りし、これ下に釋する歌なり。翌くるあした之れを彼の夫人に示し、作者も聽く人も、ふしまるびて笑ひ興じ、しばらくは日ごろの憂愁を忘れきといふ。世には滑稽談話の作は、愁を知らぬ人の手にのみ成ると思ふもあれど、まことのをかしまは却りて深き憂愁を知れる人の手に成ることあり。クッパルの作の如き、其の一例なり。此の作もどみづから慰めんためにもあらず、また人に見せんためにもあらず、只をかしさの餘、一氣呵成せしなれば、其の妙は不用意の所にあり。あしなべて平易流暢、俗語をも自由にまじへ用ひて、句どり面白く、所詮は輕妙をもて優るもの。訓釋の邪魔なれば下には一々に品評せざれど、原句を讀み味はば、説かずとも餘韻は知らるべし。但し寓意あるにもあらず、隱微あるにもあらず、只をかしみの人情の誠よりいひて、俗に所謂滑稽談話の卑陋なるに似ぬ所味ふべき也。

JOHN GILPIN.

John Gilpin was a citizen  
Of credit (and) renown;

A train-band captain also was he

Of famous London town.

ジョンギルピンは信用聲譽の一市民なりき、彼れはまた名高きロンドンの一民兵隊長なりき。

「信用聲譽ある市人」とやうにいふべきを「信用聲譽の市人」といふは英語の常格なりかゝる場合に用ひたる and は又の義なれど、訓ぜずともあるべくや。總じて英の詩文には、and といふ接續詞を用ふることもあひたゞしけれど、國文にひきなほせば、大抵は用なきもの也。「山川草木」の四字も、英語に譯せば「山 and 川 and 草 and 木」とやうに物するを通例とす。訓讀の折は免も角も、翻譯せん折には心得べきことなり。

John Gilpin's spouse said to her dear,

Though wedded we have been

These twice-ten tedious years, yet (we)

No holiday have been.

ジョンギルピンの婦、そのいとこしき人にいへらく、「吾等此の心たゆまるゝ二十年(が)あ



ひだつれそひてありたれども、何等のまつり日なだに見ずありたり。(一日だに樂しき遊びせしこゝなしの意)

「いとしき人」とは夫の義「心たゆまる」とは長きといはんほどの義。ヨは何のど先に訓じて、更に後に來たる動詞を打消すやうに訓ずべきもの。「まつり日」とは遊興の日といはんほどの心。

あす(は) なり 我等が 結婚日  
"To-morrow is our wedding-day."

あした (わ) じ ちかむべ  
And (we) will (then) repair.

彼の 鐘 なる エドモントン  
Unto the 'Bell' at Edmonton,

昔 二頭立の馬車  
All in a chaise-and-pair.

今朝は我等が結婚(の)當日なり、されば彼のエドモントンなるベル軒へおもむくべし、昔(の)二頭立の馬車にて。

「明日は我等がはじめて夫婦となりし日にあたれば、家内中が二頭立の馬車にのりて、エドモントンといふ所のベル軒といふ旗亭へおもむきて遊山せんはいかに」と細君がいひらるるなり。and thenの二字は熟して「されば」と訓ずべし、二字相なら

びたる時には間々「而して後に」「さて後に」など訓ずることあり、本文は「されば」の義。and 一字にても「されば」と訓ずべき場合あり。

我が 妹 我の 妹の 兄(ト)  
My-sister, and my-sister's-child

我ら 三人の兄弟(ト)  
Myself and children—three,

乗せ なる 車(ヲ) 我は御(ト) 乗りたまふべき也  
Will fill the-chaise: so you must-ride

後 我等(ト)  
On horse-back after we.

我が妹と我が妹の兄と、我が身と三人の兄弟とが、その車をはぎなん、されば御身は我等の後に馬背に乗りたまふべき也。(我が夫は別に馬に乗りて我々の後より來ますべき也の義)

sister は姉妹共通なれど、こゝは妹を見るかた穩ならん。so は軽く「されば」といはんほどの義に釋すべし。must は俗に「何々せねばならぬ」と譯したれど、其の實は「何々すべきなり」といふとき「すべき也」といふ意強くどちめたる語也。これを「何々せねばならぬ」と直譯し慣れたればこそ、近ごろの文章に「何々せざるべからず」といふ句いたく行はるれ、しか譯しても妥當なる場合あれど、一概にはいひがたし。「す



べき也は然定言「せむるべからず」は否定言同一視すべからず。

彼れが答へて答へたるは  
 He soon replied, "I do—admire  
 彼れが女性(キム) 只一人(キ)  
 Of womankind but one;  
 而して御身(ナン)なり 彼れ 我れ  
 And you are she, my—dearest—dear,  
 其れ故に 其れ(キ)成るべきなり  
 Therefore it shall—be—done.

彼れ(ギルピピン)がて答へけらく「予れは女性の中に就きて、只ひさりの(み)をめでたし  
 とす、身こそは彼れ(其の人)なれ、我がいと(いと)うつくしのうつくし人よ、かるがゆ  
 るに其(御身)の欲すること(は)成るべき也。(御身の欲すること、何事をか成さるべ  
 きの義

「よ」といふ語かゝる場合には「中に就きて」と訓ず、すべて天下の人物に就きては某は  
 最大の人又は億萬の中に就きて彼れ一人のみは云々などいふ最大級の意籠れる  
 時の「よ」ば本文の如く訓ずを可とす。「dear」は「愛らし」の意 shall be は「よし」と義の  
 と強きもの「何々せむるべしや」と反語のやうに譯しても可なることあり。本文の  
 如き然り。

予(キ)なり 麻布商 問えたる  
 "I am (a) linen—draper—bold,  
 世の人 知りてや  
 As all the—world doth—know;  
 我れ 其れ 友 彼の 光布匠(カ)  
 And my—good—friend the—calender  
 我れ 其の 馬(キ) 往て  
 Will—lend his—horse to—go."

予は問えたる麻布商なり、まっなべて世の人知りてあり、されば我が良友(たる彼の光  
 布匠が往てく其の馬を貸さなん。(其の馬を貸して往かしめなんの義)

「よ」はかゝる場合には「然か」と訓ずるをよしとす、但し「人皆の知れる如く」とやうに  
 訓ずるも差支なし。「doth」は「do」と同義なれど、意義やゝ重し。光布匠は布の光澤だ  
 しを營業とする者。

予(キ)なり 麻布商 問えたる  
 Quoth Mrs.—Gilpin, "That's well said;  
 我れ 其れ 無難(キ)なり 良だ  
 And, for—that wine is dear,  
 我れ(キ) 我れ(キ) 我れ(キ)  
 We will—be—furnished with our—own,  
 我れ(キ) 我れ(キ) 又 我れ(キ)  
 Which is both bright and clear.

ギルピピン氏「よし」といふは「よし」といふはれたり、さて葡萄酒は價たうさくあれば、吾等



は自家のかもて供せられてあらなん(宅にあるのを持参せんの義)そは色もよく澄みてもあり。

物語の人物にても、現在の人らしくものするときは、Mrs といふ尊稱を附して物する、彼の國文の例なり。for that は「一字にて今の because の義」both and は「二字にて「且又」といはんほどの義」何々にてもあり又何々にてもあり」といふ折の「も」の義に釋すべし。此段夫婦が貨殖に用心深く、つゝいまやかなるを誓きたり。

John—Gilpin kissed (his) loving wife:

O'joyed—was he to—And

That though on pleasure she was bent.

(She) had (a) frugal—mind.

シロムンギルピンは真心深き妻に煩すりしつ、彼れは彼れ(妻)が遊興に心傾けてありけるものなり、しきしき心もちぬを知りて「たたくよる」ンシリキ。

pleasure は快樂の意、しきしきにては遊興の義。to And は「知りて」など訓ずべし。

20

The—morning came (the) chaise was—brought,

But—yet was—not—allowed

To—drive—up to (the) door, lest all

Should—say that she was—proud.

まはあれちも軒口(馬車を)追ひ寄する(車をつける)を許さざりき、人皆が彼れ(ギルピンの妻)傲りてありといふべからんを恐れて也。

was not allowed 直譯は許されぬなり也、車といふ語此の動詞の主位を占む。前號「くる如く車を寄する」といはずして「車が寄せらる」などいふは彼なたの語法なり。

door (軒口)とは我が家の表口也。ギルピンが妻の注意周密なる女房がたぎを見る

So three—doors off (the) chaise was—stayed

Where they did all get—in,—

Six—precious—sons, and all agog

『ギルピンの戯作歌』



衝を進めしむ through—thick—and—thin.

されば三軒はなれて(三軒のなだ)車は停められき、そこにて彼等皆々乗込みにきくはしくは六人のいみじき人々也、さて皆(いづれも)しやにむに、衝き進まんを熱中して。

did は添字、國文の休め字のたぐひ、意味を強むる語なり。場合によりて訓一様なるべからず、命令語に添はりたる do などは何々せよかし、のかしにあたるべくや。through thick and thin は熟語「大小厚薄如何なる障碍をも貫して」といはんほどの義。

Smack went (the) whip, round went (the) wheels,

Were—never folks so glad!

(The) stones did—rattle underneath

As—if Cheapside were—mad.

びしやりくを鞭はゆきぬ、くるりくを輪はゆきぬ、人々曾てさしもたのしみてあらざりけり。石も(街上の敷石)はチープサイド街が亂心したりしやうに(車の)底にこゝろきにき。

never は俗に「決して」とまづ訓じて、更に次の動詞を打消す語とす、まかしても妙なる

場合もあれど、實は「いまだ曾て」と先に訓じて、後に打消すの優れるに如かず。本文の如きは「かばかり楽しきことは人々のいまだ曾て経験せざりしところ」の義、ギルピン等一同が質樸なる心をおもひやりてかく物したる也。一印は詠歎の符、概して「けり」かな等に當たる。末段も質素なる家族の心を寫せり、彼等の心より見れば、けふの遊山は、天にも上る楽しさなり、さればチープサイドの街頭も、けふばかりは例に異なりて、亂心などしたらんやうなりとの義。

John—Gilpin at his—horse's—side

Seizeth fast the—flying—mane

And up—(he)—got, in—hast to—ride,

But soon came—down again;

ジョンギルピンは其の馬のつたはらに立ちて、そが垂れたるたてがみをしかき捉り、つぎに急ぎて馬を打たせんとて(馬に)またがりしが、やがて又下り來ぬ。

to—ride は「乗らん」と訓みても可なれど、こゝはむしろ「馬を歩ませんと」といふ義勝ちたり。



故也 saddle-tree scarce—reached—had he, 及びたりし 彼れ(ガ)  
 For 彼の 足(キ) はいふ(キ)か(キ)  
 His—journey to—begin, 時(キ) 彼の 旅(キ) 始(キ)まる(キ)  
 When, turning—round (his) head, (he) saw 見(キ)し  
 三人の 顧客(キ) 入り来る  
 Three—customers come—in;

(其の故はいかにいふに)彼れがその行をばためんとてや、鞍に及びたりし時しも(鞍にやゝまたがり得たる時しも)頭を(ふさ)ふりむくるや、三人の顧客の入り来るを見し故也。

saddle-tree は鞍を組立つる木匠也。こゝは平仄の都合にて鞍といふ語に代用せり  
 scarce は下の when を熟して「何々するや否や」など訓む例もあり。此の段ギルピンが貨殖に用心深きを示す、妻子のあどを返うて早く出掛けたくもあり、顧客を失ふも惜しむ所をかしみなり。  
 彼れ(キ)来(キ)故也 損(キ)の 時間  
 So down he came; for loss—of—time, 然(キ)し 下(キ)に 彼れ(キ) 来(キ) 故也 損(キ)の 時間  
 Although (it) grieved him sore, 然(キ)し 雖(キ)も 彼れ(キ) 痛(キ)む  
 Yet loss—of—pence, full—well (he) knew, 然(キ)し 猶(キ)も 損(キ)の 知(キ)れり

Would—trouble him much—more. 困(キ)せしむ 彼れを 甚(キ)く 煩(キ)む

さればこそ彼れは下り来しなれ、時間の損も、いたく彼れをなげかしめきといへども、さすむに錢の損の更に幾層(キ)彼れを困せしむべきを知れりし故也。

loss of time なる場合の of はデニソンの「チ」に訓じて loss—失(キ)ふ(キ)ことと訓ずるかた  
 勝れり。 loss of pence も同例。「錢を失ふこと」也。

久(キ)し(キ)前 件の 顧客等(キ)  
 'Twas—long before the—customers 久(キ)し(キ)前 件の 顧客等(キ)  
 Were—sited to their—mind 適(キ)す(キ) 其(キ)の 心  
 時(キ) 降(キ)り 階(キ)子(キ)  
 When Betty, screaming, came—down stairs, 時(キ) 降(キ)り 階(キ)子(キ)  
 “(The) wine is—left behind!” 葡(キ)萄(キ)酒(キ) は 残(キ)り 置(キ)か(キ)れ

件の顧客等が其の心に適うてありし前久しかりき(其が心に適へる買物をなし果てしまて程ありき)時しとマチャ(下婢の名)叫びつゝ、階子を降り来ぬ、葡葡酒が取残されしありし也。

近(キ)は It の略律呂の爲に略ける也「あ」を「い」に「え」を「う」にするたぐひなり。 Betty は Elizabeth の略稱 screaming はかんざりたる聲とて叫ぶをさす。此の段取急

『キップムクツマンの脱作』



て立出でし爲、ギルビンが妻の折角の用心も危く水泡に歸せんとしたるをいふ。

“Good luck!” quoth he: “yet bring it (me).”

(My)—leathern—belt likewise,

In—which I bear my—trusty—sword

When I do—exercise.”

彼れいへらくはれやれしをもちて、また我が操練する折に、予がわざものを帯ぶなるなめし革の帯をも(持て)ん。

Good luck は「さんだことかな」といはんほどの咏歎の語なれば「はれやれ」など義譯すべくや。 yet は「上」に「おすがた」も訓じたれど「尙」「しかも」「しかしながら」など相通と知るべし。時として「は」も「だ」といふ義に取らるゝ場合もあり。 me は「我れに」の義、「其の酒を我か手も」ともて「この義なり、訓には略きたり。 trusty sword は「たしかに用をなす劍」といはんほどの語「おぼえのわづもの」などあるべし。

Now, Mistress—Gilpin (careful—soul!)

Had two—stone—bottles found,

To—hold (the) liquor (that) she loved,  
And keep it safe—and—sound.

「つやギルビンが妻は、心細かき人かな(あらか)トめ」そが(目こる)好めりし酒を容れて、そを安全に保たん二箇の石壺を獲たりけり。

found は find の過去、こゝにては「手に入れたり」といはんほどの義、心細かき人かなは作者の挿評用意周密なる人なれやと稱へたるなり。此の段ギルビンが妻の用心いと細やかにして準備にぬかりなかりしをたゞふるなり、此の用心の後に至りて悉くらすかの嘴となる所、一層のをかしみなり。

Each—bottle had a—curling—ear  
Through which (the) belt he drew,  
And hung a—bottle on each—side,  
To—make his—balance true.

各壺(壺は「つれも」)一の蔓形の耳をもてり、そを経て彼れ(ギルビン)は帯紐を走らしめ而して各方に(右に左に)一壺を(壺を一箇づゝ)懸けき、其の(身の)つりあひを正しくせん『#リアム、クワンブルの戯作』



ためなり(左と右を輕重ならしめため也)。

「蔓形の耳をもてり」は蔓の形したる耳めくものを具へたりとの義なり。 draw は draw の過去引く延長すなむる義走らすとも訓むべし。 to make true は熟して「宜しうす」も訓むべし。

Then over-all, that (he) might be  
 Equipped from-top to-toe  
 His-long-red-cloak, well-brushed (and) neat,  
 He manfully did-throw.

さてなぐての(服装の上)に(尚)頭のいたゞきより、足の爪さきまでも裝束してあらんこと彼れはいみじ(塵)拂ひてうつくしき、其の長さ赤羽織をば、雄々しげに(身に)投げかけにき。 manfully は意氣揚々たるを形容したる詞なり、此の盛裝を後段の失策と相照らして一段の好笑なり。

Now see-him mounted once-again  
 Upon his-nimble-steed,

Full-slowly-pacing o'er-the-stones  
 With-caution-and-good-head.

今や見よ彼れを、またしや其の駿き馬にまたがりて、戒心して且よく心をつけて石の上を歩ます(彼れを)。

爰の now は時を示す語なれば「今や」の訓む。 full は間々 very と同義。 with caution は「戒慎を以て」直譯す、其の次の good head の前にも with といふ語略かれたり、其に例の語格なれば合はせ訓じて副詞とすべし。

But finding soon a-smoother-road  
 Beneath his-well-shod-feet,  
 (The) snorting-beast began-to-trot,  
 Which galloped-him in-his-sent.

されど其のいみじう裝うたる脚底に、やゝ平滑なる道(ある)を知るや、いきほふ獸は疾歩しは下めき、そは其の座に彼れを苦惱せしめき。(居たゝまらぬまでに、苦惱せしむるなによ)。



And は前節にての如く「獲たり」と訓じても通ずるけれど「知り知る」といふ義や「勝ちたれば「見るや」と訓ませたり「知るや」の義に解すべし。 shod は「靴はきたる」といふ義馬の足のよく装具したるをいふ。 snorting は鼻息の荒々しきをいふ。 snoring は鼻の音也。

So I fair—(and)—slowly, John he cried;

But John he cried in—rain:

That—trot became a—gallop soon

In—spite—of curb and rein.

「So I fair—(and)—slowly, John he cried;」は「彼はゆるやかに歩いた」といふ義で、John he cried は「彼は叫んだ」といふ義。 But John he cried in—rain: は「雨が降る中、彼は叫んだ」といふ義。 That—trot became a—gallop soon は「彼は小歩から疾歩に変わった」といふ義。 In—spite—of curb and rein. は「たとえ轡と轡に拘わられても」といふ義。

So は意譯せば「さう」といふ俗語に當たるべし。

So stooping—down, as needs he must

(Who) can—not—sit upright.

彼(ノ) 屈(ル) 手  
He grusped (the) mane with both—his—hands,  
且(チ) 亦(チ) 其(ノ) 全(ク) 力(ヲ)  
And also with all—his—might.

されば、必ずや人に坐し得ざらん人の、必ずや爲すべし。如く、其彼れはこゝろみて其の雙手もて(馬の)たてがみを掴み、而も其の全力を以て、(一生懸命にて)いふ義。かゝる場合に用ひたる He は。人といふ義に相當す。次の Who といふ語よりさかのぼりていつくけ讀むべし。

彼(ノ) 馬(ノ)  
His horse, (which) never in—that—sort

前(ニ)  
Had—handled—been before,

如何なる物(ヲ)  
What—thing upon—his—back had—got

其(ノ) 背(ニ) 得(タ)リし物(ヲ)  
Did—wonder more—and—more.

斯うやうには替て前にもて扱はれざりし彼れが馬は、(そも)如何なる(怪物)をば、其の背に得たりしものか。(ギルモンが抑へざるめんをすればするほど)いふようになります。おぼろきにや。



wonder は驚き且怪むの義、只驚の字のみの義にては解きがたし。此の段以下次第に好笑の境に入る。

あなた(ト) 来た(ク) キルピン(ク) neck-or-nought,  
 Away went Gilpin,  
 あなた(ト) 来た(ク) hat-(and)-wig;  
 Away went hat-(and)-wig;  
 彼(ク) little-dreamt, when he set-out,  
 He little-dreamt, when he set-out,  
 走(ク) running such-a-rig.  
 Of running such-a-rig.

あなたへをキルピンは(かけ)往きぬ命つらぐあなたへを(飛び)ゆきぬ。帽もつらぐも彼れ(其の家)をたらいでし時には、いゝるなるがしき戯れを行ふことをば、ほとく(夢に)思はせりき。

neck or nought は熟語「命を取りとめるか、又は一切を失ふか」かばちかといはんほどの義。命からくを訓じて妥當也。littleといふ副詞はさといふ冠詞副はらざる時は、ほと次の動詞を打消す力あり、概して先づほとくを訓じて置きて次に來たる動詞を打消すべし。run a rig は「笑ふべき事をなす」といはんほどの義。假鬘を戴くは中流以上の習俗也。

(The) wind did-blow, (the) cloak did-fly  
 風(ク) 吹(ク) 羽織(ク) 飛(ク)  
 Like streamer long-and-gay,  
 如(ク) 旗(ク) 長(ク) 短(ク)  
 Till, loop-(and)-button failing both,  
 至(ク) 紐(ク) 釦(ク) 壊(ク) 両(ク)  
 At-last it flew-away.  
 最(ク) 後(ク) 飛(ク) 去(ク)

風は吹きにき、羽織はひらめきにき、是く且はでやのなる流旗のやうに、紐孔も釦も共にはうたつて、紐も釦も離り去りし事なり。

Loop は紐を通して結ぶべき孔、俗に謂をそのたぐひなり。

Then might all-people well discern  
 其(ク) 時(ク) 皆(ク) 人(ク) 皆(ク) 見(ク) 得(ク)  
 (The) bottles he had-slung,  
 其(ク) 時(ク) 瓶(ク) 彼(ク) 懸(ク) 下(ク)  
 (A) bottle swinging at-each-side,  
 一(ク) 瓶(ク) 各(ク) 方(ク) 振(ク) 舞(ク)  
 As hath-been-said-or-sung.  
 如(ク) 昔(ク) 言(ク) 傳(ク) 或(ク) 歌(ク) 傳(ク)

其の時こそは昔人が彼れ(キルピン)のつり下げたりし鬘をばよくも認め得しならめ、くはしくは各方(右に左)に打ゆらぐ鬘をば、睇られ又は歌はれつる如く。

swinging 鞞鞞のやうに左右前後にゆらくと動くをらる。睇られ又は歌はれつ



る如く]とは、此の逸話の世に名高き故にらふ。

犬鳴(ク) 吠え(ク) (The) dogs did—bark, (the) children screamed,  
 打(ウ) 驚(ク) Up—flew (the) windows all,  
 而(レ) 各(人) And every—soul creed—out, “Well done!”  
 大(ク) 吠(ク) As—loud—as (he) could—bawl.

犬は吠えにき、見らばは叫びき、聲々は皆打ひらきつ、而して各人よばひぬ、またりや、く、はひ得入、さきり聲高く。

up flew ははた、く、とひるが、(り開く)よりはん程の義を含めり、人窓を開くといはずして窓がみづから打ひらくともやうに物する、例の彼の國ぶりなり。

あなた(ク) 往(ク) キ(キ) 馬(ク) 馳(ク) 去(ク) 矣 (あなた) 彼(ク)  
 Away went Gilpin—who but he?  
 彼(ク) 馳(ク) 去(ク) 矣 (あなた) 馳(ク) 去(ク) 矣 (あなた)  
 His—fame soon spread—around:  
 彼(ク) 馳(ク) 去(ク) 矣 (あなた) 馳(ク) 去(ク) 矣 (あなた) 馳(ク) 去(ク) 矣 (あなた)  
 He carries weight! he rides (a) race!  
 彼は(あなた) 馳(ク) 去(ク) 矣 (あなた) 馳(ク) 去(ク) 矣 (あなた) 馳(ク) 去(ク) 矣 (あなた)  
 for a—thousand—pound!”

あなたへ、キルピンは、馳けりゆきぬ。馬ふに彼れならぬ、誰そ馳けりゆきし。彼れ

が名は(評判)はやがてあたりにひるがりぬ。(人昔いへらく)彼れは重きものを運ぶぞ。彼れはくらん馬を走らすぞや。こは一千ポンド(の賭)に對して(す)なりしよ。』

禿頭爺の只ひとり、石どくりふたつまで吊し下けて、駿馬を街頭に走らするが全府民の注目を牽きたる、さもあるべし、物見高き都人が思ひく、の揣摩臆測のをかしさよろしく原文に就きて味をへし。

而(レ) 毎(日) And still, as—fast—as he drew—near,  
 (ク) “It was—wonderful to—view  
 如何(ニ) How in—a—trice (the) turnpike—men  
 其(レ) 木(戸) Their—gates wide open—threw.

而して毎に彼れ(キルピン)が近づきしやいなや(街端々々の)關(の)戸(守る)男等が、如何にたちまち其が木戸を廣く(さつ)打ひらきし(か、)そを見るぞ不思議なりし。

名高きキルピンが賭馬の邪摩あらせむと、關もる男等が心きしたるふるまひのながく、に馬の逸するを助けしをかしみ、キルピンが近づくやいな、はたりく、どここの木戸、かじこの木戸の打ひらき打ひらく響き、原文にはよく見えたるを訓に







禿頭翁の汗しとくなる面つき説破をサして妙甚し。

Thus all through merry—Islington  
 These gambols he did—play  
 Until he came unto (the) Wash  
 Of Edmonton so gay;  
 And there he threw (the) Wash (about)  
 On—both—sides of (the) way,  
 Just like—unto a—turning—top,  
 Or a—wild—goose at—play.

斯く彼れは樂しきイヌリントン(地名)をなべて經て(のく間)をわかしき(道戯)跡をば渡下(に)き。竟に彼れはさしも花々しきエドモントンのワッシュの流(小河の名)に(ぞ)來たりける。  
 さてそこにて彼れは(荒れまざる馬を制し得ずして流の中に乗り入れ)道(の)兩邊に(右に左に)流(の)水(を)ばさばしらせき(恰もくるく廻る)やうに製りたる(布幣の)水(を)

たばしらせき)やうに若しは(水に浴して)戯れ遊ぶ鷹のやうに。

布幣は西洋雜布也 at play は「遊戯に於て」と直譯す例の彼の國ぶりなれば本文の如く熟して訓むべし。 threw about の二語を熟して「ぼとばしらす」又は「たばしらす」又は俗語の「とばしらす」の義にちよべし。

At—Edmonton his—loving—wife  
 From (the) balcony espied  
 Her—tender—husband, wondering much  
 To—see [how] he did ride.

エドモントン街にては彼れが眺める妻(夫が來ぬにまちあぐみ露臺にたちいで)待ちたりしが今しもはるかに其のやさしき夫を露臺より見いだしつ彼れが馬打たせしやうを見て、いたく驚き訝りつ。

How は通常まづ如何にと訓じて、さてかどかへるを例とすれど、其實は必しも如何にと訓まん必要なし、本文の如き場合には前後の句を繋ぐ接續辭の専ら容子(やうす)を指示するものと解して可也。 did ride は「乗りにき」と直譯してもほゞ通すべきなれ



を釋の煩しむる意譯しり。以下かゝる例一々はこゝをさらするべし。

“Stop, stop, John Gilpin! Here's the house,”

They all aloud did cry;

“(The) dinner waits, and we are—fired.”

Said Gilpin, “So—am I,”

「待ちたまへ〜」ギルピンは云ふ、「彼等皆聲高くよびひにき、「料理はまてり、且や我等も倦みはてり」也。ギルピンは云ふ「我れ(もて)も(また)然り」也。

「料理はまてり」の直譯は「中食は待てり」にて其の意はらひつけし下物の準備はや悉く整ひたりの意、例の非情の物を有情にらひなす彼の國ぶりなり。末句「我れも然り」(あれだつて)と只一言疾驅する馬をどいめもあへで、忽ち約束の旗亭を後にし、最愛の妻兒を後にし、雲を霞とかけゆく其の姿、餘韻此の一句に嬌々たり。所詮此の間の消息は、義譯してただらしかつと思はるゝを、いかで訓讀の間に求むべけんや。

But—yet his—horse was—not a white

Inclined to—farry there;

For—why? his—owner had (a) house

Full—ten—miles off at—Ware,

So like—(an)—arrow swift he flew.

Shot by—(an)—archer—strong;

So did he fly—which brings me to

(The)middle—of my—song.

しかはあれども彼れが(乗れる)馬は、ちとそこには止まらんこ心傾けてあらざりけり。何ゆゑぞや。(他なし)其の(まことの)主が、およそ十英里(ほど)がなたに、エーアといふ處に家をもたりし故也。

されば剛力の射手に射放たれし矢のやうに、疾く彼れ(馬)は飛びぬ、彼れ(ギルピン)も止むを得ずしてしか(同トさまに)飛びにき。すなはちそは(その一段は)我れを將て我が(物語)歌のなかばへ來たる。

「將て來」云々は「此の段を叙するに及びて我が物語正に其の半に達す」といふ義、然るを我れ(作家)をめて我が歌のなかばに達せしやうにいふは例の語格也。



光布匠(ク) 光布匠(ク) 出た(カ) 息を吐き  
Away went Gilpin, out-of-breath.

光布匠(ク) 光布匠(ク) 光布匠(ク) 光布匠(ク)  
And sore against-his-will,

光布匠(ク) 光布匠(ク) 光布匠(ク) 光布匠(ク)  
Till at his-friend-the-calenders's

光布匠(ク) 光布匠(ク) 光布匠(ク) 光布匠(ク)  
His-horse at-last stood-still.

光布匠(ク) 光布匠(ク) 光布匠(ク) 光布匠(ク)  
(The) calender, amazed to-see

光布匠(ク) 光布匠(ク) 光布匠(ク) 光布匠(ク)  
His-neighbor in-such-trim,

光布匠(ク) 光布匠(ク) 光布匠(ク) 光布匠(ク)  
Laid-down his-pipe, flew to (the) gate,

光布匠(ク) 光布匠(ク) 光布匠(ク) 光布匠(ク)  
And thus accosted him:—

あなたへとギルピンは駆け往きぬ息をきらせて、而も痛く本意なちすも、それが友なる  
光布匠が家にてその(乗れる)馬の終にたちどまりしまでは。

光布匠は其隣人(の)が、(奇異なる)服脱せるを見て打駭きてそが(今吸ひかけた)煙  
管を(と)なげやりつゝ、木月(口)へさびいでつきて斯くなん彼れに言葉かけし。

此のあたりは格段に釋するに及はず、眞面目の間にをかしみあるを見るべし。

「何の珍事? 何の珍事? your tidings tell;」

「何を我に君 知らせ 又 知らせ」

「Tell me you must and shall:」

「Say why bareheaded you are—come,」

「Or why you come at all?」

「奈何の珍事(ぞ) 如何の珍事(ぞ) 君が報を聞れ、君(是非とも)我れに(其の故を)語る  
べき也又聞らざるべからざる也。昔へ何が故に君が(斯く)露頭にして來たれるか、又  
は何が故に兎に角(さ)來たれるか。」

光布匠がギルピンの奇異なる打扮に駭き如何なる珍事の起りしかといきまきて  
問ふるが身もじりり must and shall は只意を強めんとして語を重ねたるまでなり。

「Now, Gilpin had (a) pleasant-wit,」

「And loved (a) timely-joke;」

「And thus unto (the) calender」

「In-merry-guise he spoke:」

いつやギルピンは面白しき才もたり、また折にあふ戯言を好みければ、かくなん光

【ギルピントツウケルの戯作歌】



布匠にたはふれて彼れ語りける。

「面白き才」では滑稽戯曲の才「折にあふ戯言」では常意即妙の秀句などをいふ。 Love  
とらふ語一概に「愛す」と訓じ來たりたれど間々好むとよみておだやかなるがあり。  
guise は一語にては「風」又は「やうす」なとらふ義。

我(ク)來(ク) 馬(ウマ) 來(ク) 來(ク) 來(ク)  
 "I came because your—horse would—come;  
 And, if I well forebode,  
 My—hat and wig will soon be here—  
 They are upon—the—road."  
 我(ク) 來(ク) 馬(ウマ) 來(ク) 來(ク) 來(ク)  
 我(ク) 來(ク) 我(ク) 我(ク) 預言(ヨク)

「我れは來つ、そこが馬が來まくほりせしゆゑ止むことを得ずこゝへは來つ牛に牽か  
れて普光寺參りとはこれぞさしあれ、若し我れいみづく預言し得べくば我朝も我が  
假髪もやがてこゝに來たらんすらんくはしくいはば、今は主におくれて、彼等(尙)途上  
にあり」。

困じ果てながらも洒々落々たる輕口をかしからずや。第二行の and は「さて」而し  
てなどいはんよりは意味輕し、淨瑠璃などに用ふる「シタガ」といふ詞などに當たる

へし。假にサモアを訓ませつ。豫言し得べくばとあるべきを「豫言せば」とやう  
にらふこれも彼の國なり也。

光布匠(ク) 見(ル) 見(ル)  
 (The) calender, right glad to—find  
 其(ノ) 友(ト)  
 His—friend in merry—pin  
 答(コタヘ) 彼(カ) 不(レ) 一(ヒト) 言(コト)  
 Returned him not a—single—word,  
 但(レ) 其(ノ) 家(ニ) 入(リ) 行(ク)  
 But to—the—house went in;  
 故(レ) 直(ニ) 彼(カ) 來(リ) 帽(カ) 假(カ)  
 Whence straight he came with hat and wig—  
 (A) wig (that) flowed behind,  
 假(カ) 帽(カ) 不(レ) 多(ク) 其(ノ) 假(カ) 假(カ) 假(カ)  
 (A) hat not much—the—worse for—wear,—  
 各(ノ) 假(カ) 假(カ) 假(カ) 假(カ) 假(カ)  
 Each comely in—its kind.

光布匠は其の友(ギルロマン)の(いつともなひら落々として)きげんよきを見ていたく悦び  
て彼れ(ギルロマン)に(對して)一言をだに答へずして(つゝ)其の家(の内)にぞ入りし。  
(かくつ)ら(其の家)の中よりたちこゝろに(朝)を假髪をもちて來つ、(其の朝)を假髪  
とは如何なる品かを(いふ)に假髪は(あつ)に(長き髪)の(よ)と(垂れし)つら、(帽子  
『ギルロマン、ツサマンの戯作歌』



は(答ふる)したれど、いたくわるくはあらぬ帽子、(必竟するに)いつれも其のたぐひにてはめやすきを。

同氣相求むる光布匠がギルピンの戯言に興を催し、急に奥に入りて當座の進物をとりいだし來たる洒落氣輕なる英商人の氣轉見えたり。in merry pin の pin は nouns といふ語に同じ(廢語也)ひきくるめて「打職れたる」又は「浮々したる機嫌」などと釋すべし第四行の but は特に注意して訓むべし、原義は「却りて」の意なればかゝるところは總じて「して」と訓するを妥とす、即ち其の前句に「何々せず」といふ語ありて其の次に but の來たる時は概して「何々せずして」と訓みてよし、尤も but を without の義に訓ずる場合もあれば混すべからず。又一印の釋に注意すべし。

彼が held them up, and in his turn  
Thus showed his ready-wit:  
My-head is twice-as-big-as-yours,  
They therefor needs must-fit.  
But let me scrape (the) dirt away

(That):hangs upon your-face;  
And stop and eat, for few you may  
Be in-a-hungry-case."

彼れ其を(帽を)かづら(を)を、(一)げもちてさてたちかはりてかくなん其が頓才をば示しける。我が頭は足下の(頭を)比ぶれば(二)倍だけでも大なり、さるからに此れらの品々必ずや(足下の頭に)適しつべし。  
さもあれ(まづその前に)我れをして足下が(面に)垂る、(附着したる)汚きもの(汗に)まみれたる塵埃を拂ひ去らしめよ、且や(まづ、しばし)をまりて物食(ひたま)へ、(何さなれば)もはや時分(を)きなれば)正しく足下は(塵)物ほしうなんおはさんすらん。

in his turn とは前にはギルピンが頓才をあらはしたれど此のたびは光布匠の番となり彼れたちかはりて頓智を示すの意。「物ほしう」逐語譯は「飢えたる場合に」なり、これら例の熟語なればひきくるめて義譯すべきこと勿論也。

Said John, "It is my-wedding-day,  
And all the-world would-stare

『非リアム、クサメルの戯作歌』







いと聲高く且ほがらかに鳴きにければ馬は忽ち墜きて下に墮る如き不慮の結果を生ぜしゆゑなり。

かいりしかば(驢のいな)くなきしかば、彼れが馬(ギルピン)のりたる馬(は)は(愕然と打驚き)ながら吼ゆる獅子を聞きたりけんやうに嘶きにき而して前(まへ)に(こゝへ)來し折(をり)にせりしやうに、一生懸命に(まつ)しくらに、元來し方(へ)き疾驅し去りぬ。

with, all his might 前段には「其が全力もて」とよませたり、それにてよし。其の他は殆ど評釋を要せざるべし。齟齬又齟齬是れ好笑の好材料、『膝栗毛』『八笑人』の家等が慣用の脚色なり。思ふに、事と思ふこと、くひちがふは人の世の常態にてをかしきことも悲しきことも間々これよりして生ずるなり、さればかゝる偶然の間ちがひも稀に用ふれば好き脚色なるべし、されど多きに過ぐるときはうそらしくして拙し。我が國の小説などには、此の偶然の齟齬といふと悲しき話(例へば淨瑠璃の『朝靨日記』の如き)にも、をかしき話『八笑人』の如き)にも、あまりに多く用ひられて、漸く活世態の趣にとをきかれり。こゝには要なきことなれども序ゆゑにいひ及びつ。

あなた(ト) Went Gilpin, (and) away  
あなた(ト) Went Gilpin, (and) away

Went Gilpin's hat and wig:

He lost them sooner than at first;

For—why? they were too—big.

あなた(ト) (驅けも)ゆきけりギルピンは、あなた(ト) (飛びも)ゆきけりギルピンが帽もつづらも。彼れはそを初手(はつて)より(は)やく、失(な)しつ。(そはまた)何故(な)か。其は(件)の帽もつづらも(は)あまり大なりし(が)故(ゆ)也。

第一行の and は「而して」と訓ずべきなれど、略きてもさしつかへなかるべし。光布匠が好意の贈物もたちまちあどかたなく翻り去りてもどの禿頭翁となりてをかしるが此の章の山なり。

Now, Mistress—Gilpin, when (she) saw

Her—husband posting—down

Into (the) country far—away,

(she) pulled—out half—a—crown;

『非礼アムツサヌの戯作歌』



And thus unto the youth (she) said

(That) drove them to the "Bell,"

"This shall be yours when (you) bring—back

My—husband safe—and—well."

つてや。ギルビンが妻女は(それよりさき)エドモントンなる旗亭にゆくりなくも其の夫が(そこに)しもさき(まらで)はるかあなたなる郭外へ(疾風の如く)疾驅し去るを見し時(且)驚き且あやぶみ(このまゝ)棄ておけば變あらんと急ぎ衣袋のうちよりして)半クラウン(金貨の名)をとりいだしつ。

さて(先刻)彼等を(彼等が)乗れる馬車を(此の)メル軒へ(驅りて)來し其の(壯丁に)打向かひかくな(言ひける)此は(此の)金は(汝が)ものなるべきぞ(汝若し)努めて我が夫の後を追ひかけ(逃)なく我が夫をつれ(お)ちらん(時には)』

この now は「さや」の例の如く訓ませたれども「なるほどに」又は「とても」など訓ましかたみくに足りなるべし now に「とても」を義もあり。 into は「中」の義くはしは「郭外」の義。 country は「浴外」又は「郭外」の義處によりては「地方」「田舎」などの義ともなる。 pulled out は「ハン」のラちより引「き」だすをさる。

The youth did ride, and soon did meet

John coming—back again;

Whom in a trice he tried—to stop

By—catching—at his—rein;

But not—performing what (he)—meant

And gladly would—have—done,

(The) frightened—steed (he) frightened more,

And made (him) faster run.

件の若者は(妻女が)いひつけを心得て馬にうちまたがり(ギルビンが)あまを(追うて)乗りいでに(さ)而して(や)がて(ま)っしく(ら)に(立)ち(歸)り(來)る(シ)ョ(ン)に(達)ひ(に)き(若)者(は)こゝぞ(思)ひ(て)咄(嗟)の(間)に(彼)れ(ギ)ル(ビ)ン(を)ば(と)め(ん)と(試)み(け)り(そ)が(ギ)ル(ビ)ン(が)た(づ)な(を)振(い)つ(か)み(て)。

さ(は)れ(念)せ(し)こ(と)を(而)も(よ)る(こ)び(て)し(さ)げ(た)り(け)ん(こ)を(得)成(し)さ(げ)す(し)て(得)け(し)







彼等の一人(タニ)が(ク)ありて(ク)   
 Not one of them was mute;   
 且(ク) みな(ク) (ク)   
 And all and each (that) passed that way   
 Did join in the pursuit

六人の紳士途上に(於て)さくギルピンがしりへに、疾走する車丁を將て(盤を霞と)とびゆくを見て(思へらく)是れ必ず賊ならん、追ひゆくは物をさられたる人ならん、すなはち六人聲を揃へて(非常の)呼ばひをぞ舉げゝる。

(曰はく)「さて盗人よ、さて盗人よ、おひはぎめ(まらねく)さ、(彼等(六人の中)の一人だに)黙りてはあらざりき、而して(さく)呼ばふものはひきり(彼等のみならず)その方角へよざりし(報は)我れも(さ)みなおのく、此の道跡に合しにき。

hue and cry は非常の事起りたる時に發する呼聲をいふ、火事又は盜賊などを他に知らする時の叫聲也、假譯して「非常聲」又は「非常の呼ばひ」などすべくや。物見高き都大路のことゝて所謂野次馬のあまた加はりてかしましく立騒ぐさま、さこそと思はれてぞかじ。

And now the turnpike gates again

Flew open in short space,   
 The tollman thinking as before   
 That Gilpin rode (a) race.

And so he did; and won it too,   
 For he got first to town;   
 Nor stopped till where he had got up   
 (He) did again get down.

さて今や、彼の關の戸は、又たちどころにさき開きつ、(なにゆゑに然りしか)といふに、彼の關もるをのこらは(今も尙前)にひきしく、ギルピンが(人さ賭して)くらへ馬を走らしぬと思ひ、其の妨なからしめんと思へればなりけり。

而して(けに)彼れはしかなし、也(けに)ギルピンはくらへ馬を走らしぬといひつべし、且また(そのくらへ馬に)勝を得たりけり(輸ちたりともいひつべし)何となれば彼れはまさきに市(ロンドン)の市に遠せしゆゑ也、(最初)彼れがたいてたりし處(すなはち我が家の門口)に再び下りたちにして(會て)さくまらざりし故也。



折角の祝ひ日の催し、ことごとく齋餅となりて難なく我が宿へかけ戻りし失策の  
をかしみ、エドモントンなる妻女が氣づかひと失望、ギルピンが慚愧と當惑すべて  
これらを言外に説き殘して餘韻としたる手ぎはあはくしてめでたし。

今や 今や 我曹を歌はしむ 萬歳(一) 王陛下  
Now let us sing, Long—live the king,

And Gilpin, Long—live he;

而して 時 彼れ 此の次に 乗りいでなん  
and, when he next doth—ride abroad,

May I be there to—see!

今や我がともがらをして謳歌せしめよ、王陛下萬歳と、さてギルピンや、彼れもまた萬  
歳と。而して此の次に彼れ(また)乗りいでなん時(し)あらば願はくは(我れそこに在ら  
まほし)その面白きありさまを見るべく。

以上一場のをかしき話を洒々たる物語歌に物したるまでにて上にもいへる如く  
何の寓意あるにもあらねばまた評すべきことばもなし。思ふに以上の訓釋によ  
りて讀者はほゞ予が所謂訓讀を會得せられたるならん。

(完)



## 『イリアッド』梗概

### 緒言

『イリアッド』と『オデュッセイア』の二大篇は共に太古希臘の詩人ホーマルが作なりと傳へたり。就中『イリアッド』は歐洲に於ける叙事詩の始祖にして種々の英雄的戯曲稗史はなべてそを源みなもととして流れ出でたり羅馬のヴルツル英のミルトンの作其他古今に名ある叙事詩はこの作を師表とせざるもの稀なり。假定せられたるホーマルが在世より今明治廿八年までは越くとも三千年の星霜を経たるべけれど一人として叙事詩を作りて彼れが上に出いしは無し詩人の王と稱せられたると故ありといふべし。泰西の詩篇を論せんとする者は此の書を一讀するの必要ありと原作の希臘文なると其頗る長篇なるとの爲に其の梗概にだに通じたる者尠し。予之れを惜むのあまり嘗て校友鶴田喜一郎氏と共に千八百九十年版に係る英人バツクレイ氏が散文をもて直譯せる『イリアッド』全篇を精讀し初學者の爲にその梗概を叙し其の中最も妙なる箇處及び世に名高き條々は毎卷本文を抄出し



て態と直譯に近き譯文にうつしたり。蓋し『イリアッド』は泰西諸學校の古學教科書なれば英語に譯したる者は夥多ありチヤブマン、デルヒー、ナルズレー、ブライアント、ポープなどは其の尤なる者なりさて此等の諸譯は概して韻語もてものしたれば或はこれを將りて原文に代へなば詩趣をも幾分か得傳へんかとも思ひたれどさすれば英語に通ぜざる讀者の爲に更に重譯すべき必要あり。重譯も品にこそよれ淺ましきもの韻語譯の重譯にしくは無し本篇原文の抄譯をひとへにマツクレーの直譯に據りたるは此の理を思へばなり。さて梗概の順序は重に編者の沙汰する所に係るといへどもかたはラコリンスが『アンシェント、クラシクス』并に他の一二書をも参考したればもとよりほしいまゝに取舍したるにはあらず。

坪内雄藏 識

## 解題

前にも言へる如く『イリアッド』は古今空絶の大作なれども今を隔ること三千年以前の作なれば其の作者ホーマルといふは果して現存せし詩人なるか若し現存せし者とすれば何處に生まれ何時ごろに榮えたりしか其の詩中の事件は事實か架

空か又そが二大作の原本は如何にして傳はりし此等諸疑問は今尙歸着を得ずして曖昧不了の裏にあり。されど今はかゝる議論を悉く省きて只俗傳のあらましのみをいはんにホーマルは小亞細亞なるメリス河畔スミルナの傍に生まれき其の母クリシイアのフシアスといふ學師に再嫁せしやホーマルもまた其の家に養はれき。さるほどに彼れは區々たる家業を厭ひて出奔し偏く世のさまを觀んと思ひたち以太利、埃及、西班牙とわたりあるき地中海なる島々をも遍歴しけるが旅中明を失ひて一旦故郷に歸りさて後再び諸國遍歴の詩人となりてアヘンス、小亞細亞などを物語歌を誦してめぐりありきぬ。到處に土民群れ集ひてその妙調をもてはやしぬ。後年レバントの海濱にて逝りそこに葬られき。俗に傳ふる所は之れに過ぎず。

『イリアッド』とは『イリアム(トロイの別名)物語』の謂なり。この物語は小亞細亞なるトロイの王プライアムの皇子パリスといふが希臘なるスバルタ國王メテレアスの王宮に密たりし時メテレアスの后なるヘレンといふ絶世の佳人に懸想し理無く奪ひ去りしが原となりて希臘列國の諸英雄が大に奮激し竟にメテレアスの



同胞アガムノンといふ王を總大將として同罪の帥をトロイに送りヘレンを取戻さんと企て十年か間激戦せし勇壯なる事を種としてむねと其第十年の役を叙述せるものなり。その事は紀元前千五百年ごろの事件と假定せられたり。大づかみにいへば『水滸傳』『三國志』『西遊記』の三作を二十四箇の小丸に打成して更に幾多の豪岩壯嚴偉大崇高なる成分を加味したるが如きものなり。すなはち全篇二十四卷其間に天神の會議あり神怒あり天神みづから戦に臨みて兩軍に加勢するあり今人の想像を以てしては到底企及すべからざるいひ知らぬ偉觀數ふるに追なし。主人公アキリーズといふはヒチスといふ女神の子にて容貌端麗勇武絶倫なりその心さまの如何ばかり氣高うして如何に勇士の摸範たるに耻ぢざるかは此の梗概によりてもほゞ窺ふに足るべし。件のアキリーズと總大將アガムノンとの軋轢が此の物語の主題なり。『イリアッド』の第一卷は突然十年目の役の事をもて筆を起したれば以上の大筋を會得して後に讀まざれば解しがたかるべし。

尙いひ漏したる事あり近世の批評家多くは『イリアッド』を以て一人の手に成りたりとせずして夥多の詩を編纂して竟に一卷に大成せるものなりとせり。げにや其の卷首に掲げたる題意と其の後卷に叙したる譚とは間々相連絡せざるが如き觀あり。彼等批評家は思へらく紀元前數世紀にアヘンスの専主ピシストラタスといふ者當時の文士に命じて斷篇を補綴せしめ初めて一卷の物語となししが是れ此の書の記録せられし初なりさて其が『イリアッド』と稱せられて今日現存せるが如き形となりしはアヘンス全盛期と傳へたるペリクリーズが治世のころなるべしと云々。

## 第一卷

劈頭先歌うて曰はく

歌へ嗚呼天つ女神よメリウス(Peleus)の子アキリーズ(Achilles)の憤怒を人間の王アトリヤ  
ーズ(Atrides)のいさも氣高きアキリーズが先づ争ひて別れてより限知られぬ災厄を希臘人に  
降下し幾多英雄の勇魂を常闇の國に投下してその死骸を狗禽の餌食ならせし事の顛末

と。そも如何にして此の兩雄は相争ふに至りたるか。これアポロー神の嚇怒に因るなり。作者はこれより希臘兵が二人の美女を捕へてそを總大將アガムノ



ン王(アトリヂーズ)とアキリースとに献せし事及び其の美女の父クリシスといふ者アポローの神官なるが故に該神の髪結紐を携へてアガ멤ノン王の陣に來たり其の愛女を放免せられたしと乞ひ夥多の償品を呈する事を叙シアガ멤ノンがその哀願を聽き容れざるのみか却りて痛く罵りおどろかしてクリシスを逐ひ退くることに及ぶ。さるほどにクリシスの翁は深く悲しみアポローに哀禱し願はくは汝の神箭をもて此の怨を修めさせたまへといふ。神その禱を打聽きて

神怒に嚇き怒り征矢の滿ちたる腋と白銀の弓を肩に負ひてオリムポスの山嶺より降り來ましぬ。神動けば怒れるそが肩の上に征矢はたたくと鳴りひびく。さて空はいつしかに夜のごとく暗となりぬるをゆきく。て神は船希臘の軍艦の彼方に身を居らして先づ一羽の征矢を放ちぬ。銀弓の響いとおそろしくこそ聞こえけれ。は下めは驪馬を駿術を後に人にも利き箭を向けて射て斃しければ骸は焚く火葬の骸は絶ゆる間なくぞ燃にける。九日の間神の箭か希臘陣に向ひしかば其十日となりける日

アキリースは守護神の示教に従ひて希臘の諸軍を集めかく悪疫の流行と同時に戦の甚だ利あらざるはアポローの祟なること明なり。何故に彼の神はかくばかり逆鱗せしかいざや豫言者を招きて其ことばりを語らせんといふ時卜者カルカ

スといふ者起ち上がりて我れそを誦るとを得れども大王の怒に觸れんこと悲しといふ。アキリース強ひて「語れ」といふ。「さらば申すべしそは全く大王アガ멤ノンが彼の神の神官クリシスに對して非禮の行ありければなり」といふ。アガ멤ノンかくと聽きて果して大に怒りけるが國人の爲とあらば詮かた無し。さらば割愛して彼の美女を返附せんさりながら其の償なかるべからず」といふ。アキリース答へて「此の度の戦に克たば三倍又四倍の償をなすべし」。「キトその言葉に相違無きか。若し其償が我意に充たずば足下が得べき賞品をも奪ふべきぞ」とて兩雄の語氣やうく荒くなり終にアガ멤ノンの曰ふ「我れ足下より強大なることを示さん爲に足下の陣營に人を遣はし足下が得たる愛姫を奪はんと思ふはいかにと。こゝに於てやアキリース悲痛を感じ

そが毛胸の裏なる心は二途の思に迷ひたり。腰の利劍を抜きて衆を排しアトリウスの子アガ멤ノン(アガ멤ノンの)を殺さんか又は憤怒を止めて我が情を抑へんか、かく情と智と二途に思ひ迷ひあはやそが強大なる劍の鞘を拂はんさしたる折しも天降る天使モチルヲ

アキリースが激怒を制して「シュエノー(希臘人の守護神、シュエピタル神の妻、尊神の神



勅ありと宣る。アキリーズ畏りて一旦は手をとめしがやがて又激しき争論を生じ果はアガ멤ノンも奮激して己に大事に及ばんとしたる時、蜜より甘き能辨の智士ネストール(Nestor)進み出て中裁し竟にアキリーズをしてアガ멤ノンに一歩を譲らしむ。かくて會は解散しアキリーズは快々としてその營に退きける。さてアガ멤ノンは約に従ひてクリシスの女を送還し且アポローに供物をなし又使者をアキリーズの許に遣はし強ひて其が愛姫アリシイスの女を奪はしむ。アキリーズ敢て拒まず姫悄悄として牽かれ行きぬ。さてアキリーズは其の愛姫に別かるゝを悲むにはあらぬぞアガ멤ノンの無禮を憤るの餘り落涙禁めあへず獨たち出でて海の邊に到り蒼茫たる海原を眺望しやがて双手をさしのべて「母よ」と呼びけり。母セチス(シユピタルの女)その聲を聽きて海洞より狭霧のやうにあらはれ「なぞと泣くぞ」と問ふ。アキリーズすなはちアガ멤ノンが亡狀を物語る。セチスさらば我れオリムポス山に上りて父大神に訴へむ。汝復希臘の營にな往きそ」とて立ち別かる此間に希臘の智將ユリシーズ(Ulysses)がクリシスの女を其の父に引渡しそれによりて悪疫の流行息み希臘人よろこびて祝祭を行ふ

の條あり。さる程に十二日目の朝セチスは我が子の爲に神嶺オリムポスに登り幾層峰の絶頂にまゐりてシユピタルに見え左手もてその膝を擁し右手もてその頭をとら「我が子アキリーズを希臘人があがめ尊むに至らんまではトロイ方の軍に利あらしめたまへ」と乞ふ。大神答へずセチス強ちに迫りて「否か應か只一言を聞かせたまへ」と泣きくどくにぞ神心動き

これやがて「甚しき事ならん。汝が頭を容れなばシユノーに罵られん時我れ彼れに怒らるべき理由を有するこゝにならん。故なくてだに諸神の前にて彼れ我れを責め罵りトロイの軍を助くを誣ふ。疾く去りれシユノーの目にやかりらん。願ひは我れ心にかけてえさせん。若し望みさあらば我れ汝が心を安んぜんためうなづきて與せん。こは人間に與ふべき我が莫大の約束のしるしぞ。我れ一たび首肯せば其の約束には變改無く偽り無く遂げざること無し。」

かく宣り果て大神は物すと眉根をこゝめて首肯さぬ。

其の時しも大王が鬘油器る神髪はその不死頭より全身にふりかゝりて大オリムポスの神嶺に震み動りぬ。

かくてセチスが歸りし後諸神の大集あり。「巨眼白腕のシユノー神は逸早くもセチスと大神との間に約束のありしを猜し大神に實を語れと迫り互ひに言葉争あ



りて兩神漸く好からざるの趣あり。火工の神ヴルカン(Vulcan)ねんごろに母メ  
ノーを慰諭しやがて諸神互ひに和諧し益を擧げて樂しむことあり。此の洋々た  
る和氣の中に第一卷終はる。

第二卷

如何にして約束を果たすべきかと其の夜シユピタル神はつゆ目瞋まらずして案じ  
つつけしるが遂に一凶夢をアガメムノンの許に送らんと決しぬ。さて夢の精は  
老翁テストルの姿に化現し王が帷中に入り枕頭に立ちて民信を負ひ大事に任ず  
る身にありながら枕を高うして眠を食らんは兆民に倚頼せらるゝ者の心懸かは。  
予は大神の勅を奉じて來たりぬ。いそぎ希臘勢を率ゐて開戦の準備せよや。ト  
ロイは旦夕の中に取巻を得べし。シユノー神の説行はれてオリムポスの神々は  
異存なくトロイの運命の定まりぬればと告ぐると見て驚き醒むる王の身邊には  
天使の妙音尙みち／＼たり。欺かるゝとは知らで王は悦び勇み裝束を着け直に  
船艦へと急ぎ行くうちに夜は明けたり。王は傳令使を派して各營の將校を呼び  
集へ「昨宵しか／＼の靈夢を感じぬ。つきては軍備をなさん前に先づ士氣の振盪

を試みんため全軍に對ひて態と退陳せよと命ずべし。卿等は其の間にありてそ  
を制止せられよと言へば一同其の旨を領承して營所に退き部下の兵卒を徴す程  
もなく蜂群の巖洞より出で、春花に飛びかふ如く衆八面より群をなして集まり  
來たる喧囂雜沓いはん方なし。アガメムノン王はヴルカンの神が鍛ひて天神に  
贈り天神より人間に傳へたる貴き笏に倚りて悠然と立ち嗚呼希臘の勇士よ今や  
シユピタル神は予を重大なる逆境に陥れたまへり。曩に彼の神が打ちうなづか  
せてトロイの鐵壁を微塵となし花々しく凱旋をせさせんと約せられしは空願め  
なりき。無數の人命を失ひて後あめ／＼と歸れどあるはトロイと共に我々をも  
亡者にせん神慮とこそ覺えたれ。目に餘る希臘の武夫が敵の小勢と戦ひて今尙  
何の爲出したることもなく倦み疲れたりと聞えては子孫末代までの恥辱なりさ  
りながら日々さま／＼の障害いで來て思ふに似ず。

すてに六シヨープの九年を経たり。我軍艦の材は朽ち索はほつれ初めたり。妻子は家にあり  
て我等の歸るを待ち慕せども此處に來りし経雷は驟期に差ひて其の功成らず。諸子よいざ我  
が勳に従へ一同直に纜を解き戀しき故國に歸り向はん。」



と誠しやかに宣告すれば全軍之れが爲に震ひ動き、恰もイカリヤ海の大波濤の打寄するが如く夏の風の稲葉を靡かすが如く喚き叫びて軍艦に駆けつどひ先を争ひて海峡より漕出でんとしける時、ユニノ神遙にかくと見て急ぎ天使ミテルヴを降らせける。

ミテルヴは希臘の陣營に臻り憤慨遺恨に得堪へで立去りかねてありし智將ユリシーズの傍に降り立ち、汝疾く希臘船に行きて汝が辨舌をもて船出を留めよと命ず。ユリシーズ畏りて急ぎそが外套を脱ぎすて、疾驅しまづアガムノン王に謁して王笏を受け取りさて後將校に遭ふ毎に、かく周章するは何事ぞ。静まれ他をも静めよ、足下等は大王の深慮を察せざるなり。大王の懲罰を怖れざるかといひ又兵卒を見ては、汝等は何事にも卑怯なり未練なり。上官の言を聴け。元帥の命を承れと笏をふりて打擲し戒めける。さる程に大衆やう／＼静まりて歸り來たりユリシーズが熱心なる演説を聴かむとしたる折しも、ゆくりなくもヘルシチスといふもの現れけり。

彼はトロイに來たりし希臘人の中の最も醜き男なりき。脚はなべて曲りて一脚は跛たり。肩

は歪みて胸の方へこゝみ其が頭の頂は尖りて薄き軟き毛疎に生ひたり。彼は取りわけてアキリーズとユリシーズとを敵とし常に此の二人を罵りぬ。さばれこの時は鋭く叫びてアガムノンを罵りける。

汝の帷幕には金玉充ち汝は美女に飽けるに尙何の不平ありて何をか求めんとする。金を得まく欲するか美女を得まく欲するか。汝の如きは希臘人を指揮し得べき材にあらず。嗚呼希臘人は皆纖弱の婦女子となりぬ汝等最早希臘の男子に非ず。歸れ。打捨置きて王の爲さんやうを見よと。其れより王がアキリーズの賞品を強奪せしとを難じ口を極めて罵倒す。神に等しきユリシーズ此を聞くやそが傍に突立ちてハタと睨みわれ汝が口より再び此の如き雜言を聞くとあらば汝を赤裸とし笞を加へて此處より逐ひ放たん。しからずばユリシーズの頸はこの肩に住まらざるべしと。ヘルシチスの背と肩とを笏にて血いづるまで打ちければ彼れば身をもがきて涙をおとしぬ。人々哄笑しユリシースが智勇の功績已に多しと雖もけふの手柄をこそ第一といはめなどいふ。かくてユリシーズ笏を將りて立ち上り天使ミネルヴ引添うて喧譁を制す。ユリシーズ宣りて曰は



「嗚呼アトリウスの子よ嗚呼王よ希臘人は君を人間の最も淺ましきものとなさんせざるぞや。彼等はトロイ城を亡ぼして凱旋せんといひし誓約も得果さずいふ甲斐無くも稚兒發婦のやうに故郷に歸らんきて打泣けり。僅の月日だに戀しき妻子に離れて北風に荒き波の上にならばはんは賊に忍び難かるべしとして九年を経たるをや。われは人々が歸思の切なるを咎めずされど何時までも効なくして止まり又事遂げずして歸らんは耻辱の上の耻辱ならずや。忍べ我が同胞よカルカスの環首が果して當れるかあらぬかを見ん爲に。」

さてこれより出陣祭の折に一頭の斑蛇が九羽の雀を喰ひしをカルカスの見て是れ全く九年の後にトロイを亡ぼすべき前兆なりと言ひし事を引きて勵ます。チストルも亦口を開き女子に等しき輩と問答は益なし。かく誓約を破るばかり卑怯なる我軍が何の爲にだしたることなきは理なりけり。いざや大王勇決あれや。歸らんと思ふものはそがまゝにせさせよ。我れはトロイの女を捕へて我が妻となしヘレンを憂愁の中より救ひ出さんと思ふと激語し又アガ멤ノンに向ひ兵の勇怯を明にせん爲族姓によりて隊伍を分かつてよと勤めける。アガ멤ノン之れに答へて足下は賊に智謀の士なり。足下の如き軍士十人あら

ばトロイは既に没落したらんにわれ不幸にして一女子の事よりアキリーズと確執を醸せしこそ無念なれ。

若し彼れと我れと合鉢して事を謀らばトロイに怨を修めんこと東の間ならんに。いでや人々出て戦はんする前に皆まづそが腹をこやせ。皆其の槍を利くし其の楯を整へ其の駿馬に抹回ひ且其の戦車を準備せよ。激戦を終日得つゞけんが爲ぞ。夜の來て勇士の忿闘を引分けんするまでは東の間の休息もあるまじきぞ。身を護る楯の帯は武士の胸の汗にて濡ひ握れる鎧は手を疲らし磨きあげたる戦車を引かん馬は汗もしこむに喘ぐべきぞ。さて夫の船に残りて戰場に出づること欲せざる輩はやがて狗彘の餌となるをまねがるべからず。」

かくて衆を解散す。程なく炊火の煙處々の陳營より立ちのぼり衆皆供物を捧げ戰場にて身の安泰ならんことを禱る。アガ멤ノンは重立ちたる將校六人を會すメネレアスもまた與る。かくて二同一頭の牝牛を圍み王は其中央に立ちて騰りて曰はく

「大空に在して黒雲を聚め給ふ最も豊高き最も偉なるシヨールヴの神よわが軍火をもてプライアムが股を燃きて倒れさせそが宮門を灰となしヘクトル(Hector)が胸おほふ鎧衣をわが双をもて寸裂し又彼れが右左に夥多の武者が塵芥に塗れて齒をもて大地を嚙まんまでは日は沈まであるべきぞ暗は來らざるべきぞ。」



さて牛を屠りて盛宴を開きやがて出軍の令を發す。天使ミケルヲ諸將に交りて士氣を鼓舞し幾百流の黄金の流蘇を垂下しぬ。さるほどに篝火の炎々として山嶺の林を焼き盡す時の如く、劍戟の光煌々として蒼空に達き、百千の水禽が群をなして羽ばたきなし、牧場を震ひ動かすが如く、春の花と春の若葉との繁れるが如く、千軍万馬八面よりつどひ來る、中に小獸の群に於ける野牛の如く、嶺として秀でたるはアガムノン王にぞありける。

作者はこゝに至りて、嗚呼オリムボス山を護るミューズの神よ希臘軍を率ゆる大將は誰々なるかを語れと言ひこれより一々に艦隊を註記す。將校の名、姓、族、系圖、生國、人數等を句調面白く暗記し易きやうに列記せり(我が軍記の勢揃の如きもの)。此段頗る人口に膾炙す、韻語譯によりて一讀すべし。かくて又天使アイリス(His)はウエピタルの命を受けトロイの城内に天降り總大將ヘクトルに、今や希臘の大軍は押し寄せきたると告げ、汝の軍隊は駁雜にして其の國語も同じからざれば其同類中の一人を擧げてそれに將たらしめ、汝はプライアムの軍勢を率ゆべしと。これを聞きてヘクトルは急ぎ軍備を整へトロイ城の前なる小高き岡に陣を取る、よ

りて又トロイ軍隊の註記あり。これを第二卷の終とす。

### 第二卷

かくて兩軍列を整へ相對して進む。トロイ軍の喚き叫ぶ聲と閃の聲とは、冬の繁き霜雪をのがれて海上に其翼を延ばし小人島を襲ふ鶴の羽ばたきにも似たり。之れに反して希臘勢は相助けんといふ心を配り氣を沈め黙々として進む。兩軍間近くなりける時パリスは豹の皮を肩に掛け彎弓を擡へ一口の劍を佩き二箇の槍をうちふりてトロイ軍の前列に進み出で、我れと思はん者は出で、闘へよと挑みぬ。メネアスこれを見て、餓ゑたる虎の餌物を得たらん如く、宿怨を晴らさん、は此時ど悦び勇みて戰車より飛び下る。パリスは深山の叢の中に、毒蛇に遭ひたらん人のやうに顔の色青ざめ足蹶き味方の陣へ引きかへす。大將ヘクトル之れを見て罵りて曰はく

「嗚呼、愛のいみじう秀でたるパリスよ、女を迷はする嗚呼の風流士よ。あはれ汝生れざりせば又婚せずして逝りしせば我が軍のこゝろ辱を受くることなかるべかりしに。一定希臘人は汝が風采の美なるを見て、氣高き勇士と思ひ解めつれば笑はんすらん。汝には精神なし、氣力なし。かう嗚呼なる汝が如何にして海原を超え同心の徒をつごへ外國人に立交りてかの勇士の配と



なり又汝が父と汝が國民との災厄の原となりぬる彼の美人をば奪ひ來しぞ。汝が敵の喜ならめど汝が身の辱さ知らずや。汝は猛勇なるメテレアスを迎へ戦ふこと叶はざりしか。今ぞ知らんかゝる氣高き武夫が花の如き妻を汝が奪ひ來つることあはれ汝が芥に塗れんときは非ナス神の賜へる其の辱も其の髪も其の容姿も何の用にか立たん。トロイの人皆懦弱なり然らざれば汝の大罪のなごか今日まで罰せられずしてあるべき。」

其の時パリスこれに應へて「大兄が叱責極めて理ありとてヘクトルが性の剛毅なるを稱し人の特質は神の賜なり人力の如何ともすべからざる所なれど闘へよとあらば我豈之れを辭まんや。願はくは我れとメテレアスと一騎打の勝負せん。さて勝ちたらん方へヘレンをも有りとする財寶をも與へんは如何にといふ。ヘクトル大に悦びやがて槍を提げて陣の中央に進み出て呼ばふらく「此戦の原たるパリスがメテレアスと一騎打の勝負せんといふなり。何れにもあれ勝ちたらん方へヘレンとありとする財寶とを渡すべしと約束せまくほりすと。メテレアス應へて「希臘とトロイとは我等兩人の爲にかゝる厄難にあひたるなれば今何れが運拙くして戦死すらんとも宜しく傍觀してあるべし。勝負つかば兩軍は平和に引分かるべし。就きては其の誓約を確にせん爲にプライアム(ヘクトル、パリスの

父)を呼びて來たれ」と云ふ。此に於て休戦を命じ兩軍喜ぶと限なし。ヘクトルは使者を遣してプライアムに此事を白さしめアガメムノンは艦より羊を持來らしむ。此時天使アイリス、ヘレンの許に天降る。「白腕のヘレンは深宮の中にありて己が哀れなる來しかた希臘トロイの兩國が我が爲に受けし幾多の艱難の事蹟を錦に織出しつゝありけるが天使其か傍に立ち兩軍が最後の目醒ましき働を見よ。パリスとメテレアスとは長鎗を將りて御身の爲に決闘し御身は勝ちたらん方の妻と定まりぬるぞや。疾く來よと促す。ヘレンは白衣を身に纏ひ侍女に伴はれて急ぎスキアン門に出づ。其處にプライアムはトロイの耆宿長老に圍繞せられて兩陣の動靜を眺望す。彼等は今入來る美人を見てさゝやきぬ。

「かゝる婦人の爲に多年兩國が錦を削ること無理ならず。げに其の容貌の不死の天つ女神にも似て奇しくもあるかな。さはあれかばかり奇しくあてやかなれば疾く船にて歸りゆかせよ我れと我が子孫との災厄の源となるらん。な止まらせよ。」

ヘレンはプライアムの傍に坐しぬ。プライアムいふ女の先の夫親族朋友を見よとやがて希臘陣を指さし「中にも丈高く勇ましく王相そなはれる英雄は誰ぞ彼れ



が名を教へよといふ。ヘレン答へて

「長き男の君よ、わなみ瀧に夫を棄て同胞を棄てうつくしの女を娶て親しき友をも棄て君が皇子につきて來し時病にかゝりて死ぬることを得しならば今如何に辯しからん。さばあれそれも叶はざりしかば徒に泣明し侍り。尋ねさせ給へるは賢王にして勇將さいふ譽高きアトリックスの子アガメムノンに侍り一度は淺ましき我身の義理の兄にて侍りき。」

次にアガメムノンよりやゝ丈低く其胸と肩との廣やかなるは誰れぞ。彼は深慮知謀のユリシーズに侍りと答ふ。時に元老アンテノル進み出てヘレンが答に和し彼れが嘗てメネレアスと共にヘレンの事につきて談判に來つる時己れそが接待役となりきとてユリシーズとメネレアスとが容貌言語動作を對照して物語る。簡にして盡したる形容宛然畫の如し。さて又同じくヘレンの口を借りて希臘の干城アツヤクス并にクリート人の王アイドメニウスをも點出す。ヘレン曰はくかく希臘の將士は揃ひたるになどてわが同胞なるカストルとポロックスとは見えぬぞ。訝しや。

あるは彼等はラセアモンの地に残りしかあるは又波路はるか此の地までは來ながらに姉が耻辱のうしろめだきに軍の場にはえ出でぬか。」

折しも使者來たりてプライアムに自ら陣頭に出て盟約せよと促す。プライアムはおそるくアンテノルを従へて平原におもむく。希臘軍よりはアガメムノンとユリシーズと來たる。さて軍使くさんゝの供物、酒等運び來り兩王の手に水を灑ぎアガメムノンは劍を抜き羊の毛髪を断ちてそれを敵味方に分ち與へ神の名を喚びて誓ひ羊を斬りて酒を地に灑ぎこの誓を破らむものは其血を流すこと將にかくの如くならんといふ。かくてプライアムは我が子の決闘を見るに忍びずとて退く。ヘクトルとユリシーズとは決闘場の界限を標し何れを先手すべきかを圖にて定む。パリッスに先手を得てければ兩將堅甲巨楯に身を固め長鎗を掲げて場に臨む。パリッス先づ鎗をふりてメネレアスに抛げ附けしが其の楯堅うして徹らず。次にメネレアスは神を念じ同じく槍を抛げうちパリッスの楯と鎧とを貫き脇腹の襯衣までも透しけるがパリッスは身をかはして危くも死を免れたり。メネレアス大にいらち白銀造の劍を抜きてパリッスが盔の眞甲を打ちけるが刃折れて三つ四つに飛散りぬ。再度の失敗に激してメネレアス大に叫び敵が盔に附いたる馬の毛をつかみすでにパリッスを希臘陣に引きゆかんとしける時ヰナスの神



天降りて其が盃の緒をうち切りければメテレアスの手には空しき盃のみぞ残りける。又も引返して刺殺さんとせしに神はパリスを密霧のうちに褻み去りぬ。さて異香馥郁たる一室に伴ひ行きヘレンを招きて面晤せしむ。ヘレンはパリスが未練の振舞を罵りて、君は戦場より歸り來ましゝか。わが先の夫に殺され給ひしならば如何ばかり今逢ふに増して嬉しからん。君は力量も劍術もメテレアスには勝りたりと日ごろ誇り給ひしならずや。今一度かへりゆきて勝負を決し給へなどいひけるがやがてメテレアスの擁護するパリスの甘言に心蕩けてそのまゝ闈房に伴はれ行きぬ。さるほどにメテレアスは猛獸の狂へるが如くパリスが行衛を求めけれど見當らざりけり。此に於てアガ멤ノンは軍は希臘方の勝利となりぬと宣告す。是れ第三卷の終なり。

#### 第四卷

天闕に諸の神集ひて金床の上に坐し神酒を酌みて相議す。シュピタルはシュノール、ミナルズの二柱の神に向ひ、神達はメテレアスの介錯者になりながら彼れが戦を餘所にのみ見たりしにメテレアスは然らず常にパリスに附添ひて其が危きを助け

たり。さはれ勝ちたるはメテレアスなり。さて此上は再び兩軍を戦はすべきか又は講和せさすべきか神達の心はいかに。異議なくばトロイは元のまゝになし置きてヘレンをば還さしむべきかと嘲りていへどミネルズは答へず。シュノールは火のやうになりて怒り、何たる神宣ぞ。わが日ごろの辛苦を徒勞にせんとてか。誰れかさる勅宣に同ぜんといふ。シュピタル大に激し、汝がかくまでトロイの人を憎むの故あるか。トロイは汝に如何なる害を加へし。汝は彼等を生きたがら喰はずば鬱憤をえ晴らすまじうぞ見ゆる。唯此事のみによりて我と汝とが中たがひせん事の思ひに此度は我れ汝が心に任せん。さはれ能く汝が心に銘せよ此後我が亡ぼさんと思ふ國のあらんに汝如何程にそを愛づともな妨げそ。此度は我れ割愛してトロイを汝に與へん。シュノールいふ、われに最愛の三都會あり。さはれ御心に逆ふとあらば何時にても亡ぼし給へ我れ又抗はじ恨みじ。唯我が此度の勞を打消ち給ふな。我れは女神の長にして君は天神の長、互に讓る所あらしめよ。乞ふらくはミネルズを兩軍に送りてまづ故とトロイ人をして最も秀でたる希臘人に創を負はしめてよ。よりてミネルズは神勅を奉じて天



降り急ぎトロイ軍に赴き強弓の響あるパンダラスが傍に立ち、汝一矢をメネレアスに試みよ。さすればパリスはいふも更なりトロイ人が如何ばかり汝がいさほしを喜び稱へん。疾くアポロ神に祈禱して名高きメネレアスを射留めよと勧めければパンダラスはやがて磨き上げたる十六握の山羊の角に黄金の尖頭附けたる弓の鞘を拂ひ味方の楯の陰に身を隠し箠より新しく矧いだる矢一つ抜き取り牛の革の弦に番ひ心に善射の神アポローを念じ満月の如く引絞りて矢を放つ。弦音すさまじく響きて飛び行く。あはやと見るはしに豫てメネレアスの危急を慮りて降立てりしミナルヴ慈母が眠れる稚兒の頬より蠅をおふらんやうにツトその矢をぞ拂ひける。されど矢はメネレアスの上帯に突立ち胸甲と腹帯とを徹して皮膚をかすりければ黒血ほどばしりいで、腰より下を紫に染めなしぬ。之れを見たるアガ멤ノンはおのゝきメネレアスもおのゝきぬ。さはあれ其が鏃の肌の外にあるを見て勇氣凜然たり。アガ멤ノンはメネレアスの手を取りて我がうつくしの同胞よ。希臘の爲とはいへ汝一人をしてトロイ人と戦はしめほどく其が命をも危うせしめしことこのうれたさよ。やはか誓を破りし敵を此

のまゝにあくべき。シヨージュの神の靈驗のいまだ炳然ならずとも遂にはトロイの陥落し彼等が頸と妻孥とを我が陣頭に見る日あらん。さりながら。

汝若し運拙くして身逝らば我が悲限なからん又人々の歸思はますく切ならん。我憐むなく歸らばヘレンはトロイの譽さなり汝の骨は徒に此土に朽ち我れは辱を負うて歸らんすらん。さある時は傲慢なるトロイ人は汝が墳墓を踏みしだきて言はんすらんアガ멤ノンの復讐はかくのごときか徒に希臘軍を將て来て何の效もなくて軍を班し勇士メネレアスの骸を残し行きぬ。後の日しかいふものなからんや。さもあらんには大地巨口を開いて我れを呑めか

し。

メネレアスは王を慰めて大將痛く歎かば全軍の士氣を沮喪せん。我が創は急處をよけたりとて名醫マカオンを召す。醫馳せ参りて衣帯を解き治術を施す。さる程にトロイの軍勢押寄せ來たる。アガ멤ノン蹶然と立ちあがり車を乗りすて、徒歩にて諸營を經めぐり希臘人よ汝が武勇を無益に棄つるな。神父シヨージュは不義に黨し給はざるぞ。かの誓を破りて害をなせる軟骨の敵はやがておそろしき鷲鳥の餌とならんといさみをつけ又躊躇するを見ては汝等は辱を思はぬか。疲れたる鹿兒の廣き原を走りて立どまりまた進まん勇氣なきがごとおの



いきて立てるは如何に。敵が我が艦に近寄らんまで然して待てど罵り尙も諸英雄の營所々々を巡視す。先づクリタンの將イドミニウスに赴き、兵事のみならず何事にも他の希臘人に勝れたり」と稱揚し、疾く戰場に駈向へ」と促し次にアシャクス兄弟の營を眺むれば軍馬の既に打揃ひて沙煙を揚げたるさま、黒雲の海面に颯風を捲き來るに似たり。王はアシャクス兄弟に向ひ、汝等に對しては言ふべき事なし。願はくは神よ全軍にこの勇氣あらしめよ、トロイは東の間に没落せん」と。やがて雄辨の老將テストールの許に臻る。彼れは車隊を前列とし歩兵を殿とし弱卒怯兵を其の間に挟み軍令すらく、己れの熟練力量を憑みて獨りはやると勿れ。戦車を密接せしめて戦へ。此くしてぞ古人は戦を破りしと。アガメムノン深く感じ、足下にして少壯ならばといふ。テストール、我れも然ぞ願へれど神は一時に万物を與へ給はざる例なれば憾むも甲斐なし。我れは老いたれば壯者を獎勵せんといふ。王よろこびてメテレアスの營に行くユリシイズも其が傍に在り、皆他の兵が戦端を開くを待つものゝ如し。王難じて、足下は戦を恐るゝか衆に擡んで、進み戦ふべき足下がと言へばユリシイズ怫然として、異しき事を聞くものかな我等が戦ふ事を怠れりや。やがてユリシイズが戰場にての働を見たまへ」と怒る。王はユリシイズを和めて後ダイオミードの許に赴き、足下が父は嘗てシイブスに使して武勇の譽ありしに足下は父に肖ぬ怯者なりといふ非難を傍聞きしたりしステテラス之れに應へて、アトリウスの子よ誤れり。我等は父祖よりも尙に勝れたりと誇れり。我等もまた嘗て小勢をもてシイブスの七門を攻破りしことあるをといふ。ダイオミード睨して之れを制し、勝敗何れにもせよ名譽も悲歎も双つながら王が一身にかゝるべし。王が希臘軍の士氣を鼓舞せんとするは理の至極ぞとやがて出陣の用意す。

かくて希臘の諸將は各々そが部下を督し兵士は皆軍令に畏み肅々として進む物の具の光燦として四邊に輝きぬ。さてトロイの軍勢は雜人種より成りたれば語音亂雜喧噪いはん方なく群羊の囿に入りたるに似たり。二柱の神天より降りマーズ神はトロイ方を、碧眼のミテルグは希臘方を獎勵鼓舞す。恐怖、驚惶、争鬪などいふ神靈戰場を荒れめぐりマーズ神の妹神、軋轢といふがはじめ其の頭をもたげし時はいと小やゝかに見えしが今は蒼空に冲るやうになりて地上を濶歩し其の



進むや叫喚の聲を増さしめ衆を滅却すべき破壊を投下す。かくて兩軍相合ふや牛の革にて作れる柵と柵とは相摩し鎖の衣着たる武夫の槍と槍とは合ひたり。さて一時に殺すもの殺さるゝものの叫喊のこゑ苦しみ叫ぶ聲入り交りて聞こえ流るゝ血は地を深はせたり。譬へば嚴冬の飛泉が山嶺より瀉下して崖幅より流れ来る急流と合しおどろくゝと鳴り響けるを深山なる羊っひが遠ざかりて聞くらん時の如く彼等が懐き叫び荒び騒ぐ聲のいりまどわりて起こりき。

テストルの子アンテロカスマづ進みてトロイの勇士イクボラスを斬る。

彼れを彼れまづ其が馬毛もて飾れる盛の眞中を規ひて打ちぬ。そが銳鋒は彼れが額に突立ち骨に徹りぬ。彼れは眼眩みさながら高塔の如く倒れき。

エレフヘノルといふ勇士走り出で、死骸を引き來たりやがて其が物具を剝がんとす。トロイの勇士かくと見て鎗にてエレフヘノルを殺す。かくて兩軍入りみだれ希臘兵は其を剝取らんとしトロイ兵はさはさせじと争ふ。アジャツクスは一人の若武者を乳より肩にかけて突き徹しライアムの一子アンテアスはアジャツクスを突かんとして誤てユリシイズの親黨の一人を突く。ユリシイズ大に怒り長鎗をふりてライアムの嫡子デモコオンの頭腦を貫く。トロイ兵勇氣はいみへクトルも瞠若たり。希臘人は高く叫んで死骸を牽去る。アポロ神之れ

を見てアキリーズはあらざるぞ。希臘人として金鐵にはあらぬぞと勵ましミネルヴ神は希臘人を慰勞す。兩軍の死傷數を知らず。

### 第五卷

爰にダイヂエウスの子ダイオミードはミネルヴ神より勇力を授かり其の楯と盔とより放つ不斷光は大洋に浴みして出でたる秋の空の星の如く其の頭と肩とよりも同じ光にあたりを輝かしていま大混亂の眞中へと進みいで先づブルカンに事へまつれる僧の子を一突に突倒しぬ。殺さるゝ兄を助けんとせしそが弟さへもすでに危かりけるが彼の神降り來て彼れを闇の中に隠してけり。かくてトロイ方少しく色めいて見えたる時ミネルヴは軍神マーズを諭し何事も大神のまゝにするこそよけれ。なかゝつらひそとて誘ひ去る。また激戦となりて希臘の諸將は夥多のトロイ人を打取りぬ。殊にダイオミードは大洪水の千里を漂はするやうに當るを幸ひ薙ぎ拂ひければ如何なる剛の者も支へ難う見えて今しもトロイ勢總崩れとやらんとしける時パンダラス彎弓を引き絞りてダイオミードの右の肩を射れば血汐は胸甲に淋漓たり。「希臘一の剛の者を射留めたるぞ。進めト



ロイの勇士等とパンダラスが叫びしも甲斐なかりき。ダイオミードは直に戦車に退き其の友スセネラスをして其の矢を抜かしめミネルヴ神を念じて神我れを護りいつくしみ給はし願はくは我れを傷けてもはや日光を見させじと誇言しつる當の敵をば殺さしめ給へ」と勝る。神打聽きて

「心確に眠へ。われは汝が父なるタイゲウスの勇力を汝の魂に授けたるぞや。また神をも人もも明に得認めん爲に汝が眼にかゝれる闇を去りつるぞや。さりながら天神來たりて汝に戦を挑むまも必ず手向ひなせそ。たゞボナス神を見のがすな。來たらば槍をもて剣を負はせよ。」

といふ。ダイオミード心神爽かになり勇氣奮に倍しければ直に戦場に引返へし猛虎の群羊を驅らんやうに縦横に薙ぎまはりて瞬く間に五人六人を倒しぬ。エニアスといふ勇士之れを見て急ぎパンダラスの許に到り足下が名高き弓勢をもて味方を蹂躪せるあの荒武者を射留めよと促す。パンダラスいふ彼れが楯と盔とにて彼れは正しくダイゲウスの子と見ゆるが若し然らば神の擁護なくてかゝる不思議の働をやは爲し得ん。我れすでに一矢を彼れが右の肩に試みつるに或神の怒りけん空しく仇矢とはなりにき。われ出陣の折父の教に従ひてかの美しき車と肥えたる馬とを連れ來ざりしこそ返すくも無念なれ。憑とせし此の

弓箭も一度のみか二度までも其の用を爲さず。

神々しきヘクトルの爲にさ國人を率ゐてこの弓を取りおろし門出せし日ぞ不祥なりし。さもあらばあれ我が再び立歸りて此の眼にて我が故郷を見妻を見高く攀えたる皇宮を見るらん時に我れみづからこの弓を折りて楯に投ぜずば我が敵來たりて速に我が頭を刎れよ。」

と恨みなげく。エニアスこれを慰めてそが戦車に乗らしめていふ足下は鞭を把りて馭者たれわれ下りて戦はん。いやとよ足下は此馬を使ふに馴れたれば進退自在なるべしわれは槍をふりて敵に向はんと諸共に陣頭に進む。スセネラスこれを認めて今向かひ來る敵の一人は強弓の名高きパンダラスにして一人は非ナス神の愛兒なり。危し／＼疾くこの場を避け給へ」と諫む。ダイオミード聞きて「われは進むことを知れど退くことを知らず。敵を見て避くるは我が本性にあらず。われ若し幸に此の人を倒し得ば足下は速かに彼等の馬を率きて去れ。あの馬は昔シヨージが王トロスに賜ひし天下無二の逸物の種なりしをエニアスが傳へ受けたるなり」と語るうち敵はや近寄る。パンダラス進みてやよダイゲウスの子よ。わが鋭き鏃も汝が身に徹えざりけり。今此の槍の鋒をうけて見よといふより疾くダイオミードの楯を突貫きて胸甲に徹しぬ。よも此度は起ち得まじ



と叫ぶ。ダイオミードは汝の的は外れたりといひさま投げつくる槍の鋒をミネル  
 が神が助けてパンダラスの鼻頭に向けしかば其が皓き齒を挫き舌の根を断ち願  
 の下まで突通しぬ。エニ阿斯車を飛下り其の死骸を齧り手向ふ敵を斬らんと身  
 構へたり。ダイオミードは二人にても運び難き巨石を片手に攫みてエニ阿斯に  
 打ちつければ彼れは髀骨を挫きて膝つきぬ。母神非ナス天降りて彼れを白衣に  
 裹み襷をひろげて矢の楯としやがて逃れ去る。スセネラスは敵の駿馬を奪ひて  
 味方の兵に渡しダイオミードは長鎗を打ふりて非ナス神の後を追ふ。

ダイオミードは群衆を押し分け遂に神に追ひせまりて其の槍を投げて摩き女神を傷けぬ。其の  
 鋒は靈香の器る衣を貫いて掌の上指のあたりを破りぬ。不死の血即ち神の身より流れいつる  
 アイコルさいふもの滾々として流れ山でき。なべて神は麵包を食はず酒をたしますされば其  
 の身に血さいふものなく不死の種あり。女神は高く叫んで其の子を投下しけるに黒雲の中よ  
 リアポロの神あらはれ救ひ上げて打藏しぬ。ダイオミード大音揚げ退れシヨウの女戦場を  
 去れ。汝かよわき婦女を欺くをもて足れりさせずや。今こそ覺え知りたため。この後は軍て  
 ふ名を開きても汝は慄ひおのゝかんすらん。」

と罵る。非ナス神は息も絶え〜に落行きけるを健脚のアイリスの神が掻き抱  
 きて場外に出でマーズ神に乞うて其の駿馬を借り車に乗りてオリムポス山に登

り其の母ダイオ子の膝下に致す。母神抱き上げ撫で勞はりてそもこれは何神の  
 所業ぞと問ふ。かの傲慢なるダイオミードがわざなり。最早希臘とトロイとの  
 争闘ならで希臘人は天神とも戦ひぬと答ふ。母慰めて汝少時苦痛を忍びぬ。か  
 く災厄にかゝりたるは汝のみにはあらぬぞ。天神の人間に苦しめらるゝとは已  
 に厭となりき。マーズの神は十三ヶ月間鐵檻の中に繋がれシユノーの神は三尖  
 の矢にて右胸を射られアルト一の神も同じ災をうけにき。辨へなき不敵者のな  
 めなる振舞こそ憎けれ。

さりながらこは碧眼のミテルヅが爲さしめし業なり。嗚呼なるかなあはれダイオニスの子  
 は知らでぞあらん。神と戦ふものは決して長く存ふまじきことな。又怖しき戦場をまかりて  
 其の家に歸りても膝にまつはりて父よと嬌ゆる兒等のなかるべきことなり。」

といひつゝ其の掌もて傷口を拭へば忽ち癒えたり。これを見たるミテルヅは嘲  
 りて曰ふ非ナス神の疵はそが最負したまふトロイ人の爲に希臘の女を媒せん  
 てかき抱きかきくどき給ふはしに其の女が衣につけたるシメガ子にて織き腕を  
 傷けたまひつるに因るならん」と。シユピタルは微笑して非ナスに向かひ「汝は婚  
 姻の事のみ掌り軍事はすべてマーズとミテルヅとに任すべし」と諭す。さるほ



どに希臘の勇士ダイオミードはアポロの神のエンアスを擁護せるを知り三たびまで神に逆ひて突進せしが四度に及びて神大に怒り

「退れダイアユウスの子。身の程を思へ。天神の族と地を歩む人間とは等しからぬぞ。」

と叱す。ダイオミード少し退く。神エンアスを其の宮居に誘ひゆきて治療を施し更にエンアスが影法師を作りて戦場に出だし兩軍其の周圍に戦ふ。遂にアポロは軍神マーズに勇猛剛膽なるダイオミードを場外に逐ひだしてよといふ。マーズの神スレオスの驍將アカマスと化現しトロイ勢を奮勵す。リシアの將サルピドンも亦悲憤痛切の言もてヘクトルを諫めければヘクトル奮つて挺身し將卒に號令す。此に於てトロイ勢再び勇み立ち此處を先途と防ぎ希臘勢も砂煙を揚げて戦ふ。マーズの神はアポロの命を受け雲霧を起こしトロイ軍を助く。エンアスもまた戦場に打て出づ。トロイ兵見て驚き怪しめど其の故を問ふ暇もなし。此の時アツヤツクス兄弟、ユリシイズ並にダイオミード等の猛將が希臘軍の前列に出で巍然として立てる様は高山の雲の如く動くとしも見えざりけり。さてアガメムノンは逃げ走らん者には名譽も救助も來たらざるべきぞとて士卒を勵ま

しみづから敵の一名將を突殺す。エンアスは希臘の若武者二人を討取る。メテラウスこれをあはれむのあまり突進みおはや神助あるエンアスの手に落ちんとす。アンチロカス(テストールの子)馳せ來たりて其の危急を救ひトロイの一將と其の従士とを斬る。時しもヘクトルが精兵マーズとペロナとに前後を護られて寄せ來たりぬ。勇猛なるダイオミードも思はず慄きて引退き味方に告げて敵には神の在るぞ。漫に戦ふなど誠む。すでににして相合ふ。ヘクトルまづ希臘の二勇士を斬る。アツヤツクス見てトロイの一將を討取り其が物の具を剝がんとして争ふうちシリアの神々しきサルピドン進み出で兩雄互に名をのりて相闘ふ。やがて各々創を蒙り従兵に扶けられて退く。希臘方は敵に神在りと聞き且はヘクトルが鬼神の働に愕き進みもせであり。シエノノイはるかに見て大にいらちミナルグを顧みてなどマーズをしてかく味方を蹂躙せしむるぞと云ひく。金銀にて鏝めたる馬車に乗りミナルグと共に天に登りてマーズを戦場より逐はんことをシエピタルの神に乞ひ祈る。さてミナルグを天降らして彼れに對せしめよとある大神の命を受けて二神蒼穹と下界との間を鷲オウゴン地に駈け降る。懸てトロイに降り



其の馬車を霧の中に隠しかよわき鳩のやうに歩みて希臘陣へと急ぎその虎賁猛卒の集まれる所に達せしとき鐘の如き聲のステントルに拵ちて呼ばふらく

「耻ぢすや汝希臘人容儀のみめでたき民草。かの神々しきアキリスが陣中にありけるうちは共がおそろしの鎧におぢてトロイ人はダランダ門の外には出でざりけるに今は彼等遠く市を離れて我が船楫のほきりにて戦へり。汝等そを耻させすや。」

と。碧眼のミチルヴはダイオミードの許にゆき彼れが今しもパンダラスより受けし矢創を冷しつゝあるを見て、汝の父は汝よりも矮小なりしが勇猛の士なりき。汝不肖タイシュウスの子たるに叶はずと嘲る。ダイオミード應へて「われ臆れたるにあらぬぞ示教を奉ずればこそ天神には向はぬなれ」といふ。神いふ「われ汝の背後に附添ふべければマーズをも何神をも怖るゝな。疾く戦車を驅りて我れとシュノードに違約せしマーズに一撃を與へよ」と勵まし馭者スセテラスに代りて自ら鞭をあげ手綱を探る。神と勇士との重みに車の軸も鳴り呻きぬ。ミチルヴは兜に面を隠して進む。マーズはダイオミードを見て鎧を投げかけけるをミチルヴ手に攪み戦車の外に擲げやりぬ。ダイオミードすなはち叫んで鎧を飛ばす。ミチルヴ其の鋒をマーズの下腹に突立て、皮膚をやぶりぬ。其の時マーズが號

泣する聲は幾萬人の兵卒が一時に聞の聲を揚げたらんやうにて兩軍爲めに震ひおのゝきぬ。マーズは直に昇天し父シュノードに「何とて斯かる亂行を看過し給ふぞ」と恨み口説く。シュノード嚴かに誡め、汝常に戦争不和を悦ぶ。故に我れ最も汝を憎む。且汝は母が執拗なる性を稟けたればこの如き厄難に遭ふも道理ぞ。さはれ汝の苦痛を見るに忍びずとて醫官をして其の疵を療せしむ。シュノードミチルヴとは首尾よくマーズを逐ひ得て打悦び共に天宮へぞ歸りける。

### 第六卷

今や兩軍の激戦まばしとだえたり。希臘の勇士は多く敵の名士を討取りぬ。就中メテラウスはアドラストスといふを生捕りぬ。かれ車より轉び落ちて其が前にひれ伏し「あはれ一命を助けたまふとだに我が父の聞かば黄金堆く積める寶藏を開いて我が身を贖はん」といふ。情深きメテラウス哀がりて助けんとす。アガメムノン駈け來たりて「慈悲も程こそあれ」と強ひて殺さす。テストールもまた大に士卒を勵ましければ其の勇猛に怖ぢてトロイ方や、引色になりて見えける時名高き卜者ヘレナス(プライアムの子)エニアスとヘクトルとを願みて「智勇兼備の兩



將軍、われ等此處にて防ぎ戦ふべければヘクトルぬしは急ぎ市にゆきてわれ等の母に告げやむことなき刀自達を碧眼のミチルヴの宮居みやゐに集へさて最も美しく大きやかなる價貴き衣裳いそぎ一重ひとへねを彼の神に捧げしめ若し驍勇ダイオミードの厄難を遁れしめ給はんには十二頭の犢を犠牲にすべしと禱らしめ給へといふ。ヘクトル心得てまづ諸軍を鼓舞し再び大戦争となる希臘兵は神また天降りしかと疑ひて敢て戦はず。ヘクトルはわれ今よりイリアムに臻り諸長老に謀りわれ等の妻をして神に犠牲を捧げしめん。諸士努めよやと勵ましていでゆく。さるほどにダイオミードはクラウカスといふものと端なく陣頭にて相あふ。ダイオミードまづ聲をかけわが鋒をうけんとは健氣なる振舞かな。汝尋常の武夫にはあらず。未だ手練を見ざるが何者ぞ。或は天神の化身かさらばわれ戦ふを欲せず。神に刃向はんものは必ずたゝると聞く。或は五穀を啖ふ人間か疾くわが刃にかゝりて奈落に沈めといふ。クラウカス答へて

「何故に汝はわが犠牲を糺すぞ。木の葉も人の種も相おなじ。風來たりて葉を散らせむ春來たればまた若葉を生ず。人間の世々はたかくの如し。一代死し他の代生まる。かくても尙犠牲

をきかんさならば名乗りても聞かせん。」

といひて其の祖先ベネロフオンの眉目まゆめかたち美しかりけるを國王の妃その戀のかなはざる意趣により國王に讒せしかば王これを憎み遂に其の命を失はずべき種々の方便を設けて其の王の許へ送りやりしが此處にて九日の間手厚き饗應をうけさて十日の朝にいたり頭は獅子中身は山羊下部は龍なる妖獸キミラといふを殺すべき命をうけ難なくこれを斬りアマソン、サレミー等の妖怪をも退治し其の王の娘を娶りて三人の子を設けしが其の第二子はわが父なりと長々しく物語ればダイオミード大に悦びさては足下の祖父はかつてわが父の客となりてかたみに贈せしことありきされば足下とわれとは舊縁あり刃を合すべきにあらずと互に其の鎧を取交はして退く。

さるほどにヘクトルはスキアン門にいたるほどに市の婦女群れ來たりて夫、兄弟の安否を問ふ。さて大理石づくりなるプライアムの殿に入れば母出で迎へ汝激しき戦にさぞ疲れつらんわれ醇酒を持ち來たらん諸の神達に供へてのち汝も飲みて氣力を復せよ。酒は疲れを醫することよなきものぞ。母上われ酒を欲せず。



且かゝる汚れたる手にて供獻もいかになり願はくはやむごとなき刀自違をミチルグの宮居に集へて祈念せさせ給へ。此に於て母はパリスが嘗て外國よりもたらせし最も美しき大きなやかなる綾衣捧げて神に祈念を凝らしける。ヘクトルはパリスが居間に臻り見るに彼れは物具打物を查べて居り。ヘレンは夥多の侍女と共にいそしげなり。ヘクトル叱りて曰はく「汝のためにトロイ人は戦ひ且討死すなるに汝何ぞ思はざるの甚しき」と。パリス應へて「阿兄の言是なり。われつや／＼トロイ人に不満あるにあらず。かくしてあるは心に愛あればなり。さもあらばわれ妻も出陣を勧めたり。いざ今より戦にいでん」といふ。ヘクトル黙然として言なし。ヘレン和めて「わなみ生まれし時にやがて暴風にかいさらはれて逝りしならばかゝる恥辱はあるまじきに今はそれも甲斐なし。かく淺ましき薄運の身となりぬるも神の定めさせ給へるならん。せめては人の憤世の嘲を解くべき勇士の妻とならずてはと思へるに夫の志固からで世の憤と譏を受け給へるぞかなしき。我が故にこそ兄上もみ心を痛め給ふらめ。淺ましきの夫婦の身や。行末歌人の歌の料にやならん」と打わびて「兄上よ志ばしこゝにて慰はせたまへな

どなだむ。ヘクトル「われさしては居られず。御身はパリスを勵まして出陣せしめ給へ。われは再び歸り得べきか否か計り難ければ妻と子とに別を告げて來ん」といひて出で行く。

ヘクトル我が家に歸りけるに妻アンドロマキイは見えず。はした女を呼びて「妻は何れへ。妹の許へかヘレンへかはたミネルヴの宮居へか」と問ふ。「あらず奥方はトロイの兵疲れて希臘方の勢強しといふ噂きし給ひて心狂はしげに幼き君と乳人<sup>乳人の</sup>とを具しイリアムの高臺へと急ぎ給ひぬ」と答ふ。ヘクトルやがて引返す。スキアン門にて妻子にあふ。乳人<sup>乳人</sup>はうつくしき星のやうなる稚子<sup>稚子</sup>を抱きて従ひたり。ヘクトル稚子を見て打笑み妻は駈け寄りて縋り泣く。「君はその猛きみこゝろねの爲に御身を亡ぼし給はんずらん。君はこの稚子と幸なきわが身とを憐れども思ひ給はぬなり。わが夫に離れまゐらせばこの味氣なき世に何に慰められて存<sup>存</sup>へん。我が身今は憑るべき親族もなし家尊<sup>家尊</sup>はアキリーズの刃にかゝりて土に埋もれ七人の兄弟も同じ日に黄泉の人となり残りし母御もダイアナのためにあへなくなりたまひぬればたゞわが夫をば父母とも兄弟とも憑みてあるをひ



たぶるに勇にはやりてわなみ等をば孤兒寡婦とならしめ給ふなよ。敵の登り來ん處には成の兵を置きて卜者に進退の指圖をばせさせてたべと掻き口説く。ヘクトル慰めてわれども其の懸念なからんやは。さりどて今未練にも戰場を退らばトロイの男女に何の面目かあるべき。且われ常に武名をあげんと欲し人に先じて闘ふをや。さりながらやがてこの神聖なるイリアム亡びトロイ人も敵の槍先に朽ちん日の來たらんずらん。我が國人わが國王はたわが兄弟の止よりも心にかゝるは御身が身の上なり。無慙にも希臘のあらしをが泣き沈める御身を率きたてゆきて見もなれざりし機織り水汲むわざをやせさせん。其の時彼等また御身を指さして見よやはトロイ人の中に最も勇猛の譽高かりしヘクトルが妻なりと曰はんずらん。わがなき後には御身如何ばかりの愛目を見るやらん。任他われはこの悲歎の聲を聞かずして消え行くべし。

さかく言ひて後、偉なるヘクトルは稚子をかき抱かんさて雙手をぞ伸ばしける。おさな子は父が威めしき形相におどろき其のきらめける金の盛る頂より物凄くもうなづける馬の毛の飾きに怖びて哭き叫びて乳人の温き懷の中に縮みひそみぬ。温然としてそが慈父もそが尊め

る母も笑みぬ。ヘクトルはやがて盛を脱ぎて煌然ときらめかして地上に匿きさて後愛子に接吻し又手にかき抱きて愛撫しツヨウサにも其の他の神々にも禱りて曰ふ「天の神々よあはれわが如くにこの子をもトロイ人中に傑出せしめ勇力人に勝れしめたまへ。且勇ましくイリアムを統ぶるものさならしめ給へ。行末に人の戰場より歸り來らん折あらば敵に彼れば其の父にも増して勇猛なりさいはしめ給へ。又彼れをして敵を斬りて血汐またゝる分捕の品を獲しめその母をして衷心の悦を感じしめ給へ」と。かくいひて後彼れは其の愛しの妻の手へ童を渡しぬ。されば妻は泪ながら打笑みて其が滿はしき懷の中にぞ受けおさめける。夫は妻をあはれがり慰めて「わが爲にさな嘆き給ひそ。われ決して死ぬべき時の到らぬに陰府へ行くとはなかるべし。さばれ一たび生を受けたるものは猛きも弱きも宿命さいふものをば避けがたし。御身はさく家に歸りて侍女を督して紡織の業に従ひ給へ。戦陣の事に従ふは苟もイリアムに生れたる男の本分ぞ特にわれの務なり」といひて盛を取りあげゝる。妻ははら／＼と涙を流しふりかへりみかへりつゝ、家路をさして歸りゆきて

数多の侍女と共に「ヘクトルはまた歸り給はじとて悔みなげきぬ。此の間にヘクトルはパリスとトロイ門のほどりにて出逢ひければ打連れて戰場へ急ぎ行きぬ。

## 第七卷

疲れ果てたる水夫の天神が吹きおこせる順風を得たらんやうに兩勇士はトロイの陣頭に現はれ縦横に希臘勢を斬散らせば碧眼のミネルヴかくと見て霧地に天



降る。アポロ神もまた降り會す。アポロ曰ふ、貴神は希臘人に勝利を得させんとて天降れるならんがわはれわが言を容れて今は一先戦を休ませ其の後イリアムの亡びんまで争はしめよと。ミチルヴいふ如何にして戦を止めしめん。「されば我れヘクトルを勵まして一騎打の勝負をさせせん」。二神の談話を傍聴せしヘレナス此の旨をヘクトルに傳へて奨勵す。ヘクトル悦びて諸味方の兵を控へさせ獨り槍を提げて陣頭に現るればアガメムノンもまた希臘勢を制止して動靜を窺ふ。二神は鶴の如くいと高き神木の上に在り。ジョーヴの神もまた喜びて見下したり。ヘクトル呼ばりて曰はく「兩軍の士我が言ふところを聽け。天上にのみます大神は和を裁可せずして兩黨に災を下したまふ。いづれか滅びずば災害止む時なかるべしとなり。思ふに希臘の陣中ヘクトルの好敵手たるべき大勇者あらん來たりて我れと雌雄を決せよ。而して彼れ我れを殺さば我が物具をば劍ぎてそが軍艦に送り其の死骸をばトロイの人に渡し火葬を行ふを得しめよ。若しまた我れ彼れを討取らば其の手續は同じかるべし。かくて汝等希臘人が其の勇士のために墳墓を造らば後人そを見て稱傳せんこは赫々たるヘクトルと戦ひ

て花々しき戦死を遂げにし英傑の墳墓なりと。何れにもせよわが榮名は遂に滅却する時なからんと。希臘軍はこを辭絶せんとの耻辱なるべきを思ひながら諾かんことをも恐れて暫くは默然たり。メネラウス奮然として突立ち咄口に猛くして魂婦女子の如き聲。ヘクトルに挑まれながら一人の應ずるものなきか。耻ぢずや汝等孱弱の徒。汝等は因循して水とも土ともなれ我れひとり出で闘はん。運は神の力にありといひさま物具つけてかけ出でんとす。アガメムノン急に引どいめ汝血迷ひしか心を靜めよ。敵は誰れと思ふ驍勇なるアキリーズら怖れたりしヘクトルなるぞ。汝が力の及ぶ所にあらざと言葉をつくして押し止む。老将テストル進み出て嗚呼痛ましき哉希臘國に大悲愁來たりぬ。ペリウスの老将こそ聽かば嘆かんざらん。憶ひ起こせばそのかみマーズの神鎧に怖れて手向ふもの絶えてなかりしイリウタリオンを討取りし當年の若武者テストルがかくも老いぼれて此の衝に當るに由なきぞ口惜しき。嗚呼希臘の大剛と呼ばるゝ汝等だに出で闘ふ勇なきかと且勵まし且罵る。これに勇をつけられてアガメムノンダイオミードを首として九人の猛將われこそと皆一時に立ちあがりぬ。



ネストル圖をもて選定せんといふ。さらばとて各々圖を探りてアガムムノンが  
 盔の裡に投ず。諸士はアッヤツクスかダイオミードか又はユリシスかに圖の落  
 ちんとを神に騰る。やがて圖をふりしに盔より飛び出でしはアッヤツクスの名  
 なりけり。アッヤツクス大に悦び斯くと諸軍に告ぐ。衆皆天に仰ぎて願はくは  
 アッヤツクスに勝利あらせ給へ」と念ずるうち彼れは堅甲に身を固め美々しく打  
 拵ち長槍を打ふりて靜々と動き出づさながらに軍神の天降りたるかと怪しまる。  
 トロイの兵これを見て身顛ひ脚戦く。ヘクトルすら心悸穩ならざりけり。さる  
 ほどにアッヤツクスは七枚の牛の革にて造れる楯を擁し近寄りて曰ふ如何にヘ  
 クトル獅子心のアキリーズあらずとも尙希臘軍中に如何なる勇將あるかをひと  
 り我れのみを見ても知らん。アキリーズあらずとも我が軍は汝に敵するに堪へ  
 たり。いざ速に雌雄を決せよ」と。ヘクトル聽きて「我れを婦女小兒とあなどるな。  
 我れは戦ふこと人を斬ること楯を振る法皆能く知りたり。殊に千軍の進退にな  
 れ万馬の中に突戦すること我が長技なり。さはれ我れ竊に隙を見て敵を傷くる  
 を欲せず。いでや公明なる戦をせん」と長槍を舞はしてアッヤツクスの巨楯に投

げつけそを六枚まで徹しけるがアッヤツクスの投ぐる槍先はヘクトルの楯を貫  
 きてそが襯衣までも裏掻きける。此に於て兩士は飢えたる獅子又は野猪の狂へ  
 るが如く長槍をもて打合ふ中アッヤツクス跳りて突込む鋒ヘクトルが頸をかす  
 りて黒血迸り出づ。彼れ撓まらず軀をかはしかたへなる大石を掴み楯を目がけて  
 抛つ。アッヤツクスもまた一層大なる石をとりて精力を籠めてヘクトルが諸膝  
 になげうつドウとなるアポロ飛降りて扶け起す。二人更に劍を抜き闘ふ。互  
 に重傷を負はんとす。時しも兩軍の傳令使馳せ着き笏を打ふり「ジョーヅ神は汝  
 等勇士を愛しみ給ふこと偏頗なし。夜もすでに近きぬれば須からく一たび争闘  
 を止むべし」といふ。アッヤツクス曰はく「ヘクトル同意ならば我れに異存なし」と。  
 ヘクトル曰はく「げに汝は神助うけたる槍の達人とこそ見ゆれ。今は一先退き後  
 日を期して相見ん。互に物を取交はさん」とて白銀造りの劍を贈る。アッヤツク  
 スも紫の帯を贈りて引別かれければ兩軍舉りて無事をことほぎける。  
 アガムムノンは牛を殺して賀宴を開く。ネストル策を獻じて曰はく「休戦の約成  
 る上は髪に血を原頭流して空しく冥界に赴きぬる無数の希臘人が遺骨をだに



其の子等孫等が許へ持歸らん爲にこれらが死骸を集めて車に積み軍艦より少し  
 距れたる處まで運び其處に一基の墳墓を築き其が傍に我が軍艦の寨として樓門  
 を築き人馬を防ぐ圓壕を掘らせよと。諸將是に同ず。さてトロイ方にてはアン  
 チノル起ちて「そも此のたびの事たるわれより破約せし罪あればヘレンをも財寶  
 をも速に送還すべきなり」と勸む。パリス難じて「こは足下の言とも覺えず。われ  
 断じて妻を還す能はず。さりながら財寶は何なりとも望に任すべし」といふ。老  
 王プライアムの曰はく「まづ各々糧食に腹を肥し警衛に油断なかるべきなり。扱  
 後明朝使節を遣してパリスの決心をばアガムノンとメネレアスとに告げ且味  
 方が死骸を焼きはてんまでは戦を休めんと言はせよ」と。此に於て天明に使節希  
 臘船に行き使命を傳ふ。ダイオミド應へて「ヘレンも財寶も受くるに及ばず。  
 トロロが運命の逼れるは嬰兒だに知るところなり」といふ。アガムノンいふ「死  
 人に怨なし其が火葬は残りなく執り行へ。たゞし希臘人の決心は今ダイオミ  
 ドがいへるに異ならず」と。使節引返して復命す。

大海原より昇る旭日の光の新に戰場にかへやくや兩軍の兵卒相集りて誰れとも  
 見分け難き死骸の血を水にて淨め熱涙を滌ぎて堆く積み上げ火をかけて焼く。  
 希臘人は墳墓と樓門とを築き其がめぐりに濠を掘る。地震の神ネアチユンは是れ  
 を見て父ツョーゾの神に謂ふ「希臘人の新に作れる寨や濠や人間に厚くして神に  
 薄きを證せり。僭越の所爲ならずや。かくて我れとアポロとが築きしものもこ  
 の世に忘らるゝに至らん」。大神宣らすらく「彼等が本國に歸らんととき打碎きて海  
 に沈めよ」と。さて日も暮れける時酒をつみたる夥多の商船アガムノンとメネ  
 ラウスとに千斛の美酒を贈り來たる兵士は各々金銀牛皮等を賣りて酒に代へて  
 大饗宴を催す。終夜雷鳴凄まじく人皆またも神の災するならんと恐れ顔色青ざ  
 め酒を地に灑ぎてまづ神に供へざれば敢て飲むものなし。さて後やう／＼臥し  
 倒れて熟睡す。

## 第八卷

橙黄色の衣きたる朝は今しも下界に滿ちわたりぬ。雷の神ツョーゾは群峰のオ  
 リムポス山の絶頂に諸々の神々を會してのらすらくやをれ男神も女神も聴け。  
 かまへて我が命にな背きそ。疾くこたびの事を落着せさせよ。トロイ希臘何れ



の方にもわれ擅に助力せんとする神あらば我れ之れを捉へて黄泉よりも遙かあなたなる深く暗き幽獄の裡に投げ落しわが偉大なる威力を示さん。譬へば汝等一同黄金鎖を取りて天より降り朕を牽き下さんどもがくとも決して牽き下すとは叶ふまじ然れども我れかうと思ひ立たば一擧して大地海原はものかは有りど有る物たやすく引揚げそをオリムポスの巔に結び附けん。わが威力の汝等のに勝ること此の如しと。一統の神恐れて答ふる所なし。遂にミナルブのいふわれ等は父神の威力の抗すべからざるを知るさもわれ逆鱗に觸れて塵とならんずる希臘人のいとあはれなれば只一言彼等に示教するを許したまへと。大神うち領きやがて車に上り駿馬に鞭ちアイダ山の巔に降りて兩軍の動靜を見下す。折から希臘人は糧食を食ひをはりて物具を着しトロイ勢は妻子の爲に身を棄て戦はんと待ちかけたり。已にして關門をひらき衝き出づ。劍楯の打合ふ音鯨波の聲に交り殺し殺さるゝ者喚き叫び血は地上に滾々たり。日の中天に昇りし時

神は金秤を取掲げてそれに希臘ミトロイとの永久の死(命數)を載せ其が中央を手にとりて徐に秤り試み給ふに希臘の兇運は低く傾きぬ。希臘の命數は實に限ある下界の上にもいまりぬれ

ミトロイのはそれに反して廣大なる上天までも上りける。

此に於て大神アイダ山より鳴り轟き希臘陣に向うてもえだつ電光を送りければ衆顔ひ戦き有る限まどふ。アガメムノン、アヤツクスすらえ止まらず。ネストルひとり馬のすゝまぬ爲に止むを得で後れけるがやがてパリスが放つ矢に其が馬の頭腦を甚深かにぞ射られける。さてそれが爲に狂ひ跳る馬の手綱を断ち切らんくと遠つる處へヘクトル駆け向ふ。ダイオミードすはやと思ひてユリシイズが落行くを呼び止めけれど彼れ聞かずして引退く。ダイオミードは急ぎ老將の馬前に立塞がり老躰あな危し。君が従者も馬も疲れたり疾くわが車に乗り玉へ。いで我れヘクトル手鎧の程を知らせんと共に車に乗りやがて間近くなる。ダイオミード槍を投げしに覘それて敵の馭者の胸板を突きて轉ばし落す。この時またもや雷なりはためき電光ダイオミードの馬頭を射る。焔もえあがりて馬脚すくみネストルも思はず手綱をふり落し顧みていふ勝利は足下に伴はずと見えたるぞ。神慮如何ともせんやうなし。一先此處を落行かん。ダイオミード曰はく君の言理なり。されど口惜しきは敵將ヘクトルが公言せんことなり」



イオミードは彼れに打負けて遁れたり」と。チストルいふ「假令ヘクトルの志か公言すともトロイの男女は足下が勇猛の證を見たり何とてそを信ずべき」と。二人馬の頭を引返す。ヘクトル大音揚げ「ダイダウスの子女は婦女と化したるか。疾く遁れよ臆病なる少女や」と嘲る。ダイオミード三たびまで引返さんと決心せしが三たび雷轟きてトロイに勝利の暗號を與ふ。ヘクトルは味方の兵士に向うて「今神はわが黨に勝利を與へ功名を得させ給ふぞ。彼れや取るに足らぬ城壁を築けりあはれ白痴の徒や。我が馬彼の濠を越えんこといとやすしいでやかれが軍艦を焼拂ひ彼等をば焔のうちに塵にせんためわれ行きて火を放たん。進めチストルの楯は上天までも聞こえたる總金の物ぞ。ダイオミードの胸甲はブルカンが鍛ひ造れるものぞ。分捕して汝等が譽とせよ」と勵ます。上天のシュノーこれを見て奮激しまきりに身を顛はすれば大オリュムポス山もふるひ動くやがてチプチュンを顧みて「地震の神よ尊彼等トロイ人と大シュヨグをばね返して希臘人を助けんの意なきか」といへばチプチュン「われ所詮大神に抵抗し能はず」と應ふ。」さるほどに希臘勢はヘクトルに追ひ詰められ艦の前なる濠はすべて人馬楯をも

て覆はれけり。シュノーの告なかりせばあはれ無数の軍艦も一炬の下に失せたりけらし。アガムノン<sup>アガメムノン</sup>は中央艦隊なるユリシイズの大なる黒船の甲板に突立ちきたなし希臘人。汝等さきに梁肉に飽き美酒に酔へりし時には敵百騎二百騎にも當たらんと廣言せしを耻ぢずや。今只一人のヘクトルの爲に我が船艦は悉く烏有とせられんとす。嗚呼シュヨグの神何ぞ無情なる。われ未だ曾て祀を懈りしことなきにあはれこの急難を遁れさせ給へ」と訴ふ。神哀憐の情禁じ難く小鹿を攫みたる一羽の鷹を供物机の上に降らしむ。希臘人勇み立ちて再びトロイ陣に突入る。眞先にダイオミード續きてはアガムノン、アジャックス、メテレアス等最後にはチウサル彎弓を挟みアジャックスが楯の蔭に身を隠し隙を覗うては敵八人まで射て落し射て落し、かく我が的の外れざるに獨り此の狂犬のみはといひく引絞りて放つ矢はヘクトルには當らで咎なきプライアムが一子をぞ射斃しける。二の矢を番ひけるにアポロの神ヘクトルを庇ひしかばまた誤りて馭者の胸板を射ぬきぬ。ヘクトル悲み憤り急に地上に飛下りて大盤石を取りて投げつければチウサルが弓持てる腕麻痺れけり。アジャックス急ぎ楯もて擁



護し船の中へ連れ行く。またもヨイヴの神トロイ勢の勇を鼓舞せしかばヘクトルにそが前列を蹂躪せられて希臘勢颯と退く。シュノ一是れを見てミテルヴを顧みて我等かく一人のために希臘人が殺さるゝを見るに忍びずといふ。ミテルヴ曰ふ「ヘクトル今かくあれど必ず希臘人の手に罹りて果つる時あらん。今ヨイヴ我等を憎むともまた我等を頼む機來たらん。疾く戦車の用意したまへ。われ軍裝を着け天降りてヘクトルを見ん。彼れ我れを見ばよも泰然たる能はざらん」と。相共に時の神の守れる天門を開きて馳せ降る。さるほどにヨイヴは金羽使アイリスをつかはし其が命を傳へさせて曰はく「汝等今何處にか行かんとする。何事をか企つる。若し希臘人を助けなば立地に汝等が車を挫きて倒に刻落し且馬をば跛となさん。我が電光に搦たれたる創傷を癒やすには十餘年を要すべきぞ」と。是に於てシュノ一ミテルヴに向かひ然らば詮なしすべて運に任せんと言ひて馬を天厩に繋ぎ悄悄として他の神と共に金床に就く。さてヨイヴ神はアイダ山上よりオリムポスに登り二神を見て汝等が憎しと思ふトロイ人に恨を晴らすこと能はざりしを悔むな。都てオリムポスの神にして我に抗ひ得る

ものはなし。一たび我が電光に搦たれたるものはまた天闕に歸り得ずと云へばシュノ一應へて大神の嚴命あらば我れ戦ふまじ。されど希臘人が塵とならざらん爲助言することを許し給へ。大神曰はく汝明日希臘の大軍を打崩す我が力の強さを見ん。アキリスの起たんまではヘクトル其が劬を止めざるべし。されば汝何處に往くとも我れは意に介せずと。シュノ一答へず。太陽の光海に沈みて暗き夜漸く下界に近く。希臘人これを機として退く。トロイ人悦ばずヘクトル軍議を開き演ずらくわれ今日希臘の船艦と兵とを亡ぼして凱陣せんと思ひしに生憎や日暮れぬ。されば汝等先づ其が腹を肥せ。其が馬を戦車より解け。急き市より牛羊家より酒麵包を齎し敵が夜に乗じて落ち得ざらんため薪木を集めて篝火に天をも輝かせよ。壯者をして市を警固せしめ各々焚火せよ。我れ明朝ダイオミードと雌雄を決せん。とやがて

“The troops exulting sat in order round,

And beaming fires illumined all the ground.”—Pope.

“As when about the silver moon, when aire is free from winde,



And store shine clear, to whose sweet beams high prospects on the brows  
Of all steeps, hills and pinnacles thrust up themselves for shows,

And even the lowly valleys joy to glitter in their sight;

When the unmeasured firmament bursts to disclose her light,

And all the signs in heaven are seen, that glad the shepherd's head."

—Chapman.

### 第九卷

希臘の兵等<sup>ヘレノス</sup>これを見て氣憤し心亂れ再び進みて戦はんとせざりければアガメムノンいみじく心を痛め傳令使もてひそかに諸將を會し巖頭より進る黒泉のやうに涙を流して「マヨーン神はかくまで我がどもがらを欺き困めて今更に面なくも歸郷せさせんと欲りしたまふ。神慮此の如し所詮トロイをば取り得んの望なし。今より直に一同此處を去らんと思ふはいかに」と云へど滿場うち志めりて答ふるものなし。其ありてダイオミード突立あがりていふ我れ先づ王に反對せんとす。かゝるは議場の習にあなれば王よ諒したまへ。往ぬる日王我れを憶病未

練と罵りたまひしにあらざや。あはれまことに大神は王に二物の只一をのみ授け給ひたれくはしくは萬人のつかさたるの志るしに王の笏をば授けたまひたれど最大の力たる勇氣をば授けたまはざりしぞ。あはれ君は希臘の男兒をばなべて怯弱なりとやおぼす。怪しきかな王實に飯らんとおぼすか。速に帆を揚げさせよ船はまさに磯邊に漂へり。さもあらばあれ我々希臘男兒は敵を亡ぼし盡さんまでは此の處に踏み留まるへし。よし彼等は留まるを欲せずとも我れとステネラスとはトロイの末期を見果てずてやは退かん。あないふ甲斐なしといきましく。ネストル進み出でし流石は智勇を兼ねたるダイテウスの子弱年ながらいくも言はれけるよ。一定列坐のひとくも同じ思ならん。さりながら足下の言葉は尙盡くさる所あるに似たり。いで更に足下よりも年の長じたる我が言を聽け。すべて内訌を好むは無頼の輩のわざぞ。先づ靜に一同に夕餐を終へさせさて警固の兵をば壘外の濠上に屯せしめよ。我れこれを血氣の壯士等に委命す。又王は須からく諸將校を宴席にみちびきたまへ。スレーヌより齎しぬる酒は帷幕の裏に滿ちたり。さて徐に宴間に策を議せんはよからずや。今こそは眞に危



機なれ王よ擽へて策の最も剗切なるものを容れたまへといふ。こゝに於て七將  
 ちのく、一百の警兵を率ゐて蝨と藻との間に屯し烽火を焚きて夕登のこゝろじ  
 らひをす。アガムムノンは旨酒を湛へ齋梁を盛りて將校を勞ふ。其の時老將チ  
 ストル徐に説き出だして曰ふ我れは唯先づ王に對していはまくす。抑も王は兆  
 民の主なり公福を進めんための料に笏と法とを天つ神より授かりたまへり。さ  
 れば王まづ自から深く慮りて策を建て亦他の意見をも聽きて苟くも公益を裨け  
 んものはそをば取りて施したまはざるべからず。詮ずるに王はすべての先達な  
 り。我が所存を忌憚なくいはんか王嘗て我が諫を用ひずしてアキリースの帷幕  
 に闖入しアリシニス姫を強奪し驕慢剛愎にも天神のめで給へる勇士を辱めたま  
 ひき。思ふにこれ今日の厄ある所以か。所詮我がともがら相議り贈賜又は慰諭  
 をもて彼の勇士が怒解かざればかなふべからずと。アガムムノン應へていふ足  
 下の言我が失を道破せり。我れ速に我執をすて、彼れが心を宥めんため七個の  
 三脚器十片の金貨幣一個のかとやく釜十二頭の駿馬別にリスピヤの七美人とア  
 リシニス姫とを添へて彼れに贈らん。又首尾よくトロイを亡ぼして凱陣するに

至らば金銀珠玉をもて彼れが船に積まん。且トロイの美女廿人を擇びて與へ又  
 本國に歸らば女三人のうち彼れが好まんに彼れを配してん。さてそが上にまた家  
 畜に豊かにして忠敬の心あつき民あまた住める七の市をも與ふべしと。チスト  
 ル聞きて贈そのごとくばアキリースいかで悦ばざらん。いでく其の使たらん  
 人々を選ばん。第一にフェニックスを先導とせんアチャックスとユリシスとは附  
 添ひたまへ。また別に二人の傳令使をも隨行せしめたまへと云ふ。三人各命を  
 受けて淨水を手に灑ぎて恭しく大神を祈念し纏て立ち出づ。かくてチストルは  
 使者の人々に首尾よく使命を果せよとて吩咐することねむごろなり。  
 あはれアキリースの心を解かせ給ひてよと三人の使者は地の神チアチオンを祈  
 念し波よする磯邊を辿りて程なくミルミドンの軍艦にぞ著きける。帷幕の中を  
 窺ふにアキリースは鬨と清き音する琴掻き鳴らして古英雄の功績を歌ひて自  
 から慰むるさまにてあたり。其が傍には近臣パトロクラスのみぞ侍りたる。使  
 節の入來るを見てアキリースは慌て、琴を掻き抱きながら起ちて彼等が手を把  
 りて、かく勇士打揃ひ誓誼をすてず訪づれ給へるはうれし。さもあれ斯くわざと



我れを尋ね來ませしは思ふに深き譚ありてならんとして彼等を椅子に請じパトロクラスに酒宴のこゝろじらひせさす。頓て自から山羊鹿などの肉を調理して人々に配り主も客も飽くまで啖ふ。よきところにアツヤツクス領きてフェニックスに心得さす。よりにユリシイズはなみくくと酒をたへたる杯を舉げてアキリスに向かひていふ君が健康をほぎまつる。あはれ我等アガムノンの帷幕にてもまた此處にても芳醇美肉に飽く何の幸ぞ。さはれ我等が此處に來しはかゝる饗應をうけんとしてならず。今や希臘の大事逼れり足下起ちて國の爲に一臂の力を振はずば我が希臘の安危まことにはかり知り難からん。あれ見られよ敵はあの如く我が艦隊に近づき篝火を燒きて我れを襲はんとするなり。剩へシヨーツはまばく電光を閃かして彼等に瑞兆を示しヘクトルはた神の力を憑みて人もなげに狂奔し我が艦を燒き我がともがらを黒煙の中に塵にせんと廣言す。或は神彼れが望に應ぜん我がともがらが敵の唐手に斃れん日遠からじ。願ふは足下起ちて國人を救へ。今此の機を誤らば芳悔詮なからん。さきに足下の老父が足下をアガムノンに托しぬるとき誠めて曰はざりしや

「我が子よミテルゾミシュノーが神慮に叶はば勇力を汝に授け給はん。さはれ汝が偉なる魂をおさへて胸の裡におけ温良恭謙は勇力よりも尊ければなり。又邪なる争を忍べ希臘の老少が一層汝を景仰せんが爲に」

と。足下はその誠を忘れ果てしか。あはれ智を蝕ふ忿怒を擲ちて反慮せよ。アガムノンは足下に云々の贈物もなさんとせりと。ユリシイズはこゝに於て詳に前條に見えたる贈品の數々を語り且いふ

「たさへアトリウスの子と其の贈品さはいかばかり足下の心に思まはしくとも困しみ憂へたる他の希臘人の衷情をば憫さし見よ。彼等は足下を神とも崇めてなり。今足下一たび起れば大なる譽たちどころに來らん。又足下出陣せば必ずや彼のヘクトルを獲ん。彼れ狂ひ猛りて前

後を忘れはや間近く進み來たりぬ。彼れは我が軍中に其の敵手なしと公言せりと。かく勵まされてアキリスの應ふらく總じて胸臆を秘し賊しあらぬ事をいはんは奈落の門の如く我が常に嫌惡する所なり。いでや我れは我が胸懷を打明けて語らん。アガムノンは更なり何者が我れを説くとも詮ずるに無益の事ぞ。國の爲に獻身して長永に敵と戦ふとも竟に何の好果報なかるべきを我れ覺ればなり。勇怯勤惰所詮別なし。其の報を得るや一なり大功あるものと功なきものと全く何の差別もなし。譬へば彼の母鳥が己れ惡食しひとへに其の雛をはごく



むが如く我れ希臘人のために思を焦し睡らざりし夜は幾夜ぞ。十死の中より一生の血路を切抜けしこと幾度ぞ。我れ嘗て十二の都城を陥れ夥しき分捕物を獲てそれを悉くアガムノンに與へき。彼れ其の多分を留めて僅に餘れるをのみ我れに與へき他の將校には若干の恩賞をあて行ひながらひとり我れにはつらくして我が最愛の妻をも奪ひぬ。そもくアトリウスが大軍を起こし此處に來しは何の爲ぞ美人ヘレンを取戻さん爲ならずや。あはれ人誰れか其の妻を愛でざるべき。我が妻を愛づるも同理ならずや。然るにアガムノンは我が賞として得たる妻を奪ひ我れを欺きしは如何。また言ふとなかれ。敵の兵火を拂はんの策は彼れ須からく足下等に質すべし。我れは在らずともあらなん。彼れすでに壘を高うし濠を深うしたりしかも敵を防ぎ得ざるか。我が戰場にありし時にはへクトル曾てスキヤン門よりこなたへは進まざりしに。さもあらばあれ我れまた彼れと闘はん心なし。明けなば夙に艦ユネボネして帆を揚げて漕ぎいでん。海神我に幸せば三晝夜にして我が郷に着達せん。かしこには殘し置ける夥多の財寶あり且此處にて獲し金銀をも載せ歸らん而もひとり我が恩賞はアガムノンの爲に奪

ひとられき。足下等とく歸りてアガムノンに告げよ我れは再び彼れと面を合するをだに屑とせず况や我れを欺きし彼れに力を協はすることをやど。彼れが身は天に任させよ。彼れがかゝることに遇ふは其のところぞ。其の贈物は我れには一毛の價值だになし。よしそを幾倍にし別に埃及シーブスの財たからを積むともやはかアキリーズが心を動かし得ん。縱令ギナスの美にミチルゾの才慧を兼ねたりとも我れなど彼れが女メテを娶らん。我れ郷に歸らば美女は我が心の儘なり。將たイリュム全都の財貨とても豈我が命に換ふるに足らんや。

「奪はゞ以て牡牛も肥えたる羊も三脚器も駿馬も立どころに獲らるべし。人の命のみは一たび此の齒の門を過ぐれば又得らるべからず又捉らふべからず。我が母なる銀脚のセチス嘗ていへらく二重の宿命ありて我れを死に導く。思ふに我れトロイ城の邊ほとりにて眠はゞ我が名譽は不滅ならんが恐らくは郷よほどに歸り得ず。然るに我れ郷よほどに歸らば我が赫々たる名は落つらんが我が壽は永かるべし。

我か恐りてあらん間は所詮希臘軍に利なからん。足下等歸りてかくと大將に告げて更に策を建てさせよ。其中フエニックスは此處こゝに残り明日我れと共に歸國の途に上れと言ひ放つ。みなく呆れて言なし。フエニックス涙を流していふ。



和子いま忿怒のあまり敵の兵火を攘はで本國へ歸らんと決し給ふ。我れなでう和子に離れて留まるべき。そのはじめ御身まだ稚くて戦闘にも韜略にも長じ給はざりしころ老公ベリウスぬし御身の傅として我れを添はせ万の事を教へ導けど命じさてアガムノンぬしの許に送り給ひき。よしやある神がこの老還ひたる身を其かみ父の許を去りにし頃の陽春の如き青年に復らしめんと約し給はんずとも我れは片時も和子の側を離るゝとを希はじ。想へば昔我れ母がわりなき頼によりて密に我が父の愛妾に通じぬ父いみじう憤りて神々に種々の呪詛をなしたき。かくて父の家におがたうなりて親族友だちの止むるをも聴かである月明き夜守る人の隙をうかいひ締めしき奥殿の扉をひらきて忍び出でベリウス君の許に落ちゆきしに王我れを一人子のやうに愛しみ剩へ數多の莊園を賜はり富有なる身とならしめ給ひき。それより後我れ和子を心の底より愛しみまゐらせいたはり育て今の神々しきアキリーズとはならせまつりぬ。其の頃よ我れ若し和子を膝の上に掻き抱き參らせて食物を切み又酒をもすゝめずは餘人の介抱にては和子は決して食卓に就き給はざりしぞかし。(又或時の頭是なくむつがり

て酒をこぼし我が胸なる襦衣を濡し給ひしも幾度か。

“And the wine

Held to thy lips; and many a time in fits

Of infant frowardness, the purple juice

Rejecting, thou hast delayed all my vest,

And fill'd my bosom” — Cowper

されど我れ子なければせめては和子を神のやうなる人に育て上げんとて夥多のつらきをも忍び侍りけるぞや。あはれアキリーズ君よ願はくは忿怒を忍び給へ。無慈悲の心を持ち給はんことと和子に何の要かある。忍辱の徳は御身よりも負に大なる徳譽力を具へさせ給へる神にすらあるを。神々の怒すらも人の誤りて道を踏みたがへ其の逆隣に觸れたらん時祈誓懺悔せば神慮解くといふものを。かく言葉を盡くして諫めさていふ若しアガムノンが今此の贈物を齎さず又行末に他の贈物をせんと約せずば我れとても和子に向かひ忿怒を忍びて希臘軍に加勢あれどは勸むまじきが彼の王の贈物此の如くに大にして其の使節を選べるとかくの如く慎めるを見ては御身に些の越度なければとて只管に怒りてすげなく拒みたまはんは道ならじ。いかで御心を解きてよとて是れより古の英雄が謝辭又



は贈物によりて忿怒を解きしくさく／＼の例を引きて「贈をうけたまへ」と勸め、さらば希臘人は御身を神とも仰がんずらんといふ。アキリーズ答へて「我れ命のあらん限は大神の勅命にて譽を得たりと思へばさる區々たる譽を得んとは望まず。汝アトロウウスを悦ばせんとて泣き哭しみて我が心を迷はすな。汝を愛しむ我が憎悪を得ざらんと思ふ汝が何の要ありてか彼れをいつくしむぞ。我れを害へるものをば汝は害はんと思ふこそ當然ならるべきに。百事我れと共にせよ。今宵はこゝに睡れ。明けなば船出の商議せんといふ。アチャツクス曰ふ「ユリシーズぬし我等が使命達し得るの望なくばせめても急ぎ歸りて待ち詫びぬらん人々に仔細を報げん。アキリーズの胸中には驕慢剛愎のやどりて同胞のよしみをも顧ずなりぬ。あはれ何等の無情ぞ。兄弟愛見の仇敵をすら償品によりて宥せし例ありと聞きぬるに只ひとり婦女子のためにアキリーズはかゝる剛愎なる心を神より得つるか。任他また何をか言はん」と。アキリーズいふ「我れ彼の件を憶ひ起せば憤懣制する能はず。アガメムノンは我れを遇することいやしき外夷の如くなりき。足下等只速に歸り去れ」。

“Return, then, heroes! and our answer bear,

The glorious combat is no more my care;

Not till the flames, by Hector's fury thrown;

Just there the impetuous homicide shall stand,

There cease his battle, and there feel our hand.”—Pope.

爰に袂を別ちてユリシーズとアチャツクスとは希臘の陣中に歸りさてアキリーズが憤懣ますます激しく明日つとめて「フェニックスと共に歸郷の途に上らんとするよしを物語りければ皆々憮然として言葉なく互に面見合はするのみなり。其時ダイオミード人々を勵まさんとて王に向かひて曰ふ「王よかくなる上は最早贈などして彼れをな頼み給ひそ。そは徒に彼れが怒を増さしむるのみならん。思ふにやがて又彼れが戰場に出づらん時の來たるべし。それはともあれ我々は今まづ酒食をもて腹を肥し少時身心の疲をやすめ明けなば勢を揃へて打ち出づべし」と。人々この言葉に漸う力を得て各々その營にぞ退きける。

## 第十卷



他の將校は終夜熟睡しつゝあるに、ひとりアガムムノンのみは無量の感慨に心も裂くるばかりなれば、つゆ目睡まず、トロイの陣營に炎々と燃ゆる烽火、風の吹き送る軍笛の音、さまざま敵の人馬の雜音を聞き、又味方の有様を顧み、大神のつれなきを怨じ、頭髮を掻きむしりて呻きゐたり。やがてネストルに遇ひて商議せんと思ひ定めて起きいづ。同じ心にメネレアスも我れ一人の爲にかく數多の希臘人を惱さんこと罪深しと思へば、頭は枕につかず。これも兄を喚び醒まさんとて立出でけるが、王の既に起き出で、艦の舳に立てるを認めまづ聲をかけ、何故に物具つけて此處にはいでまし。或は何人をお斥候とて敵陣に送らん賢慮なるかと問ふ。アガムムノンいふ、大神御心變はらせ給へば、今汝と我れと此の希臘人を庇護すべき手段を熟議せでは叶はず。誠にヘクトルが近日の所業前代未聞にしてわれに種々の災害を與へたり。汝はアヤヤックスとアイドメニウスとを喚べ。我れはネストル許ゆきて共に衛兵を檢閲せん。メネレアスいふ、さらば我れは其處に留まりて家兄の來ますを待たんか、はた引返すべきか。アガムムノン互に紛れもせば口惜しかるべし、其處に待合はせよとて立別かれ、急ぎネストル許ゆき

見れば、彼れは暖げなる床の上に臥してあり。傍に列ねたる物具、打物の光四邊に輝きて、輿ゆかしく見えけり。ネストルはやをら頭を搔げ、アガムムノンを見て、真夜中に唯一人忍び來たるは何者ぞ。疾く名乗れと呼ぶ、アガムムノン應へて、ネストルよ神の爲に苦患の中に沈められたるアガムムノンにこそあなれ。國家の大事の心にかゝりて束の間も得まどろまず、かくは徘徊するなり。あはれ足下起きいで、我れと共に衛兵の勤怠を檢閲せよ。ネストル曰はく、よしさらば、アイオミード、ユリシイズ、アヤヤックス等をも喚醒まさん。さるにても心得ぬはメネレアスなり、如何に位貴しとて、かくいは、君の心に逆はんか、知らねど、君にのみ勞せさせて已れは、安に眠れるは何事ぞ。アガムムノンいふ、げに彼れは姑息の弊なきにあらず、されど今は然らず。彼れ已に我れに先ちて人々を喚び起し、門前に待てる筈なり。ネストル然あらんには何人かまた彼れが命に背かんと悦びて軍裝を着け、打物取りて先づユリシイズの軍艦に臻り、決戦落去何れにか定むべき。疾く起きいでよと喚び醒まし、相伴うて、マイオミードの許にいたり、かく熟睡するは何事ぞ、敵兵既に間近く逼りたるに、と呼べば、マイオミード驟然と起きあがりて曰



ふ老將軍例ながら鏗鏘たるかな。ネストール曰はく「今や希臘の存亡、剪刀の刃にかゝれり。願はくは足下ゆきてアヤツクスとユリシーズとを呼び醒ませよ」と。さてネストールは此處を去りて衛兵の屯營に行き見れば將校はみな眼もせで戒嚴に餘念なかりき。ネストール此の跡を見ていたく賞美し諸將校を従へて濠を超え昨日ヘクトルが追逼りし空地に到りて一同坐を占めネストール説きて曰ふ「さて汝等の中に敵の陣營へ忍び入り兩陣の間をさまよふ敵兵を討取るか又は彼等がなほ我が艦隊のほどりに留まらんとしてあるか、敵の密議を聞き取り來ん程の勇士なきか。若しこの難事を爲了せ歸らん者はその譽は天下に雙なく恩賞また莫大なるべし。將校よりは各々賞として黒羊、犢牛、牡豚を贈らん又およそ饗宴には招かれざることなかるべし」といふ。ダイオミード奮然として立ち「我が神氣勃々たり。いでや我れ其の任に當たらん。若しまた我れに伴ふものあらば愉快一入なり。二人して行かば視察の便宜はた大ならん」といふ。勇士等一時に立ちて「我れこそ同伴せめ」と叫ぶ。是に於てアガメムノンの曰はく「ダイオミードよ足下が心に適へる勇士を擇べ。かまへて位階族姓等に斟酌なせよ」と。ダイオミード應へ

て「我れに同伴者を撰べどあらば何ぞ智勇兼備のユリシーズを忘れん。彼れと共に行かば奏功疑なし。ユリシーズ聞きて「さな賞め過ごしそ。任他星も既に遠かりて天明にも程近ければいざ急ぎ立出でん」といふ。ダイオミードは腰に兩刃の劍を帯び頭に無飾盔と呼べる牛革の甲を戴き、ユリシーズは弓箭を挟み一口の劔を佩き外面に象牙の如き熊の齒を植へたる革の盔を戴きて立出づればミテルヴ神其の行く道にて一羽の水禽を送りこしぬ。折柄夜色暗澹として咫尺をも辨じ難けれど二人は其の羽音を聞きて悦び勇み恙なく此の大事を果たさしめ給へと神に祈念し二人は兩箇の獅子の如く闇夜、死人、遺骸、武具、黒血のうちを辿り行く。「トロイ方にてヘクトル將校を集めて、今希臘陣に忍び入り彼等は遂に落去すべきかはた再び戦はんとしてあるかを探り來んものには華美を盡くせる戦車一輛と駿馬二頭とを與へん」といふ。爰にユリシーズの子ドロロンといふものあり進み出で「戦車とペリユウスの子の料馬とを賜へ必ず使用を果たし歸らん」といふ。然らばとてヘクトル笏を捧げて大神に誓ひしかばドロロンは白狼の裘を着し同じ革の盔を戴き希臘の陣へと急ぎゆきぬ。さるほどに此方をさし來るユリシ



イズは遙にそを望み見てダイオオミードに向かひ向より來るは敵方の間者か、さらずば死骸の冑を剥がんとする野伏士か。いでまづ彼れをやりすこし急に突かゝりて討取らん。彼れ脚駈かたどくて走らば我が軍艦の方へ追ひ行かん。兩人は路傍なる死骸の間に身を潜む。かくともえしらでドローンが通り過ぎてやゝ距たれるころ二人は走りいで、其の後を追ふ。彼れ其の蹙音しりぞを聞きて思へらく、「トロイの味方が我れを呼戻しに來しならん」と。やがて其の間わづか一投槍にも足らざりし時正しく敵なるとを認めて急に走らまくす。兩人疾く追ふ。恰も狩に馴れたる二匹の獵犬が其の牙を磨きて林のうち逃げ迷ふ鹿兎を追ふに異ならず。あはや希臘の陣に逃げ入らんとするほどにダイオオミード槍をふりて突かゝり止まれ。汝如何に逃ぐとも最早我が手を逃れえじと。故意と右肩を突外して槍先を突立つれば彼れは身を顛はせて口訥り顔色青くなりて動き得ず。兩人はせよりに捉ふれば涙を流し、あはれ兩勇士よ君若し我が命を助け給はんとあらば我が父限なき償品を捧げて贈ふべしといふ。ユリシイズいふ氣を確にせよ、まづ死を思ふなかれ。有昧あやふに我が問に答へよ。汝は何故にかく夜深けて獨り我が陣に向

かへる。戦死者の物具を剥がんとてか或はヘクトルが命を受けて我が動靜を窺はん爲にか。あるは又汝が一存か。いかに。ドローン慄ひく、全く左にあらす。不本意ながらベリユウスの子の駿馬と美々しく飾れる戦車とが欲しさにヘクトルが命のまゝ斯る大膽なる決心をなしぬ。即ち敵の進退を探らんとせしなり。ユリシイズ微笑みて、汝がアキリースの天馬を得んどの大望を企てたりとや。彼の馬どもは人間の御し得べきものならぬを。そも汝がヘクトルに別かれしは何時何處ぞ。又ヘクトルの武器と料馬とのある處は何處ぞ。警戒、陣所、軍議の仔細はいかに。尙我が艦隊に接して屯せんとするか或はやがて市に凱旋すべきか。疾うく眞直に語れ。ドローン曰ふ英雄よヘクトルは數多の評定者をアイラスの廟前に集へて協議の最中なり。問はせられたる警兵は精選の者にあらず。かの篝火を焚きて戒めたるはトロイ人なり遠國の兵は皆睡りたり。ユリシイズ又問ふ、さらば彼等はトロイ人と立離れてあるか。ドローン段々にすかさされて陣營の模様を詳に語りつゝ、さて曰はく、就中リサス王の馬は最も美しく肥り其の色は雪を欺き其の走ると疾き風に似たり。金銀もて鑲めたる戦車、きらびやかなる



黄金の鍔天神のものかど怪しまる。ゆき見て我が言の信偽をたゞしたまへといふ。ダイオミード聞きをはりて、汝いみじくも白狀したり。命を助からんとは不覺ぞ今汝を赦さば又間者となりて來たらんといひひく／＼縋りつきて哀を求めんとするを劔もて頸の中央をうちければまだ物いひく／＼死にけり。さて其が物具を劔ぎミナルフ神に捧げて祝し又之れを樹上に懸け樹枝並に葦葉をもて目標としつ。かくて漸くスラシヤ兵の陣營に來たり見れば皆戦に疲れて前後も知らずいねたり。うるはしき鍔を三列につらねて王リサス其の中央に臥し其が馬は戦車の外軾に手綱もて繫がれたり。ユリシースダイオミードに向かひ指していふこれこそドーロンが告げし馬なれ。足下いま大力を用ひて此の馬を解くか或は彼等を殺せ。我れ其の馬を管守せん。此の時ミナルフ神ダイオミードに勇氣を吹込みければ彼れは獅子が羊群に入るが如くに忽ち十二人を殺す。鮮血流れて地を染めたり。ユリシースは馬の驚かす通らん爲にとて足もて死骸を蹴やりダイオミードがリサスを刺殺す間に馬を解き率來て合圍をす。ダイオミードは戦車を引去らんか、なほ彼等を殺さんかど躊躇ふうちミナルフ天降りて他の神のト

ロイ人を喚起こさん前に疾く歸艦せよと告ぐ。兩人其の命を奉じ馬に鞭うちて急ぎ歸る。かゝりけるほどにアポロ神はダイダウスの子にミナルフの附き添ひ行くを見て大に憤りリサス王の甥を喚起こしました其の黨を喚醒ます。此の騒ぎにトロイ人皆起き出で、一同呆れ驚く。さて希臘陣にては兩士の恙なく歸り來しを喜び迎へテストルまづ其の次第を問ふ。ユリシース細に語りて帷幕の中に入りドーロンの分捕物をミナルフに捧げ海水に浴して汗を拭ひ心神を清うしさて香油を身に塗りてやをら食卓に就きけり。

### 第十一卷

天上下界を遍く照らさんと曙の神が床を離れける時、ゾーウ神は不和の女神に戦亂の前兆を齎して希臘の軍艦に降らせけり。さて女神が聲高く物凄く呼ばひて兵士の勇氣を引立つるほどに眞先にアガメムノンかゝやく鍔を着下し銀鉦つけたる脛甲をはき由緒ある胸甲に黄金白金をもて飾りたる劔を肩にかけ頭には馬毛盔を戴き帯には白金の三頭蛇を纏はせ手には大楯を抱き二箇の大槍を提げて跳り出づ。他の將校もあつて下知を傳へて騎兵を前に控ゑ濠の中に備を立



てたり。時しも大空より血の雨降る、これ數多の勇魂が奈落に沈まんを知らずる神慮なりき。同じ時にトロイ勢は平原の小高き丘に陣を取りヘクトル中央に立ちて號令す。妖星の雲間に出没するかと見ゆ。かくて兩軍の相會うて殺し殺さるゝ様は農夫が相對して稗麥を蒔るに似たりけり。日漸く中天に上りしころ希臘勢勇を奮ひて敵の隊伍を碎く。アガ멤ノン<sup>アガ멤ノン</sup>は猛火の森林に燃えうつりて旋風<sup>まがまが</sup>のそを四方に吹き煽ぐが如く縦横無盡に薙ぎ立て斬り廻る。其が前に斃れたるトロイ兵算を知らず。されば敵は四度路になりてスキヤン門の方へ逃れ走る。アガ멤ノン<sup>アガ멤ノン</sup>を追ひてあはや壘壁を超えて市中に乘入らんとしける時大神アイダの嶺に天降り金羽使アイリスをヘクトルのもとに降らせて告げしむらくアガ멤ノン<sup>アガ멤ノン</sup>が味方の陣中に狂ひ廻れる間は汝また戦ふなかれ。汝の兵卒をして敵に當らしめよ。さて彼れが槍をもて突かれ又は矢創をうけて退かんとしたる時大神必ず汝が身に敵艦までも達するに足る大勇力を授け給はんと。ヘクトル聞きて畏り戦車を飛下りて兵を指揮し再び大激戦となる。

嗚呼ミューズの神よ今しも、トロイ市人か、はたそが同盟國人か知らず、眞先にアガ멤ノン<sup>アガ멤ノン</sup>にかけ向かはんとて出で來しは誰れぞ。語りませ。彼れこそアンテノルの子イフィダマスにてあんなれ。其の素性來歴は云々なり。さても件のイフィダマスは已にアガ멤ノン<sup>アガ멤ノン</sup>のそば近くなりし時その槍をもて帶際を志たゝかに搏ちけるに銀板に當たりて鋒<sup>つば</sup>鉛の如く曲がりぬ。アガ멤ノン<sup>アガ멤ノン</sup>其の槍をもぎ取り劍を抜きて彼れが首を打落としぬ。只管に國人を助けんとてまた契も淺き妻に別かれてかゝる異郷に來て空しく刃のさびと消えしは何といふ淋運ぞや。さるほどに彼れが兄コオンかくと見てまばしは悲に眼眩みしがやがて槍を取りて竊にアガ멤ノン<sup>アガ멤ノン</sup>の隙を覗ひ彼れが小腕の央ほどを傷けしり。アガ멤ノン<sup>アガ멤ノン</sup>これにもひるまで彼れがイフィダマスの骸を牽去らんとする所を槍をもて突殺しぬ。さてなほも進まんとせしかど傷口固まりて血も止まり卒<sup>つひ</sup>に激痛を覺えて堪へ難かりしかば遂に戦車に打乗りて艦中へ引返す。ヘクトルかくと見て敵の大剛の者深手を負うて退きぬ。今こそ神が味方に響<sup>こたへ</sup>をば與へ給ふなれ。いざふれ諸共に蹄を揃へて高名をせよやと呼ばしり、蕪地に駈入りて將校兵卒の嫌なく斬倒す。正に是れ西風南の雲を吹拂ひて怒濤捲き來たり泡沫の碎け散るに似た



りけり。あはや希臘の軍艦も乗取られなんと見えける時ユリシイズ、ダイオミードに目ませして諸共に陥止まりて敵を斬る。希臘勢これによりて又や勢を得たり。蓋し大神ディオイダの山頭にありて互角の勝負をさせせける故兩軍の死傷相當しき。さるほどにヘクトルは隊伍を整へ鬨の聲をあげて進み來たる。ダイオミード之れを待ちうけ長槍をふりてヘクトルが盔頂を打けるが彼れがアポロイ神より授かりたる三重の盔に彈かれて皮肉には達せず。ヘクトルは馳て群中に紛れ入りて危き命を助かりけり。ダイオミードは逃がさじと其の後を追ひ、汝今アポロイ神の保護に因りて辛くも一命を拾ひたれど再會の折には我れ必ず汝の命を取らんと呼ばひく。又も前列に突き入りて討取れる敵の物具を剥ぎつゝあり。ヘレンの夫パリスこれを見やりてライラスの廟の圓柱に其の身を寄せかけながら弓ひきまぼりて一の征矢を射放てば規誤たで彼れが右手の腿を篋深に射ぬきぬ。パリス小跳して高く叫べばダイオミード動ずる色なく、汝が如きへろく、矢何程のことかある。婦女痴童の戯たるに過ぎず。我が手並はこれと異なり一たび我が刃に觸れんもの一命助かりがたしといひさま其の矢を拔

取りしが流石に痛手にや惱まされけんやがて戦車に乗移りてあなたをさして退きぬ。後に殘されしはユリシイズ一人のみ。心の中に思ふやう、我れ今多勢に怖ぢて走らば大なる耻辱なるべしさりとして一人囚とならんは一層の辱ならん。嗚呼いかにすべき。さはれ、なぞて我れは斯かるを論ふぞ戰場を退かんは臆病者の所爲ならんを。我れ豈一步も退かんやと。きと心を決するうちに、トロイ勢早くも群れ來りて左右より取圍む。ユリシイズは群犬に吠えかゝられたる牡猪の牙を磨ぎ齒を噛み瞋り狂へるが如くに八面に當りて瞬間に三人に創を蒙らせしが四人目の英傑ソिकासの槍にて痛く胸甲を突かれ皮膚をやぶりぬ。されどミテルツ神の擁護によりて辛くも危難をのがれ忽ち起き直りてソिकासの肩より背にかけて突通す。さるほどに又もトロイ勢相勵まして押寄せ來たる。ユリシイズ少し退きて有る限の大音を上げて味方を呼ばふと三たびに及びし時、メテレアス聞きてアツヤツクスにかくと告げ相伴うて來たり見ればユリシイズ一人槍をふりて四周の敵を薙拂ひつゝあり。アツヤツクス塔の如く濶歩して其が傍にゆき巨楯をもて彼れを覆へばトロイ人愕きて逃げ散りぬ。さてメテレアスがユ



リシーズを扶けて去る間にさながら洪水の一時に押寄せたらんやうにアキリスは敵の人馬を薙倒す。時しもヘクトルはスカマンダル河畔にて他の希臘の猛將勇卒との戦の最中なりければ應援するに由なかりき。かくて奮戦闘なる時パリスまた希臘の勇士マカオンに矢創を負はしぬ。希臘人彼れに恙あらんことを恐れて戦場を退きアイドメニウスはテストルにすゝめてマカオンを伴ひ軍艦に歸り治療を受けしむ。

かゝる苦戦敗北の躰を見守りけるアキリーズは今マケオンがテストルと共に本營へ引返すを見て急にパトロクラスを呼び寄すれば如何なる御用かど出で來ぬ。これぞ彼れが薄運の緒と後にこそ知られけれ。アキリーズ顧みていふ「希臘方もはや得支ふまじ我が前に來て跪きて哀願するに至らんは必定なり。パトロクラスよいそぎテストルの許に行きて今彼れが戦場より扶け歸りし手負は誰なるかを問ひ來たれ。打見たる所はマケオンに似たりといふ。パトロクラス心得急ぎ出で行く。さる程にテストル等はやうく我が陣營に着きて濱邊の涼風に汗を拭ひて帷幕の中に入り妻なるヘカミードに酒宴の用意をせさせ共に觴をあげく

つろぎて閑談せり。其の時戶外に佇む者あり。テストル其のバトロクラスなるを認め手を取りて内へ請ず。パトロクラス拒みていふ「休息の暇無し。今足下が扶け來ましし手負は何人ぞ。問ひたし來よとアキリーズの命あり。直に復命せずば譴責を受けん。足下驚はくは諒察せよといふ。ネストル應へて「アキリーズ果して創を蒙れる希臘の兒を憐むか。何が故ぞ。あはれ彼れは希臘全軍に大患の簇集せるを知らざるなり希臘の勇將が枕を並べて艦の中にうち臥せるを知らざるぞ。ダイオミード、ユリシーズ、アガメムノンを首としてユリピラスも矢創を受けたり。然るになほアキリーズは我が軍を憐ま<sup>ず</sup>敵兵の我が軍艦に闖入して我々を塵にせん時を待てるか。憾むらくは我れ往時のテストルならず叶ふべくは今一度彼のイリス人を打殺しし剛勇の若武者に立返り我が軍の爲に努力せん由もがなとうち慨きつ。やがてまた一身を抛ちて希臘人の爲に粉骨碎身せし往年の物語を長々しく語りて云ふ「我れは生涯かく人の爲に竭くししにアキリーズは獨り自ら其の勇をたのしむ必ずや大に悔ゆる時來たらん。當役出陣の折我々希臘勢を驅り催しユリシーズと共にペリウスの宮を訪ひし時偶々足下の父メ



チチウスと足下とを見たりアキリーズも又其の傍にありき。ペリウスは牝牛の肥腿を炙りてジョーヴ神に捧げ足下等は其の肉を調理しつゝありき。さて我々はアキリーズに案内せられて宴席に上り手厚き饗應をうけにき。其の時我れ足下等に陣を懲慥せしに足下等いたく悦びペリウスは先づアキリーズに衆に勝れて常に勇猛なれど命じまたメテステウスは足下を誡めてアキリーズは素性貴けれど汝は年長なり彼の人力量すぐれたれど汝常に傍にありて輔佐忠告を忘るる勿れといひき。足下早くも件の訓をば忘れたるか。今とても後れたるにあらざ此の言をもてアキリーズを説けかし。神助あらば再び彼れが心を奮起するに至るとあらん。朋友の忠諫ばかりいみじき者はなきぞとよ。さもあらばあれアキリーズ或は豫言を思む由ありて或はまた神勅のもし難き由ありて出陣を肯せずばせめてもミルミドノスの軍勢を引従へて足下代はりて出陣せよかし。足下若し彼れが甲冑を装ひ打物をとりて出でばトロイ人一定足下をばアキリーズと見誤りて逡巡せん。さあらんには戦疲れたる我が軍の少時は憩ふべき暇を得んと。チストルの此の説諭は深くもパトロクラスの心を動かしぬ。さてパトロ

クラスはやがて立ち出で、エリシイズの軍艦に近づく。たま／＼太腿に矢創を負ひて跟<sup>よみ</sup>踏き／＼落ち来るエリピラスに遭ひぬ。彼れは其の頭と肩とに汗を流し、黒き血創口より迸れり。パトロクラス勞りて、あら無慙や希臘の將校が加ふる不運を見ざるを得ざるか。如何にエリピラス希臘人はなほヘクトルを支へ得るかはた彼れが槍尖<sup>やぶ</sup>に倒るべきかと問ふ。コリピラス應へて、最早希臘の運は竭きたり再び起たん望なし。勇猛の士は悉く艦の中にうち臥したり。あはれ足下我れを扶けて我が黒艦に到り足下がアキリーズより授かりし醫術を施してよ。醫官さへ創を負ひぬされば我れを看護するものもなしと。パトロクラス聽きていふ、我れ主長の急命を帯びたれど足下の苦痛を看過するに忍びずと。即ち彼れを肩にかけて帷幕の床上につれゆき小刀もて矢を拔取り温湯にて黒き血を洗ひ藥草の根をもて治療を施しけり。

## 第十二卷

さるほどに兩軍の戦はなほ闌なり。希臘の深き濠も壘壁も最早敵を支へ難くぞ見えたる。そも此の壘壁は天神の心に逆うて築きつる物なれば久しく其の形を



保つべうもあらざりけり。やがてフライアムの城市没落し希臘人の本國へ引返さん曉にはチアチユンとアポロとの兩柱の神がアイダ山頂より落ち來る百川の流を引きて一時に打毀つべしとかねて經畫してありけるぞかし。今しも其の周圍に鯨波矢叫の聲起こりて砦の矢倉もあどろくしく鳴り響く。さる程に希臘勢は旋風の如くに薙き廻るヘクトルに辟易し大神の叱咤にうたれて皆軍艦の方へと退く。ヘクトルは身を擡んで、眞先にすゝみ黨類を勵まして濠を渡らしむ。されど其の間渺茫として見上ぐれば千仞の斷崖險しく峙ち其の底には逆茂木をさへ植ゑたれば此處に到りて馬も高く嘶きて立ちすくみ容易く廻ゆべくも見えざりけり。時しもトロイの名將ポリダマス策を献じて曰ふ「騎馬にては到底此の濠を超えがたし。勝敗を天運に任せて我々一同御者に馬を守らしめ置き一齊に徒歩して攻登らんと。是に於てヘクトルは逸早くも戦車を飛び下ればポリダマス、ケブリオス、パリス、アルカタウス、アゲノール、ヘレナス、デイフオベス、アツウス、エニアス、アルキロカス、アコマス、サルピドン、クラウカス、アステロピウス等おの／＼隊伍を五段に整へ牛草の楯を列ねて勇氣凜々一舉して希臘勢を追ひ落さんとぞ

試みける。

其が中にアツウスのみはポリダマスの助言を用ひずてなほ車馬と御者とを從へて敵の艦隊を襲ひけるこそあろかなれ。彼れは遂にアイドメニウスの楯にかゝりて歸らぬ客とぞなりにける。其のはじめ彼れは希臘の兵が平原より歸り來る時軍艦の左手をさして戦車を輾らせつゝ敵の軍門に到り見るに其の扉は開きてありけりそは味方を入れんが爲に開きたりとは知らでそいろにも濶地に突入らんとせし不覺さよ。彼等が入來たるを待受けて希臘の勇士ラビティとポリピラスとが金剛力士の如くにぞ突立ちたる、さながら山腹に風雨を凌げる大樹の如く動くとしも見えざりけり。されどもアツウスは之れにひるまず部下の兵士を從へ喚き叫んで攻上るに壘上よりは大石を投下し劍戟の降り下る有様風に舞ふ六花に似て無數の石片の楯にあたる響物凄し。アツウス焦燥ちて攻めけれど克つべうも見えざりけり。此の間に他の將校は各々他の木戸に打向かひて襲ひければ希臘勢は必死となりて頻に石を投下し防ぎけれどトロイ方の若武者の爲に兵あまた討たれたり。かゝりしかばトロイ方は大に勇みて倒れたる希臘人の物具



を競うて剥がんと老たりし時端無くも一の妖兆ぞ起こりける。そは一羽の鷹の血潮老たる生蛇なまへびをくはへたるが蛇が身を扭ぢりて鷹の頸に傷を負はせられたれば痛さにや堪へざりけん蛇を群衆の中へふりおとして何處ともなく飛び去りけり。トロイ人これを見てよき兆きざしならずとて戦き慄ひぬ。ポリダマスはヘクトルの傍に立ちていふ「市民の身をもて君の意に逆ひ申さばまたも御怒おこりに觸れんずらんが我れ熟く考ふるにいまあの鷹が蛇を持ち歸りながら其の雛に食はしむるを得ざりし如くたとへ我々が希臘の艦隊を乗取り得とも終には我が兵士の夥多を彼等に討たれあの鷹の如くになりて歸らんか。賢慮いかに」と云ふ。ヘクトル罵りて曰はく「汝の言ふ所毎に此の如きに過ぎず。今いふとは眞面目かさあらば諸神が汝の智力を滅ぼしたまひたるにやあらん。汝は大神の教を忘れて却りて飛鳥の垂示に従へと我れに勸むる者ぞ。一飛鳥がたとへ朝日に向かうて飛び西天をさして翔ければとて我れに何の關する所ぞ。我々はたゞ當に人間と諸神とを統御するゾイゾの大御心に順ふべきなり。我が國の爲に戦ふ是れ唯一の命なり。汝何が故にか戦ふとを怖るゝ。思ふに我が兵皆陣死すとも臆病なる汝は遂に討

死するを得じ。さりながら若し汝の怯懦が源となりて其の餘弊他の兵士に及ばし我れ直に汝の頸を刎ぬべきぞ」と。即ち其の軍を進む。大神アイダ山嶺より大風を吹下して希臘の軍艦に向かうて砂塵を捲きあげければトロイ兵勢を得て競うて希臘の壘に攻上り矢倉の壁を打碎き楨杵もて柱をくつがへし一齊に乗入らんとす。希臘兵なほ退かずこゝを先途と防ぎ戦ふ。兩軍の相投ずる石は大雪の亂下するに似たり。案ずるに此の時ゾイゾ神が其の子サルピドンサルピドンを奮起せしめざりせばヘクトルの力をもてしても希臘の城門を破ると能はざりしならん。今やサルピドンは美しく磨ける鎧の楯を擁し二柄の槍をうち振りて希臘の城壁を徹座とせんと決心してグラウカスに向かひていふ「我等リシアに於て毎に饗應の首座を占め神の如く敬はれかの美しき豊なる莊園を有てるは何故ぞや。我等衆に擡んで先登しリシア人をして云はしめよ我等の王はみだりに美酒厚味に飽き給はずと。我れ等若しひとへに戰場をだに遁がれさらば其の齡老いずまた死なざるべきものならば我れも敢て戦ふまじくまた足下をも戰場に遣るまじきが蓋し人間の遁る可からざるは死といふものなり。いつかは死なで叶はぬもの



なり。いでさらば進まんと。相共にリシヤ隊を率ゐて進み單騎にて雌雄を試むべき長き大將もがなど希臘陣を見直して遂にアツククス兄弟とチウサルとを認めたり。此の時吶喊の聲喧しく呼べども聞こえざればトオラスといふ者をアツククス許遣はしリシヤの大將押寄せたり出で、御げよと呼びひ傳へしむ。タラモニアン、アツククス之れを聽きてチウサルを伴ひ櫓に上り見るにリシアの剛將すでに胸壁を攀ぢつゝあり。タラモニアンまづ大石を投げてサルピドンが徒黨の一人を討取りチウサルは矢をもてグラウカスを傷けまた戦ふに堪へざらしめき。サルピドンこれを見て愁に堪へず矢庭に一人を倒し逞しき腕をさし伸べて支柱を攪みえいやと引けば城壁剝げ落ちて通路開けたり。此の時チウサルの矢サルピドンの胸の邊に中たりけれどヨローザ神掻き除けつれば徹らざりき。さて又アツククスの楯は其の楯を突きや、彼れをして手を控へさせけれどなほ敢て退かで大高聲を擧げてやよ我れに力を合はせて敵艦に乗入るべき路を開かずやと呼ばり、リシヤ兵を勵ましけり。されば希臘人もあひく、にのほり來たるリシヤ兵を攘ふこと能はず兩陣かたみに必死となりてあめき叫

びて寸尺の地を争ひ樓門壘壁到るところ鮮血したりて紅を染めいだしたれど希臘人はなほちども退かで辛うじて敵の乗入るを支へたる譬へば金石と羊毛とを秤に載せて平衡をとらんとするごとく危うしどもまた危うかりき。さるほどにヘクトルは竟に城壁を越えて躍り入り二人力にてもあげかねべき尖頭の大磐石を牧者が羊皮を運ぶがごとくいと輕々とふりあげて城門の梁をめぐけてうちつければ蝶番は碎け門は折れ棟木は四方に飛び散りて門は急ちさつとひらきぬ。

其の時名將ヘクトルは物凄き闇夜の押寄せたらんやうに門内へ突き入りぬ。身にまさへる金甲の光はおそろしく四邊をばらひ兩手には槍を撃提げ双眼火の如く輝きたる天神にあらすば得支ふべしとも見えず。ふりかへりて衆に向ひつゝいいて登れと下知すれば我もく、と一度に城壁を乗り越えて城内に注ぎ入る。希臘方しごろとなりて軍艦の方へ退きぬ。

Thus arm'd before the folded gates he came,

Of massy substance, and stupendous frame;

With iron bars and brazen hinges strong,

On lofty beams of solid timber hung:

Then thundering through the planks with forceful sway,



Drives the sharp rock; the solid beam give way,  
 The folds are shutter'd; from the crackling door  
 Leap the resounding bars, the flying hinges roar.  
 Now rushing in, the furious chief appears,  
 Gloomy as night; and shakes two shining spears.  
 A dreadful gleam from his bright armor came,  
 And from his eye-balls flashed the living flame.  
 He moves a god, resistless in his course,  
 And seems a match for more than mortal force.  
 Then pouring after, through the gaping space,  
 A tide of Trojans flow, and fills the place;  
 The Greeks behold, they tremble, and they fly;  
 The shore is heap'd with death, and tumult rends the sky."—Pope

## 第十三卷

さてもチプチエン神は樹木生茂れるメラシアン、サモス山の絶頂より戦場の有様を見下してありけるが無慚にもトロイ兵の爲に打破られつる希臘人の不幸を憐み、イオリツ神の無情を怨み今しも暇々たる大峯を濶歩して降り來れば森林も高丘も其の脚下に震ひ動きぬ。かくて神はわづかに四歩にして海底に達しそこに築きたるきらびやかなる金剛窟にいたり黄金をもて其の身を装ひ黄金の鞭を取り且つ黄金の物の具つけたる駿馬を戦車につなぎて乗り移りさて波濤を押分けてぞ駈けさせける

水底の怪物は海王の過ぎ給ふを見ておのがト、隠處を出で、こゝかしこに游泳し海は悦び迎へて波を披く。されば其の車輪を轉することいと疾くて金軸ゆるゝに及ばざりき。

やがて希臘の軍艦に到り見れば今しもトロイ人は疾風猛炎の如き勢にてヘクトルに従ひて希臘人を攻めたてたり。チプチエンは直に豫言者カルカスと化現してアツヤツクス兄弟を見ていふやう如何にアツヤツクス兄弟、足下等希臘の民を擁護せよや。他の木戸々々は彼等防々に堪へたりたゞ此の一方のみは自ら大神の子と誇りて煽の如くに狂へるヘクトルが向かひたれば心元なし。たゞヘクトル神が彼れを扶くとも或神今汝をして彼れを追返さしむれば疾うく奮ひ起てやと。かくいひて笏を打ちふりて兩勇士を打一打しつ。さて勇力をふき込み置きて飛鳥の如くに翔け去りぬ。兄は弟に向かひていふオリムポス山を守らせ



給ふ或神が豫言者カルカスと化現して我々に勇戦を勧め給へること此處にのこれる足跡にて知られたり。今や勇氣我が五軀にみち／＼て頻に戦はんことを欲すと。弟應へていかにも我が足すゝみ我が手ふるふ。いでヘクトルと一騎打の勝負せんといひ／＼勇み悦ぶ此の時テプテユン神はまた味方の敗衄を悲みて落涙せるアケアン人を奨励し、テウサル、アンテロカス等の諸將を呼び起こして曰はく「耻ぢや汝希臘の壯士。我れは汝等の力にて我が軍艦を防禦し得べしと信ぜしに。いふ甲斐なしヤトロイ人に亡ぼさるゝ時來れるか。彼等が我が艦に迫るとは何たる怪事ぞ。曩には柔弱の小鹿と見えたりし彼等が今は我が艦内へ闖入せんとすこれ豈我が大將の確執と兵卒の怠慢とによれるならずや。たとへ大將に過失あればとて汝等の怠慢するは道ならず。怯懦の輩ならばいざ知らず汝等は希臘の猛將勇卒ならずや。汝等姑息してそれが爲に大災害を招くとは知らずや。耻を知れ嘲を思へ。ヘクトルはすでに城門を破れるぞや」と。此の言に勵まされて一同アツヤツクス兄弟を中心にして金剛不壞の方陣をぞ作りける。たとへマーズ、ミナルツ神到るともことをば破り難うぞ見えたる。楯は楯と相つらなり

甲は甲と相重なり人は人を摩しおの／＼槍をひきしぼりて敵の寄するを待ちゐたり。折しもあれ一隊のトロイ勢ヘクトルを眞先にして恰も大なる壘石の峻岸絶壁より轉び落つらんやうに押寄せ來たり只一突に突崩さんといきまく。されどヘクトルは希臘勢の陣立を見て少時躊躇ひけるが大神我れを扶け給はし彼等いかでか得支へんと思ひかへし急にトロイ、リシア、ダルダニアの諸兵を鼓舞して猛進す。一番にブライアムの一子テーフオパス楯を翳して突きかくるメリオチスいで合ひ槍をふりて其の楯を突きしが槍折れければ引返す。さて又テウサルはブライアムの婿イムブリウスを突倒してそを剝がんとす。ヘクトル駈け來て槍を投ず。テウサル軀をかはして之れを避けアクトルの子アンフィマカスを突く。その時アツヤツクスはヘクトルを目懸けて槍を投げつけしが楯に弾かれて徹らざりき。さる程にアゼノスの勇士等はアンフィマカスを荷ひて退きアツヤツクスはイムブリウスを高くさし舉げて其の物具を剝ぎ且つ其の頭を斬りて敵陣に轉ばしやりぬ。かゝりける程にテプテユン神はいたく我が孫の討死を悲しみ此の報には希臘人を煽りてトロイ勢を惱ましてんと用意し希臘方に槍の名手



と聞こえたるアイドメニウスが戦場に打出でんとするを見るやエイトリヤの王トリアスの聲音に似せて呼びかけ切りにそが勇氣を鼓舞しぬ。さればアイドメニウスは英氣日ごろに一倍して電光の如く馳せ出でんとする折しもたま／＼メリオチスが歸り来るに遭ひければ問うていはく「汝何が故に戦場より引返しつる」。メリオチス應ふらく「唯今デーフオバスの楯を突きしに我が槍折れぬれば他の鎌を求めんとて引返しつ」。アイドメニウス曰はく「我が嘗てトロイ人より獲つる廿一箇の槍は彼處の壁に倚せかけたり。汝其の中にて心になへるを擇び取りぬ」。メリオチス「こは辱けなし。戦場に臨んで勇士の名を重んじ衆に擡んで闘へば我が數多き分捕物も身の邊にはあらず。嗚呼我が苦戦を識り給へるは君のみ」。アイドメニウス「われ夙に御身の勇を識れり。人の識らざるを詫つ要あらんや。すべて人の氣象の勇怯の差はいと／＼見易し。怯者の顔色は常に定まらずそが胸の裡に動悸絶ゆる間なく軀を顛はし居處を轉じ且つ齒震をす。然るに勇者の顔色は自若として動かず變ぜず常に亂軍の中に駈け入らんことを希ふ。されば誰れか汝をもて勇者と見ざる者あらん」と慰めけり。メリオチスは手早く黄銅作

りの一槍を取出だしアイドメニウスと共に敵中に馳せ向かふ。メリオチスはまづ左右か中央か何方より入らんかと問ふ。アイドメニウス應へて「中央にはアマヤックス兄弟並びにチウサル等の名將向かひたれば多分ヘクトルをもあのかしむるに堪へたらん。誠にアマヤックスは人間の最強の者なり彼れはアキリーズと闘ふとも劣るまじきぞ。されば我々は左手の方より進まん」といふ。さらばとて諸共に其方にゆき見れば今や兩軍鏑を削り火花を散らして戦へり。此の時ヨロヅ神はトロイ勢とヘクトルとに勝利を授けてアキリーズの譽の素を作らんとおもはれけれどさりとして希臘勢を滅亡せんと希へるにあらざりけり。さて又チアチユン神は痛く希臘方の敗衄を打慨きて今しも竊に大波濤を潜り出で、頻に彼等を勵ましぬ。此の二神は同じくサタルンの神の子なれどチアチユンは弟なれば公然とは希臘方を助けざりけり。かくて兩軍の死傷夥しくアイドメニウスはプライアムが女カツサンドラの許嫁の婿オスリオニウスを討取り誇りて曰はく「汝プライアムとの約束を果たし其の女を獲たらんにはわれ最も汝を賞め稱ふべかりしに」といひ／＼脚もて牽き去らんとするときアマユウス徒歩にて駈け來た



りオスリオニウスの仇を報せんと突きかくる。アイドメニウスは待ち受けて其の咽喉を一突にしアンチロカスは彼れが馭者を打倒しぬ。デーフォオパス是れを見て赫と怒りアイドメニウスに走りかゝりて急に其の槍を抛げければアイドメニウス牛革の楯にてツトおのが身を覆ひければ槍の規はそれて他の勇士にあたりぬ。デーフォオパス高らかに叫んで其の仇を報いずしてはアソユウスは死せじ。たとへ彼れは冥路におもむくともかく仇を報いば心に悦ばんと誇號す。希臘人大に愁ふ。特にアンチロカスは痛惜し今討たれし勇士某の死骸を楯をもて覆ひて軍艦の方へ運ばしむ。さるほどにアイドメニウスの勇氣はなほたゆまず當たるを幸に薙ぎ拂ひ斬り倒し竟にデーフォオパスに打向かひてげに汝が誇りつる如く一人の爲に三人を殺さんこそ正當の復讐なるべけれ。汝とく來たりて我が祖先の名空しからざるを見よと挑む。デーフォオパス單騎にて彼れに打向かはんか若しは退きて味方と協力せんかど少時たゆたひしがやがてエニアスを勸めて共に敵に駈け向かふ。アイドメニウス少しも動ぜず彼等を待ち受けつゝメロテス、アンチロカス、アスカラフアス等を招いて我が側に立たしむ。さて又エニアスは

デーフォオパス、パリス、アクトール等の諸將を従へて突進し激戦數度に及ぶ。デーフォオパスは又もアイドメニウスを目がけて槍を飛ばせしが却りてマーズ神の子アスカラフアスを突きぬ。されどマーズ神は我が子の討死をば得知らで此の時はシヨイヴ神の命によりて雲深きオリムポス山の絶頂に在したりき。さるほどに双方アスカラフアスが周圍に戦ひデーフォオパスは其の呪を剝ぎ取る。メロテス飛びかゝりて其の腕を打ち其の槍をもぎ取り味方の中に引退く。其の弟扶けて戦場よりデーフォオパスを連れ去る。さてエニアスはアファリウスを撃ちアンチロカスはトリアスを斬る。又アダマスはアンチロカスの楯を突きしがアプテュン神其の槍鋒を鈍らしめき。又メロテスは逐うてアダマスを突き殺しヘレニウスは劍もてデーピラスの頭を斬る。メネレアスは是れを見て大に悲しみ槍をふりて進めばヘレニウス矢を番へて待ち受け胸甲を射しに弾かれて立たず却りてメテレアスの爲に其の弓手をまたゝかに打たれけり。此の時ピサングルといふものメネレアスに向かうて進み來たり初め槍をもて戦ひしが遂に劍と斧を以て打合ひやがて其の鼻柱を碎かれぬ。是に於てメネレアス大にトロイ人を罵



りていはく

「今ぞ汝等も希臘人の畏るべきを知らん諸の損害耻辱を我れに負はしめつる醜物よ。遂に汝等の都を亡ぼし給ふらん大神の震怒を恐れず我が貞操なる妻をかざはかし剩へ夥多の財寶を盗み取りなほ飽き足らで我が軍艦をも焼かんとするは何さいふ嗚呼の所業ぞ。あゝジョーザの神よいかなればかゝる強慾非道なる民を助け給へるぞや。總べて何事にも戀愛、睡眠、唱歌、舞踏にも飽く時の來たらんが常なるにひきりトロイ人の殘忍にして國辱を好むの念は飽くことなし。」

さてもまたヘクトルはテプテユンの神助によりて味方が散々に打破られつるを知らで他の擲手より猛焰の如くに攻立てければアジャックス兄弟は他の勇士と共に前列に進みて血戦し強弓の響高きロクリア人の一隊は其の間に差詰引詰射てければトロイ方殆ど支へかねてぞ見えたる。是に於てポリダマスはヘクトルに説きていはく人萬能なる能はず或者には神勇力を授け或者には奏琴唱歌舞踏の才を與へ或者には智謀術數を授けたまふ。而して人皆己れの才能を識れるならん。さるからにそれがしが見るところによるときは只今諸の將校を集へて一々に意見を叩き敵の軍艦に進入すべきかはた退くべきか評議を決せんこそ最上の

策ならめど。ヘクトル聽きていふ然らば我れ諸隊に命を傳へ來ん間足下は此の勇士等に令して控へさせよと。ヘクトルすなはち他の陣に到りて諸の將校を尋ねけるに既に討死せるもあれば深手を負うたるもありけり。ヘクトル先づパリスを見て汝柔弱の風流男何事をか爲す。諸將は何處にあるぞ。イリュムの最後は正しく來たりぬるはと罵ればパリス應へて我れ些も勇氣を失はず御身が敵艦を進撃し絡ひし時より我れ此處にありて絶えず戦ひぬ。味方の諸將は多く討死し唯テロフォパスとヘレニウスとが恙なきのみ。いでさらば是れより御身に從うて進まんといひやがて他の將校を呼集へて花々しく進撃す。アジャックスこれを迎へて大音揚げてのらく汝等我が軍艦を奪はんとすとも我等にまた汝等を拒まんの腕あり。汝等が我が手に亡びんこと遠からむと。ヘクトル應へて言ふアジャックスよ汝が我が槍頭にかゝりて狗禽の腹を肥やさんこと必定なるをと呼ばれば兩軍の揚ぐる鯨波の聲天地を震動す。

### 第十四卷

ネストール遙に此の鯨波の聲を聞きてマケオンに向かうて曰はく彼の鯨波の次第



々々に高うなるは如何に。われ觀樓（のりかど）に上りてその消息を得て來ん間足下（そ）は此處にありて酒を酌み創痕を洗へやと。やがて其の子タラシミデースのかゝやける楯をかき抱き槍を擧げて出で、見ればこは如何にトロイ兵の爲に破られて希臘兵は志どろとなりて亂れ立てり。老將かくと見て直に大紛亂の中に駈け入るべきかはたアガムムノンの許に行くべきかと少時思ひ亂れしが遂にアガムムノンを訪ふとに心を決しけり。この時しも深手を負へる諸將校の軍艦は遠く戰場を距たりたる彼方の岸邊に列ねられたり。彼等のネストルに出會ひける時アガムムノンは先づ聲をかけ、老將いかなれば戰場を見捨て、此處へ來ませしぞ。敵將ヘクトルさきに我が軍艦を燒盡くさずはイリアムに歸らじと廣言せしが恐らく今其の言を實行しつゝあるならん。嗚呼諸神もアキリースも我れを怒り憎みて遂に希臘人を助けざるかと慨けばネストル答へて、げに然りいはるゝ如し。我等が最も頼みとせし矢倉も落ちたり。今や敵は艦中に亂れ入りて味方と見分き難し。いかにせば良からん。アガムムノン曰はく、我等が築きつる壘も掘りつる濠も其の用を爲さず空濠となりぬるを思へば希臘人が耻辱を蒙りて徒に死せんこ

とテヨーツ神の悦ばせたまふ所ならし。されば我等一同は軍艦を沖中に漕出し其處（そこ）に錨を下し日の暮るゝを待ちトロイ兵の退かん時に纜を解くべし。害を避くるに何の恥辱かある。たとひ暗に乗じて遁るゝも奪はるゝには勝らんずらん。ユリシース大に激して、其の言は何といふ言ぞ。嗚呼止んぬるかな。もはや足下は我黨を御する能はず。落去せんといふ甲斐なしや。黙せよ此の如きは一國の笏を執りて數多の民にかしづかるゝ君主智者の吐くべき言ならず。我等が軍艦を退けんときこそ敵の本望を遂ぐらんととき、味方沒落せんときなれ。アガムムノン宥めて、御身の詰責我が心魂に徹しぬ。されどわれ希臘人の意に逆うてかく命ずるにはあらず。是れよりも勝れたる良策を出ださんずる者あらば我れは喜びて聽かんと思ふといふ是に於てダイオミード突立あがり、其者は此處（ここ）にあり。我がいと年若きを蔑視すなとて勇氣凜然と演説し遂に我等負傷せりともはた戰場に臨みて自ら戦はずとも尙他の人々を勵まさんといふ。譏爰に一決し一同アガムムノンに従うて出づ。ネブチエヌ老翁と化して出で來たりアガムムノンの右手を握りて、彼の無情なるアキリース希臘人の死傷を見て悦ぶならんが彼



れ遂に耻辱を得て空しく死せん。ひとり足下をば神は遂に捨て給はじと慰めけり。

シユノー神はオリムポス山の頂上より見下してテプチユンが花々しき勳をよみしさて又アイダが峯のシヨールツ神を見ては遺恨やる方なく大神の炯眼をあざむかんすべもがなど工夫しけるがつひに一のはかりごとを案じいだしまづブルカンの造りにし天上の秘房に入りて堅く戸を閉ぢて沐浴し諸の穢を淨め一たびそげば天界人界に薫るといふ香油をもておのが肌はだかに塗り且そが不死頭よりふりかゝれる妙なる髪を梳りさてミナルヴの纏ひつる天衣を纏ひ百千のひだある帯をしめ耳には玉環をかけ足には美しき履をはき全身に薄ものゝ衣をはふりやがてオシアス神を招きていひけらく和女いま我が言に従ひ給はんやばたわれ希臘を助くる故にいなみ給はんやといふ。オシアス應へて御心ごこころの底を打明かし給へ。わが力に及ばん程は従ひまつらんといふ。シユノーいふさらば語らんが神をも人も傷かす和女が愛嬌と魔力とを去ばしわれに貸してたべ。われいま諸神の父母なるオシアニユスとテシスとを訪問し修羅闘諍のために久しく絶えにし彼等

が妹背の中を再び結ばしやと思ふ。彼等を和合し得たらん時の我が譽はいくばくぞや。オシアス謹みていかで御求を否み侍らんとてまづきらびやかに縫したる帯を解きぬ。其中には如何なる賢き人の心をも奪ふ愛憐、親昵、巧言などいふ魔力ある物を藏めたり。こを携へてゆかせ給はし事成らぬはあらじといひて渡す。シユノー微笑みてうけをさめ急ぎオリムポスの巔を離れやがてタラスの雪嶺を越えレムノスの市にて死の同胞どうぼう睡眠に遭ひぬ。シユノー彼れが手に纏りておはれ諸の神と人との王なる睡眠よ我が願言ねがひごころをゆるしてよ。其の恩をば我れあらん限り忘れじ。我れいま戀愛の情をもてシヨールツ神を誘かさんずれば御身乞ふらくは彼の神の臉を閉ぢてよ。さあらば其の酬として不壞黄金の椅子を贈らんと。睡眠いふ女神よわが力は萬物の父母たる大洋の激流をも眠らせんこといと易し。さはれシヨールツの神のみはわれはた近く能はず。われ曾て彼れの恐嚇に懲りにき。むかし彼れの一子ヘルキエリスがイリアムより上陸せし日われシヨールツに眠術を施ししに御身其の時悪計を企て海上に荒波を起し竊に彼れをユースの地に連れ去りぬ。さて彼れはまた眠のさめし時大に怒りて遂にわれを奈落の



底に投下さんとしき。されども幸に夜の神に隠匿せられて辛くも其の難をぞ免れたりし。御身は再び我れをしてあの如き冒險せさせんとするかと。マエノ一曰はく「御身は其の子ヘルキエリスの故にマエノ一神がトロイ人をうつくしむと想へるか。たがへりく。我れ妙齡の女神クレオスをもて足下の妻とせんと思ふがかくても否か」と。睡眠大に悦び諸神も照覽われわが日來のぞめるクレオス女を我れに與へんといふ約成りぬといひて爰に約束を堅め諸共に狹霧につまされてアイダ山に着きぬ。さて睡眠はマエノ一の眼を竊みて此方にかくれをりマエノ一ひとり其の絶頂に登りゆく。マエノ一神はほれくど其の姿を見守り剛き心にも情火燃えたちけり

“Great Jove surveys her with desiring eyes;

The god, whose lighting sets the heaven on fire,

Through all his bosom feels the fierce desire;

Fierce as when first by stealth, he seized her clarms,

Mix'd with her soul, and melted in her arms;”—Pope.

マエノ一はく「わきも子車も馬もつれで何地にか行かんとする。マエノ一應へ

て「わなみ久しく絶えにしオシアニユスとテシスとの縁を結ばんと思ひて立ち出でぬれどわが背に告げで行かば逆鱗に觸れんが恐ろしく此處までわざと來つるなりといふ。マエノ一は急ぐことかは今我れをして御身に倚り添はせよ。女神又は女の我が心を動かし、こと今日ばかりなるは覺えずといふ。マエノ一はすましぬと思ひはづかし。かくては他の神々の見んといふ。マエノ一はさらば黄金の雲をもて覆はんとやがて女神をばかきいだきぬ。其の時地には蕩進さふらん、風信子等の草花うつくしく萌えいで天上には黄金色の雲たなびき玉の露雨のごとくふりけり。

さて睡眠は急ぎ希臘の陣におもふき此の由をテプチェンに告げて希臘勢を助けしめ且希臘の名士に向かうて足下等楯を並べて進め而して助け合はばアキリス在らずともヘクトルいかで得支へんと勵ましければ手負の將校等も一時に起ちあがりて隊伍を作り地震の神テプチェンは恐ろしき槍を握りて嚮導す。トロイ方もヘクトルを大將として進み來たり又も激戦となる。さてヘクトルはまづアキリスを目かけて鎗を投げゝるが彼れが肌には達せざりき。此の時アキ



ヤツクスは一巨石をとりて獨樂のやうに廻し彼方へ投げやりしに恰もジョーウ  
 神の靈光に搦られたらんやうにヘクトルは地に倒れぬ。希臘人競ひ進みて直に  
 彼れを曳き去らんとしけるにアケノール、サルピドン、グラウカス等の諸將彼れを  
 取圍みて敵を防ぎ其の車馬の在る所に連れ行き戦車に乗せてエキザンクス河の  
 淺瀬に到り其が全身に水を灑ぐ。ヘクトルはやうく息を吹きかへしけるが黒  
 血迸り出で、眼くらみ再び伏し倒れけり。希臘勢かくと見て勇氣一倍し接戦ま  
 すく激しく兩軍互に死傷あり。就中オイリウスの子アジャツクスの働き最も  
 目醒ましかりき

### 第十五卷

アイダ山の巔なるジョーウ神は夢驚きて後に彼方を見渡せば今しも希臘勢トロ  
 イの前列を打破りたりチブチエ神は其の中に在り。ヘクトルはほどく息も  
 たえく血に塗れて臥し倒れたり。大神はジョエノを罵りていはくさては汝  
 邪術をもてヘクトルを戰場よりおひ退け剩へそが兵士をも逃げさせけるよ。嗚  
 呼汝は我が懲罰の怖ろしきを忘れつるか。我れ嘗て汝の脚に二箇の鐵砧を懸け

汝の腕を金鎖もて縛り大空より釣り下げれば汝雲間に懸りてもがけども甲斐  
 なく諸神あはれと思ひけれどそを援はん術なかりき。又凡そ予が捉らへつるも  
 のは我れ悉く引き摺みて天關より奈落の底に投下す。其の威力のいやちこなり  
 しを記慮せずや。汝の欺騙をどめめんため今此のとを回想せしむと。ジョエノ  
 神聞きて身を顛はし上に涯なき穹窿下に流るゝスチツクス河の水若しくは大地  
 我が誓の證たれ。チブチエのトロイ人とヘクトルとを驚かしは我がそ  
 のかしつるにあらで彼れの心が希臘人を憐みし故なり。我れちども與り知らず  
 といふ。ジョーウ微笑みてまことに汝我れと心を一にして天に在らばチブチエ  
 ン異心を懐けりどもやは我等が意に同ぜざらん。汝の言赤心より出でたらば疾  
 く神々の參集所に參りてアイリスとアポローを呼びて來。アイリスをチブチ  
 エン許やりて戦鬪を止めさせん。又アポローを遣りてヘクトルに勇氣を吹込み  
 再び希臘人を愕かしアキリースの軍艦まで落ちさせん。爾時にアキリースはバ  
 トロクラスを呼起こすべくヘクトル彼れを討取るべく又我が子サルピドンも其  
 の時に倒るべし。さてかくなりて後にこそ我れ汝に力を合はせめ。即ちアキリ



ースはつひにヘクトルを殺すべくミテグルの動議によりて希臘人はイリアムを  
 陥るべし。さもあらばあれベリウスの子が要求の遂げられざる間は我れ決して  
 怒を解かざるべく又あらゆる神の希臘を助くることをゆるすべからずと宣る。  
 かゝりければツエノーは詔を承りてアイダ山を離れて瞬く間にオリムポスに着  
 く諸の神立あがりて酒杯をさしげて迎ふ。女神テミスはいはくツエノーには何故  
 にあはてたるさまにて此處へは來ましとぞ。又もツエノーにおどろかされたま  
 へるか。ツエノー答へてテミスよさることは問はずもあれ。和女もまた彼れ  
 が心の如何ばかり無情倨傲なるかを知りたり。さりながら樂しき天宴をといめ  
 ずもあれツエノーが殘虐の振舞を見聞きしながら宴樂せよ。恐らく彼れが虐行  
 の果は人をも神をも慄ひおのゝかしむるに足らんが尙樂しげなる酒宴に些の餘  
 念なき神もあるべしと唇にばかり笑を含みてわびしげに坐につき眉間に憤を帶  
 び一座を見渡しあゝ天上天下獨尊の大神にさからはんと思ふ心こそあろかなれ。  
 彼れ一たびかうと思へば何事も成し得ぬことなし。既にマーズ神の子は彼れが  
 爲に殺されたり。無限の神力には敵しがたし如何なる殘虐も堪へ忍ぶより外は

なし。マーズよ御身の愛見はツエノーの爲に殺されたり神命ならば是非もなき  
 にあらじかと宣りければマーズ神低れたる手もて其の肥腴をうち我れ彼れが暴  
 虐を忍びてあらんや。オリムポスの神々よ我が子の復讐に向かはんずる我れを  
 難ずるな。我れ得忍ばずといひさま急に軍装つけてすでに打ち出でんとす。ミ  
 チルゾ神かくと見て急に其の坐を飛下りて兜を脱ぎすて楯を投げやり黃銅の槍  
 を突き立てマーズ神をおし制め思やマーズの命足下の耳は聳ひたるか足下の  
 精神はなきか。ツエノーの詔を何と聞し。今足下不法をか働かば獨り足下の  
 みの不幸かは他の神々の災となるを知らずや。ツエノー怒りてトロイ希臘を打  
 ち捨て我々に逆ひつゝ誰彼を擧げず捕捉せば如何に。一子の爲に憤怒して諸の  
 神に災する勿れとやうに推しなだめてマーズをして坐に就かしむ。かくて  
 ツエノー神はアイリスとアポロとの二神にツエノー神の詔を傳へて退く。二  
 神は急ぎアイダ山に參り大神の前にかしこまれば神まづアイリスに汝ネプチュ  
 ン許おもふき戰場を退けといへ。彼れもし命に従はずば我が力彼れのに勝れる  
 ぞといへと命ず。是に於て天使アイリスは天つ雲を分けてネプチュンの傍に天



降り云々と詔を傳ふ。ネプチユン聞きて大に怒り、怪しかる廣言を聞くものかな  
 たどひ彼れのカ我れのに勝りたりとも暴力をもて我を抑へんとは何事ぞ。我等  
 は等しくサタルンの子なり。其の領こそ殊なれ位に上下なし。萬物を三分して  
 我れは大海原を、プルートは常暗の國を、ゾーヴは高天原を領す。而して此の  
 土とオリムポスとは我々の共有領なり。我れ強に彼れが命に従ふべき理なし。  
 彼れは須からく其の分を守るべし、恐嚇は其が兒女に用ひしめよと罵る。アイ  
 スいふ、このまゝを復命すべきか乞ふ再思せよ。改むるは明なり、忿怒てふ夜叉は  
 長上に附隨せりと知りたまへと。ネプチユン應へて、御身の諫いと理なり。我れ  
 怒解けずと雖も、今枉げて彼れに従はん。さりながら彼れ若し竟に我れをもミ  
 ルヴをも、ユエノをも、マルキユリーをも、ブルカンをも容れずほしいまゝにトロ  
 イを助けなば、我れと彼れとの誼、無究に破れん。かくいひて、ネプチユンは海中に  
 沈みけり。此の時、ゾーヴ神はアポロ神に向かひ、ネプチユン已に海に歸り  
 たれば、汝へクトル許行きて、勇氣を鼓舞し、希臘人を軍艦まで退かせよと命ず。ア  
 ポロすなはち飛鳥の如く翔下る。今しもヘクトルは神氣漸く回復せり、アポロ

其が傍に立ちて如何にと問ふ。ヘクトル應へて、剛勇なるアジャックスが巨石  
 もて我が胸部を打ちければ、我が呼吸一たびたえて、黄泉に到りぬと思ひきといふ。  
 アポロいはく、汝勇氣を回復せよ。ゾーヴ神、汝の擁護として、アイダ山よりア  
 ポロ神を降らせたるぞ。汝騎兵をひきゐて、霧地に敵艦を襲へかし、我れ嚮導し  
 て希臘の勇士等を走らせんといひ、神力を吹込みければ、ヘクトル俄にたけく  
 なりて、荒き馬の平原を駆け走らんが如くに馳せ廻りて、騎兵を督勵す。希臘勢是  
 れを見て、色めき立ちて見えけるが、長槍の名手なる希臘の勇士トウアス、味方に向  
 かうていふ、ヘクトルはアジャックスの手にかゝりて、斃れつと思ひしにかゝる不  
 思議は、必定ゾーヴ神の所爲ならし。大衆は疾く軍艦に退け。我れと思はん剛  
 の者は、蹈み止まりて彼れを遮れやと。一同此の言に従うて、アジャックス、アイ  
 ドメニウス、チウサル、メリオテス、メシス等の諸猛將を中心として、堅陣を作り、決然と  
 して、トロイ勢を迎ふ。トロイ勢ひしと押し寄せ來たる。ヘクトルは之れを率  
 ゐて、馬歩し、アポロは肩に白雲をまどひ、赫耀たる大楯を掻きて、先進す。かくて  
 閃電雨軍に起こりて、箭は雨の如く降り、劔は電光の如く閃く。アポロ初めは其



の楯を動かさでありけるがやがて希臘人の面へ向けてそれを幾度か揮れば希臘人震ひおのゝき勇氣頓に失せて崩れ立つ。ヘクトル、エニ阿斯、ポリダマス、アゲノール、パリス等勇みたちて突進し夥多の敵兵を討取る。希臘しどろとなりて濠池に轉び落ちつひに蟲壁のうちに逃げ入る。ヘクトル馬に鞭ちトロイ軍を勵まし大音に呼びひて進む。アポロイは足もて濠池の斷岸を蹴崩し且たちどころに棧橋を造る。又其の蟲壁を壊つことの容易なる小兒が土砂をもて作れる甃具を碎かんが如し。さるほどに希臘人は悉く艦中に押込められ皆々手を舉げて神を呼ぶ。なかんづくキリストは此の大難を免れさせ給へどキョーヴに祈念す。トロイ人は此の時疾風に乗じたる怒濤のやうに軍艦に押寄せ來て襲撃す。

バトロクラスはユーリピラスの帷幕のうちに在りて其の創を療治してありけるが希臘人の叫喚逃走の聲を聞きて手もて其の双の腿をうちて嘆ずらく我れ斯くしてあるべきにあらず。我れアキリースを説きて出陣せしめん。神助によりて説き勧めば彼れなどか吾が言に動かされざるべきと。やがて走りて出づ。此の時希臘勢はトロイ勢をおひしりぞくること叶はずまたトロイ勢も希臘の本營を

破るに及ばで尙も入亂れて闘ひたり。ヘクトルはアジャックスを目がけて進みアジャックスは軍艦に火をかけんとせしかレトル(ヘクトルの甥)を突倒す。ヘクトルかくと見てアジャックスに槍を投ず。規はづれて其の従者を斃す。アジャックスおのゝきてチウサルを顧み見よ我が親黨マストールの子はヘクトルの爲に殺されたり。足下アポロイより授かりたる弓箭をばいかにせしといふ。チウサル領きて弓をひきしぼりてトロイ人を射る。まづポリダマスの郎黨クリタスを斃し次にヘクトルを射んとしけるがキョーヴ其の弦を斷ち切りけり。チウサル歎じて嗚呼神我黨の武運をちいめ給ふか今朝新に張りつる弦の此の如く斷れるはといへばアジャックスさらば弓箭を捨て、槍楯をもて戦ひ敵を我が艦に入らしめなと勵ます。ヘクトルはチウサルの仕損じけるを見てキョーヴの我黨を冥助し給ふと此の如く炳焉なり。汝等敵艦に乘入りて一人も餘さず討取れ。彼等本國に退かば我か妻子と家財とは完全なるぞといひく指揮す。アジャックスもまた味方を勵していふ今こそ我れこゝにて死するか敵を破るかの時なれ。我が軍艦ヘクトルに奪はれなば汝等徒歩にて海を渡り歸り得べしと思ふか。彼



れが我が艦を焼かんとするを見ずや。力を併せて防ぎ戦へ。一同生死も共にせよやと。かくて又大激戦となり兩軍の將卒殺傷算無し。ヘクトルはトロイ勢をアジャツクスは希臘勢を指揮す。希臘人黃銅の垣を作りて防ぎメテレアスはアンチロカスを勵まして敵の勇士を討取らす。アンチロカス跳り出で、一將を殺しけるがヘクトルの向かひ来るを見て味方へぞ遁れける。トロイ勢はますく軍艦に逼り來つ、あはやジョーヅ神の宣命は成らんとしけり。此の時ジョーヅ神は徐に軍艦に火焰の擧がるを待ちたりそを期としてトロイ軍を逐ひ退け希臘人に譽を與へんと思ひ定めたればなりけり。さるほどにヘクトルは深林高山に野火の荒れいでたらんやうに巨槍をうちふり口は泡沫を嚼み眼はちそろしき眉の下にかトヤキ馬毛の飾を頭上にふりみだし一時に敵軍を粉碎にせんとはやりけれど希臘勢もまた巉岩が風濤の來たり襲へるを凌ぎて海原の中に屹立したらんが如く一步だに退かず。かゝりけれどヘクトル四邊に炬火をふりかトヤかしてひまなく攻め上りければ希臘人こらへかねて色めく。此の時テストールは彼等を奮勵しミテルヴの神は彼等の眼より翳を吹拂ふ。其が中にアジャツクスは二十

二キエピッドの大なる棒を掲げて大跨に甲上の上に進みいで此方彼方に飛移りつゝ大空にも韻かん大音にて味方を勵まし又も大に激戦す。希臘の兵は必死を究めトロイ人はひたすら軍艦を焼きて敵の勇士を塵にせんとす。いまはしも遠矢投槍の戦闘ならで雙方互に接近し斧、鉞、劍もて打合ふ。黒血流れて地を漂はす。ヘクトルは敵艦の艦の端をまかど捉らへて疾く炬火もて來火をくと呼ぶ。アジャツクスも支へかねて少許退きながら尙長槍もて炬火を持來る敵兵を突やり突やり防ぎ戦ひやあゝ味方の勇士汝等の存亡は瞬間にあり。汝等の外に汝等を助くるものなきぞと呼ははりくして希臘人を勵まし敵十二人まで突き殺しける。

## 第十六卷

さるほどにパトロクラスはアキリーズの傍へゆきて岩間より湧き出づる黒き泉の如き涙を流しければアキリーズ見やりて哀を催して云ふやうやよパトロクラスなどて足下は母の袂に縋りて後を追ふ稚女のやうに打啼くぞ。我れに異なる消息をや齎し。はた故郷よりの音信をや聞きし。足下の父も我が父も恙なく



て在せりと聞きつるに若しは希臘人のかく殺さるゝを見て悲しさに泣くか足下  
 が胸襟をうちあけて告げよと。パトロクラス太き息をつきて希臘第一剛の者よ  
 おはれ怒を解けかし希臘人が大悲歎の秋こそ迫りたれ勇剛のものは皆深手を負  
 ひてうち臥せるに君が残忍なる心はなほ頑に移らざるか今しも此破滅より希臘  
 を救はずば何れの時にか希臘を救はんつれなき心やはなはだしペリウスは君の  
 父にあらしセチスは君の母にあらし荒海や君を生みし巖や君を胎し情なの心か  
 な君はッヨーズのかしこき託宣を畏れかしくみてかくはたゆたひ給へるか。さ  
 らば我をだに遣り給へ。願はくはミルミドンの残兵をやつがれに貸し給へよ。  
 君の物具をやつがれが着るを許せ。トロイ兵やつがれを見て君と誤りて退き希  
 臘人そが爲に息を繼ぐの機あらば我黨の竟に疲れたる敵を攘はんこと難からじ。  
 いかで此の願を容れてよと焦燥ちてかき口説く。アキリーズ太き息をつきて應  
 ふらくペリウスの子は恐といふものを知らず。我れはッヨーズの託宣をも意に  
 介せず。はた何事をか憚らん。たゞ我れをないがしろにせしアガ멤ノンの暴  
 虐をこそ憎しと思へ。されどそも亦過ぎにし事ぞ兎も角もあるべし。さはいへ

敵の吶喊の聲の我が軍艦に逼りて我が黨全滅になん／＼としたらんまでは我れ  
 誓ひて此の忿怒を解かじと定めつ。今更らに其の誓を破るべしや。さりながら  
 今しもトロイ兵は我が軍艦を取り捲き希臘人は海濱の一隅に集合して漸く危し  
 とこそ見えたれ。よし我が物具とミルミドンの猛兵とを貸すことばかりは許す  
 べし。足下我れに代はりて敵を討て。彼等トロイ人は我が兜の輝きを見ざれば  
 こそ膽太くも全市を擧げて突き進み味方を取圍みて暴威を揮へれ。我れあるを  
 知らば彼等忽ちに逃げ走らん。今はダイオミードの槍ふるふ音もせずアガ멤  
 ノンの呼ばふ聲も聞こえずたゞヘクトルが其の兵を指揮して味方を打ち崩す勝  
 鬨の聲のみぞ聞こゆる。汝疾く行きて彼等を逐ひ味方の軍艦をな焼かせよ。さ  
 はれ汝大なる譽を得まくほりせば我が賊を服膺せよ。他無し汝敵を逐ひ攘ひ丁  
 へたらば直に歸り來よ。たゞヘッヨーズが汝に高名を許さんとも久しく敵と戦  
 ふな。我が耻辱とならんずるぞ。勝に乗りて深くな敵陣に入りそ。アポローが  
 深く彼等を愛しめばなり。單に軍艦を救ふことのみを足下が任とせよと。

Such conference held the chiefs; while on the strand